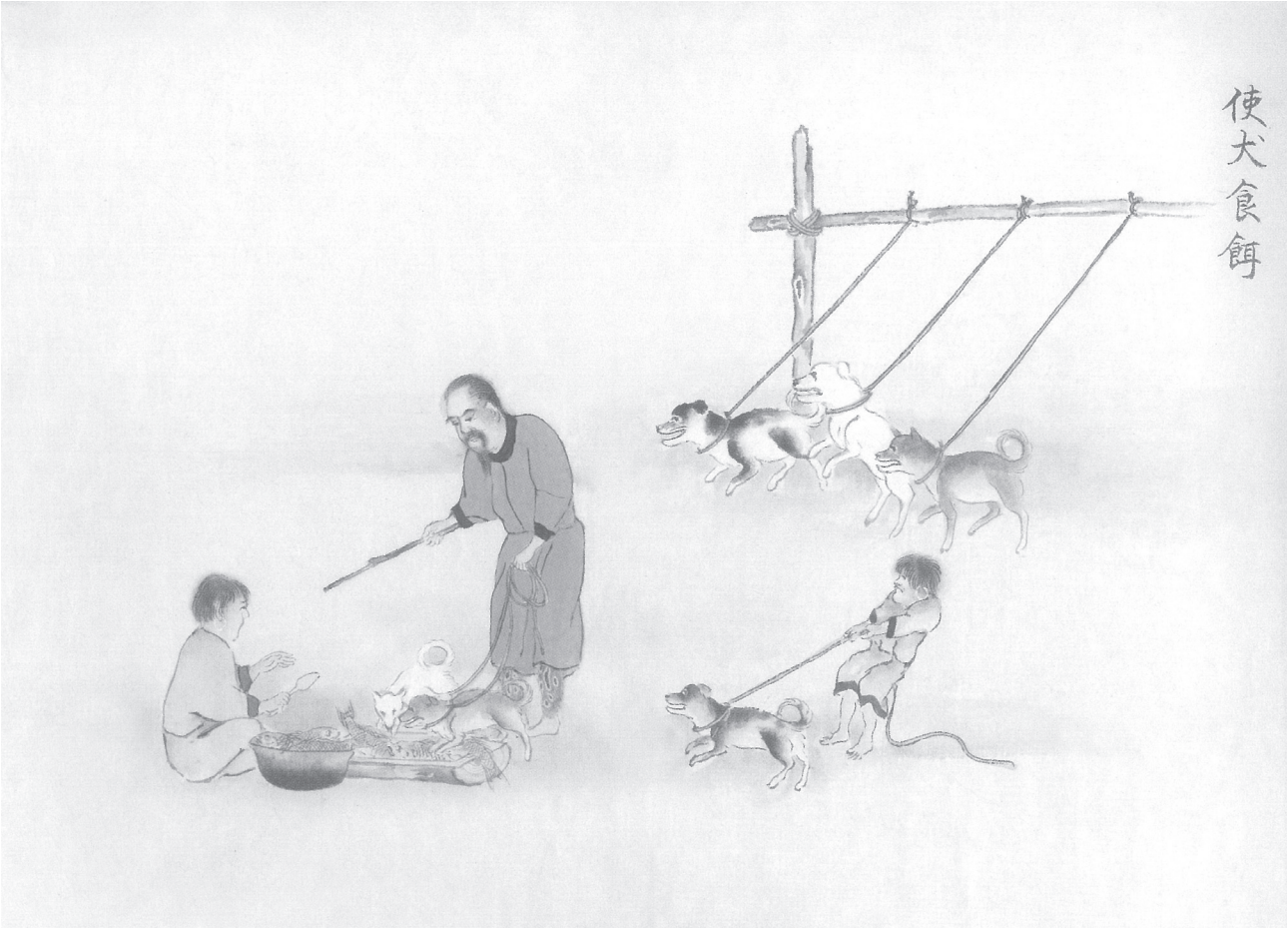
北海学園大学
学芸員課程学事報告書-30



2018年3月

目　次

巻頭言

網走市内で開催中の二つの企画展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北海学園大学教授　手塚　　薫　1

網走市立郷土博物館 特別企画展「子どもたちの昭和展」・・・網走市立郷土博物館学芸員　瀬尾なつみ　3

学芸員課程　科目担当者から

博物館に有効なフロア・プランと設備についての基本的考え方・・・・・・北海学園大学講師　水崎　　禎　9

石巻市での体験

被災ミュージアム再興活動と震災復興・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科３年　土肥　京夏　18

石巻における被災ミュージアム再興活動を振り返って・・・・・人文学部日本文化学科３年　森川日菜子　22

礼文島での体験

礼文国際フィールドスクールを終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科２年　蟬塚　咲衣　26

礼文国際フィールドスクールに参加して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・法学部法律学科２年　佐々木理子　32

礼文の自然と国際交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・工学部生命工学科３年　野間梨衣奈　36

新ひだか町での体験

新ひだか町博物館での実習を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科２年　赤坂　潮音　40

新ひだか町博物館での研修を振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科２年　山本ももか　44

課程科目学生レポート

ミニミュージアムのねらいと講評・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北海学園大学教授　手塚　　薫　48

博物館経営論課題、ミニミュージアム制作を終えて

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科３年　手鹿　玲那　49

課程科目学生レポート

2017年度　博物館概論 / 博物館資料論 講評・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北海学園大学講師　水崎　　禎　57

博物館資料ドキュメント『丸メガネ』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科１年　孖田　あみ　60

博物館資料ドキュメント『木彫りの熊（熊ボッコ)』・・・・・・人文学部日本文化学科４年　細川　夏歩　68

博物館資料ドキュメント『ピアノ楽譜 ― 上手になれるブルグミュラー』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科１年　宮崎　　栞　75

博物館資料ドキュメント『アンダルシアン・ブックカバー』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・人文学部日本文化学科１年　山田穂乃花　81

編集後記・・・　87

＊学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。

巻頭言

網走市内で開催中の二つの企画展

北海学園大学教授　手塚　薫

厳しい寒さが続く 2 月末の網走に出張した。オホーツク海に面した道の駅に行くと、海上には流氷が連なり、観光砕氷船「おーろら」が観光客を沖合へと運んでいた。SNS などの宣伝効果で乗客数も今季 10 万人を突破する勢いという。道の駅には網走でロケが行われた滝田洋二郎監督作品の映画「北の桜守」で使用された「江蓮食堂」の撮影セットも展示されていた。樺太からの引き揚げなど史実に基づいた物語である。観光客も物珍しそうにこのセットの前で撮影していた。北の自然や大地を舞台にした映画も観光資源になりうることを知った。

観光砕氷船「おーろら」と流氷

北の桜守「江蓮食堂」の撮影セット

さて、出張の目的は北海道立北方民族博物館で開催された博物館資料収集評価委員会に出席するためであったが、その合間に、ちょうど 1 階ホールで開催されていた企画展「永遠のジャッカ・ドフニ　北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニの 35 年間」（2/3-3/31）を拝観した。

網走市にはかつて「ウイルタ」などの北方先住民族の文化を紹介する資料館があった。その名がジャッカ・ドフニである。ウイルタ語の元の意味は大切なものを納める家であるが、単に有形の文化財を納めるだけでなく、先住民族としての誇りやアイデンティティをも伝えるという意味があったことが、企画展の展示パネルには記されていた。樺太の少数

民族の多くは敷香（現ポロナイスク）近郊オタスに集められ、日本の施政下で暮らし、若者は軍事訓練を受けるなどした。そうした一人ウイルタのダーヒンニェニ＝ゲンダーヌ氏は故郷樺太を離れ、シベリア抑留を経て網走で暮らすことになる。ゲンダーヌ氏らによって 1978 年に開館したジャッカ・ドフニは、多くの人々の支援に支えられ、少数民族が自ら資料館を設置して情報発信を続け、展示資料にも触れることができる先進性をそなえた傑出した博物館であった。残念ながら 2010 年にその活動を終え、数百点の所蔵資料は道立北方民族博物館に移管された。つまり、今年は開館 40 周年にあたり、特別の意味を有する企画展になったというわけである。儀礼用具や衣装、印刷物など往時を偲ばせるに充分な 150 点が展示されていた。小規模ではあるが、網走ならでは歴史と伝統を感じさせる好企画であった。

一方、網走には 1936 年に開館した北海道で最も歴史の古い博物館の一つ網走市立郷土博物館がある。故米村喜男衛氏が長年にわたり収集した考古、民族資料三千点が提供されコレクションの基盤となっている。網走の豊かな「自然」と古代から現代に至る「歴史」の流れを展示の要としている。

平成 26 年に北海学園大の学芸員課程を修了し、この博物館の学芸員として活躍している瀬尾なつみさんのご案内で、2 月 1 日から始まった特別企画展「子どもたちの昭和展」を見学した。今号の特集で瀬尾さんご自身にこの企画展に関するご寄稿をいただいたので、ぜひ読んでいただきたい。

目を引いたのは展示上の奥に再現された男の子の部屋である。ランドセルが放り出され、お菓子や玩具、ゲームが床一面に広がっている情景がとてもなつかしく、またほほえましく思えた。なぜ女性の瀬尾さんが男の子の部屋を再現したのか聞いてみた。博物館にある資料は圧倒的に男の子のものが多く、女の子が使っていたものは少ないと聞き得心した。女性は男性に比べ、持ち物を整理したがる傾向にあるのかもしれない。展示リーフレットにあるように「誰もが必ず過ごしてきた子ども時代」を、想像力をふくらませながら自分の体験と見比べて展示を楽しむ工夫が随所にこらされてあり、ほのぼのとしたあたたかさを感じさせる展示に仕上がっていた。展示を手がけた瀬尾さんご自身は平成の生まれで昭和時代はご存じないはずだが、その断絶をいささかも感じさせない。その背景には、しっかりとした資料の来歴調査や昭和世代への聞きとりなどのご苦労があったのだろう。博物館学芸員が本来果たさなければならない仕事の内容について非常に多くのことを教えられたような気がした。

網走市立郷土博物館 特別企画展「子どもたちの昭和展」

網走市立郷土博物館　学芸員　瀬尾　なつみ
人文学部日本文化学科　平成 25 年卒業

１．はじめに

▲網走市立郷土博物館

北海道の道東に位置する「網走市」へ訪れたことはあるだろうか。

今や監獄などで有名となった街ではあるが、夏は列車が走る風景と共にエゾスカシユリなどの植物の群落を楽しめ、冬はオホーツク海に接岸する流氷や氷結した網走湖でのワカサギ釣りなど、１年を通して観光で賑わう場所だ。

私の勤務する網走市立郷土博物館は、そんな網走の「歴史」と「自然」を伝える総合博物館をめざしている。

昭和 11 年、史跡モヨロ貝塚を発見した米村喜男衛氏が長年にわたり収集した考古・民族資料 3,000 点からはじまった、北海道で最も歴史ある博物館の一つでもある。

面積でいうと他の総合博物館よりは小さいともいえる博物館ではあるが、田上義也氏が設計した建物は､赤いドーム屋根やステンドグラス、らせん階段などが特徴的で、建物そのものが後世への資料となる博物館である。

１年を通して、郷土の歴史・自然・天文に係わる行事や子ども向け行事を開催するほか、年２回、特別展示をおこなっており、夏は自然・冬は歴史をテーマに毎年様々な題材を扱っている。

私が博物館に配属となったのは平成 28 年からであり、学芸員としての勤務経験はまだ浅いが、今回初めて特別展示を担当させていただく機会に恵まれ、そして手塚先生にもそれを文章としてまとめてみてはどうかというお話をいただいたため、今回その初めての特別展示「子どもたちの昭和展」について述べさせていただきたいと思う。

２．　特別企画展「子どもたちの昭和展」

▲メンコ遊びを再現した様子

平成 30 年２月１日～3 月 31 日開催の「子どもたちの昭和展」では、おもちゃや学校の道具などの生活資料を基に、昭和の子どもたちの暮らしを振り返るというテーマで展示をおこなった。

展示の準備では、まず半年程前から、展示室と展示ケースの寸法を元に、ケースの配置と展示の構成を図面上で考え、書籍などで知識を得ながら、収蔵資料の中から展示する資料の選定をおこなった。

この博物館では､建物の面積が限られているため、特別企画展をおこなう部屋は常に行事などで使用している。そのため、実際に資料を展示することができるのは、開催 2 か月前の 12 月からであった。

今回はポスターに子ども部屋の再現展示の写真を使用すると決めていたため､12 月に入ってからすぐに再現展示を作製し、写真を撮影。ポスター・チラシ・パンフレットの作成はそこからのスタートで、題字のフォントやデザイン、イラストなどを全て自ら作成しているのだが、印刷会社と何度かの校正を重ねるだけでも完成までに１ヶ月は必要であるため、限られた時間の中での準備であった。

実際に資料を展示ケースに入れてからも、資料の見せ方や配置に頭を悩ませ、効果的な方法を模索する日々。給食の変遷や空き地で遊んでいる子どもの様子を､キャプションや写真ではなくもっと視覚的に展示できないかと考え、食品サンプルの作り方を参考に、樹脂粘土でコッペパンやおでんなどを作製してみることにした。また、展示室に土を敷いてビー玉やメンコ遊びの様子を再現するなど、当時の雰囲気がよく伝わるように再現展示も充実させた。

ポスターにも使用した子ども部屋の再現では、開催期間は冬であるが「小学６年生の男の子の夏休み前」を再現することとした。当時虫取りが流行っていたことなど、夏の方が多くの要素を展示できると思ったからである。

床に口が開いたままのランドセルが投げ出され、勉強にとりかかろうとしたが結局スナック菓子を食べながら友達とテレビゲームをはじめてしまった。という小学生にありそうなストーリーを考え、ジュースとコップを二人分用意したり、学習机に開いた教科書とノートを配置したり、遊びかけのおもちゃを畳に散らかしたりした。特にその設定を展示に明記する

ことはないが、自身の中で設定を決めると、スムーズに再現でき、楽しい作業でもあった。

【展示概要】

▲学校の机と給食の再現

▲学校資料の展示

▲年表とおもちゃ資料の展示

▲空き地の再現展示

3.　郷土の博物館ということ

網走市立郷土博物館はその名の通り、網走市民や来館者へ郷土を伝えていく博物館であり、従来の企画展も「網走」に係わる展示がおこなわれてきた。したがって、今回の企画展でも、常に必要なのは「郷土網走」を展示に盛り込むことであった。

しかし、今回の「子どもの暮らし」の展示に関して、「網走」と範囲を限定すると参考文献がほとんどない。そのため、実際に網走の方々に聞き取りをすることが大切な作業となった。

たとえば、学校給食の再現展示では、昭和 40 年代の給食で有名な「ソフト麺」があるのだが、網走で実際に何人かから聞き取りをしても、「ソフト麺は食べた記憶がない」という。そのため、すでに作ってしまっていたのだが、ソフト麺をやめて、実際に食べていたという袋入りのラーメンへ作り直すことにした。

このように、学校給食だけに留まらず、全ての事において、一つ一つ実際に網走でも身近な出来事であったかどうかを確かめながら作業を進めていく必要があり、それが展示準備の上で苦労した点でもあった。

▲樹脂粘土とレジンで作製した給食
（ラーメン・黄桃・ビン牛乳）

4. 展示公開後

展示公開までは大変慌ただしく、公開２日前にようやく作業は終了。無事に公開日を迎え、多くの来館者を迎えることができた。

２月の網走は流氷のシーズンで、従来観光客が多いのだが、今回展示を見に来て下さる方は、網走市民の方が多く、さらに、展示を作成している最中は「昭和生まれの方が懐かしさで展示を見に来る」と予想していたのだが、実際は親と子、祖父母と孫など、平成生まれを含めた二世代・三世代で来館し「お父さんはこれで遊んでいたんだよ」などと対話しながら観覧している姿が多く見られたのは驚きだった。

▲昭和 20 年代の机と椅子に座る孫と祖父

しかし、私自身も展示を作るにあたって自身の祖父母などに話を聞きながら進めたため、同じように来館者の方も楽しんでくれたことは、嬉しい事柄でもあった。

展示公開後の２月４日には展示説明会をおこなった。今回の展示を来館者の方に紹介するのだが、そもそも来館者の方は昭和時代を経験している方ばかりで、私よりも当時のことについて詳しい方がほとんどである。そのため、説明する内容以上に予備知識もつけておく必要があり、展示公開を迎えほっとしたのもつかの間、さらなる勉強に追われることとなった。

同時に、苦労して作り上げた展示をより多くの方に見てもらうためには、広報活動も欠かすことができない。報道関係や市内各施設への周知もおこない、取材に来た記者の方からの質問の応対もおこなった。

また、公開期間は 2 か月間あるため、定期的な展示のメンテナンスも必要だった。空き地の再現展示は土を敷いているため、乾燥によって割れができたり、子どもが足をかけて土が散らばってしまっていることもあるので、こまめに修正をする必要があった。さらに、来館者の様子に合わせて、ケース内の資料の入れ替えや新たな資料の追加が必要となることもあり、展示を楽しみに見に来てくださった来館者の方に常に良い状態の展示を保つというのも公開後の仕事の一つであった。

▲市内小学校の授業での見学

５．祖母と作った子どもの衣服の再現展示

前述した「祖父母に話を聞きながら展示を進めた」ことに関して、一つの例として、子どもの衣服の展示を作った際の話を紹介したいと思う。

戦後、日本では洋裁ブームが起き、全国各地に洋裁教室が開かれていった。したがって、当時の子どもたちの服装もまた、母親やその周囲の人による手作りの衣服の時代であった。

私の祖母は昭和 16 年生まれで、まさに自分の子どものために洋服を作っていた世代である。そのため今回、私は祖母に教えを乞いながら、当時の方法で子ども服を再現し、それを展示するということを考えたのである。

題材は当時３歳であった私の母親のワンピースで、写真と祖母の記憶を元に生地を買い、祖母が 18 歳の時に書いたという、洋服の型紙が沢山書かれた 60 年前のノートをもとに再現することとした。

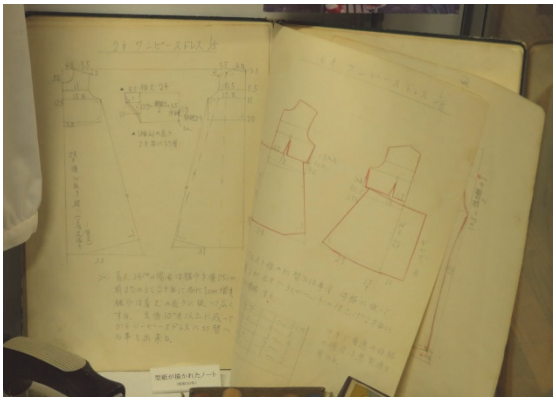
しかし、洋服づくりというのはとても難しい。型紙の形はパズルのように難解であるし、実際に着て動くことを想定するため、脇や襟の部分にバイアス（生地を 45 度の角度に帯状に切ったもの）を縫い付けて伸縮するようにするなど、外見からは見えない細かな作業が多い。

▲完成したワンピース（２着）

実際に祖母と共に製作を開始すると、祖母は久々の洋裁にも関わらず素早く作業を進めていく。その姿からも、当時どれだけ子どものために洋服を作っていたかがうかがい知れるようだった。

そして、決して私一人では完成させることはできなかったであろう、子ども服の再現展示が出来上がったのである。

展示をつくるにあたって、常に書籍という参考資料は欠かせないが、実際に「服を作る」や「当時の話を聞く」という経験をしたことで、自らの肌で当時の場景を感じることができ、またそれを展示に生かすことを学んだのであった。



▲型紙が書かれたノート

▲展示風景

６．おわりに

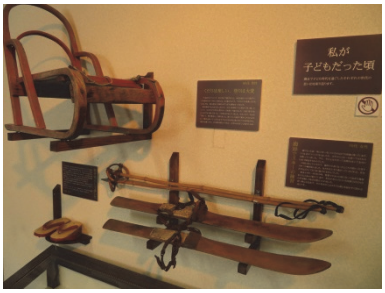
今回初めて特別展示を担当させていただいたが、「子どもたちの昭和展」という大きなテーマの中で、見に来て下さる方に何を伝えたいか、どこをメインとするかなどの構成を考えるのはとても大変であった。

展示の配置一つでも、どの順番で置くとより効果的か、どうすれば見やすいかなど、考えることがたくさんある上に、答えがなかなか見つからない。

そんな中でもそのヒントを出してくれるのは、数々の展示をこなしてきた博物館の先輩方であり、今回の展示においてもたくさんの助力をいただいた。さらに、学校の机と椅子、紙芝居の道具、資料を展示するための台など、ほとんどのものを学芸員の先輩が手作業で作製してくださった。

資料や展示に対する知識はもちろん必要だが、実際にやってみる「経験」というものがどんなに大きな力であるかということを今回強く感じ、同時に学生時代にもっと様々なことに興味を持ち、色々な経験や知識を蓄えておけばよかったと日々振り返っている。

私は知識も技術も全てが未熟であるが、経験を積み重ねながら少しずつ前進していけるよう、これからも日々の業務に励んでいきたいと思っている。



▲先輩学芸員手製の昭和 20 年代の学校の机、紙芝居、資料展示治具

博物館に有効なフロア・プランと設備についての基本的考え方

北海学園大学講師　　水崎　禎

はじめに

博物館の建物としての構造においてフロア・プラン（間取り）は重要な事項の一つである。なぜならば、フロア・プランによって博物館での活動の効率が左右されるからである。

展示エリアについては単なる陳列から、魅力的、かつ刺激的な空間設計へと、視覚的なインパクトとしての美しさのみならず、展示内容の理解を助長する展示空間設計にも様々な試みがなされ、進化してきた。しかし、魅力的な外観や展示スペースを持っていても、博物館で働く人々の職務にとっては非常に使いづらい建物も多く存在する。故に博物館のハード面である建物のフロア・プランについては来館者には見えない、職員のための空間についても検討される必要がある。この件についての私の考えは『北海学園大学・学芸員課程・学事報告書』の第 25 号(1)、および第 29 号(2)で述べている。

私が担当する学芸員課程の各科目の授業においても、博物館のフロア・プランは重要な項目であると説明している。その際に私が引用しているのは、効果的・機能的な博物館のフロア・プランとして私が大学院生の時に作成したものである。これは大学院博物館学部のグループ・プロジェクトの一環として構想された仮想博物館の設立計画書内におさめられており、サンプルとしても活用できると考える。私は第 5 章を担当し、博物館で必要な空間のリストと効果的な間取り図面を作成し、各空間の機能的な配置とそこに求められる設備について述べている。(3)

博物館で所有する資料の分野、資料の数、博物館の活動内容により、求められる機能や条件は異なるが、博物館として共有できるフロア・プランのコンセプトの基本形として役立てばとの思いのもと、この機会に和訳することにした。

英文での原文作成の背景

■アメリカ合衆国、ネブラスカ大学リンカーン校大学院博物館学部
　博物館学 850：博物館の運営と管理
■グループ・プロジェクトとして、仮想博物館の設立企画書を作成する
■仮想博物館の設定
　□博物館の名称：カウンシル・ブラフス博物館
　□所在地：ネブラスカ州フォート・カルフーン
　□資料の分野：歴史学、人類学
　□年間予算：650,000 ドル
　□建物：床面積が 40,000 平方フィートの新たに改装される一階建て建造物

■上記の条件に基づいた設立企画書において、水崎禎は、
「第 5 章：博物館のフロア・プランについての解説と間取り図」を担当
■発表日：1999 年 4 月
■フロア・プランは小～中規模サイズの博物館の間取りの原型のサンプルとして活用できるよう、機能面を重視し、わかりやすく 1 階建ての四角い床面形状で作成している。

和文への翻訳にあたって

■あくまで博物館活動を遂行するにあたり効率の良いフロア・プランを博物館専門家目線で表現したものである為、このフロア・プランがそのままで建築専門家による基準を満たすものではない。
■ドアの幅、各空間の面積等は、おおよその希望サイズとなっている。また、サイズの単位は原文の「フィート」のまま訳している。窓の位置については、図では記していない。
■作成された 1999 年当時のアメリカ合衆国内での状況において考えられた内容である。
■データ、参考文献等は作成当時の 1999 年のものである。
■英文から和訳した際には、わかりやすくコンセプトを伝えるため、固有名詞に言及しない箇所、表現を修正した箇所がある。また、間取り図にも一部修正を加えている。
■和訳文中の注記番号は、翻訳の際に加えたものである。

◇◇◇

フロア・プランについての解説と間取り図

ミュージアムの建物は、床面形状が 160 フィート×250 フィートの長方形で、床面積が 40,000 平方フィートの新たに改装される一階建て建造物である。

防犯

防犯カメラは公共エリアに設置され、監視用モニターは入館受付＆インフォメーションデスクにある。非常口が開けられると警報機が作動する。博物館の閉館時には、一般用出入口と業務用出入口の開閉でも作動する。これらのドア警報システムに加え、閉館時には赤外線防犯システムも使われる。これらの防犯・警報システムは地域の警察署に直接つながっている。建物は耐火性であり、防火設備も備えている。煙検知器、および熱感知器は地域の消防署へ直接つながっている。(4)

内部環境

建物内のすべてのライトには紫外線フィルターがつけられている。会議室-兼-図書室を

除いた公共エリア[5]と、資料の収蔵庫には窓は取り付けられていない。窓がある部屋は館長室、職員室、ボランティア・スタッフ室、職員用会議室-兼-休憩室である。建物内の窓沿いには赤外線防犯システムが設置されている。展示スペース、資料収蔵庫、作業室（保存処置室-兼-展示準備室）、資料仮保管室には、より洗練された温・湿度のコントロール・システムが設置されている。建物内は完全禁煙であり、空気清浄機は館内全体に設置されている。展示スペースの空気清浄は、他のエリアよりも強化されている。

障害者への配慮

建物の全てのエリアの構造と展示デザインは ADA[6]による博物館の基準を満たしている。基準の詳細についてはアメリカ博物館協会（AAM）[7]による「Everyone's Welcome: The Americans with Disabilities Act and Museums[8]」を参照していただきたい。

エリア区分 ― 4 つのエリア

フロア・プランは、博物館の基本的機能に基づき 2 つの要素と共に 4 つのエリアへと区分される。環境設定で求められること、防犯への考察、これらのレベル、そして公共のアクセス等が考慮される。2 つの要素と 4 つのエリアは以下の通りである。

●2 つの要素：公共（public）& コレクション(collection) ◆公共（public）――― 非公共（non-public） ◆コレクション（collection）――― 非コレクション（non-collection）
●4 つのエリア： ◆公共（public）× コレクション（collection） ◆公共（public）× 非コレクション（non-collection） ◆非公共（non-public）× コレクション（collection） ◆非公共（non-public）× 非コレクション（non-collection） ↓ ↓ ↓ ↓ ◆公共 - コレクション・エリア ◆公共 - 非コレクション・エリア ◆非公共 - コレクション・エリア ◆非公共 - 非コレクション・エリア

平均すると、イギリスの博物館ではスペースの 70%が収蔵庫、展示、資料を扱う場所となっている。[9]このデータを参考とし、資料があるコレクション・エリアの占有率を 60.25%、資料がない非コレクション・エリアの占有率を 39.75%とした。70%と 30%に設定しなかったのは、収蔵庫と展示場の将来的な拡張を見越した敷地について考慮したプランである為である。

次にコレクション・エリアに含まれる収蔵庫と展示スペースの面積の対比である。例として、イギリスの国営の博物館では収蔵庫と展示スペースの面積の対比は 1:1 である。地方自治体による博物館だと収蔵庫の占有率は 1:2 以下となり、私立の博物館では 1:4 以下となる。[10]これらのデータを参考とし、資料の収蔵庫と展示スペースの面積をそれぞれ

9,000 平方フィートと 13,300 平方フィートとした。よって、90:133 の対比、あるいは 40.4%と 59.6%の比率となる。この比率は、およそ 2:3、あるいは 40%と 60%となり、収蔵庫としては比較的に高い占有率となり、資料の収蔵スペース不足の対策となる。

公共 - コレクション・エリア

◆展示スペース

このエリアでは最善の環境コントロール・システムが求められる。なぜならば来館者の出入りが温度と湿度を変化させ、空気を汚すからである。また、多くの人々が資料に近づくため、このエリアには多くの防犯カメラが設置される。展示スペース内には可動式の壁を取り入れた設計がなされるので、展示内容に対応して順路や区分けを変更することが可能である。

公共 - 非コレクション・エリア

◆一般用出入口	◆公共用トイレ
◆入館受付	◆ミュージアム・ショップ
◆インフォメーションデスク	◆カフェ、レストラン、etc.
◆ロビー	◆オーディオ - ビジュアル・シアター

これら上記のエリアの環境コントロールは人間にとって心地良い設定にする。しかし、非公共エリアよりも多くの監視カメラが求められる。一般用出入口は一ヶ所とし、館内の飲食施設やミュージアム・ショップの運営が他の団体である場合は、これらの店員も、防犯上、この出入口を使用するのが望ましい。出入口はダブル・ドアとするため、博物館に入るには、二つのドアを通り抜けなければならない。

出入口から館内へ入ると入館受付カウンターを挟んで右側へ向かう通路と、左側へ向かう通路がある。どちら側に位置するエリアを開放するかにより、これらの通路はスライド式ドア・ウォールにより閉鎖可能となっている。間取り図と照らし合わせると、右側の進路の先にあるロビーと展示スペースを開放する際には左側通路を閉鎖し、左側の進路の先にある会議室-兼-図書室を開放する際には右側の通路を閉鎖する。もちろん両方向の空間を開放する際には左右両方の通路を閉鎖しない。

会議室-兼-図書室と入館受付カウンターの間の通路にあるスライド式ドア・ウォールも一般入館者の侵入を制限する際に使用する。

会議室-兼-図書室のみを一般開放する際に備え、部屋の入口前のスペースに自動販売機を設置する。

展示スペースへは幅の広い出入口が二か所ある。これらの出入口はスライド式間仕切りとなっているため、展示スペースへの入り口と、展示スペースからの出口の幅が調節可能である。閉館時はこれらのスライド式間仕切りも閉められる。

オーディオ - ビジュアル・シアターは単独使用だけではなく、展示スペース内の順路に組み入れることも可能な場所に位置している。そのため、出入口は三ヶ所ある。二つは展示スペース内からの出入りに使われ、もう一つはロビーからの出入りに使われる。これら

の出入口の開閉の設定は、オーディオ - ビジュアル・シアターの利用目的に応じて変えられる。

非公共 - コレクション・エリア

◆資料収蔵庫	◆資料仮保管室
◆作業室 （保存処置室-兼-展示準備室）	◆梱包室
	◆大型荷物用業務扉

資料収蔵庫には必要な環境コントロール・システムが備えられ、立ち入りは制限されている。セキュリティー対策として、館長と資料担当学芸員のみが資料収蔵庫のカギを所有することを許される。資料収蔵庫には二つの出入口がある。一つは資料仮保管室とつながり、一つは展示スペースへのドアに近接した廊下とつながっている。

作業室は基本的保存処置や展示準備などに使用される。更なる専門的保存・修復作業が求められる際には、適切な専門機関へ依頼する。

資料仮保管室は、収蔵、梱包、展示などを待っている資料を保管する場として使用する。

梱包室には荷物の積み出し・積み込みのため建物外部とつながる大型荷物用の大きな業務扉がある。積み荷の移動を円滑、かつ安全に行うため、大型荷物用業務扉、隣接する資料仮保管室へのドア、廊下への引き戸は幅が広くなっている。

非公共 - 非コレクション・エリア

◆機械室	◆ボランティア・スタッフ室
◆管理人室	◆職員用会議室–兼–休憩室
◆職員用トイレ	◆事務用品/備品倉庫
◆館長室（応接用スペース付き）	◆廊下
◆職員室	◆職員/業務用出入口
◆資料担当学芸員室	

公共エリアから、直接このエリアの廊下へと通じるドアは二つだけである。ロビーへと通じるドアは職員の出入りに使われ、展示スペースとつながっている幅が広いドアは展示資料の移動に使われる。上記の二つのドアに加えて、会議室-兼-図書室とロビーをつなぐドアを経由してこのエリアの職員用の部屋の前の通路にアクセスするドアもある。廊下の幅は 10 フィートを確保しているので、大きなコレクションの移動にも対応できる。

外部とつながる職員/業務用出入口には訪問者を確認するためにカメラとインターフォンが設置されている。

資料担当学芸員の部屋は廊下を挟んでコレクション・エリアの向かいに位置する。

職員室の各職員のスペースはパーテーションで仕切られている。これは、職員数の増減や、作業に必要とされるスペースの拡大などへの対応を可能とするためである。

職員用会議室-兼-休憩室にはシンクがある。また、電子レンジやコーヒーメーカーなども備えられる。この部屋では職員の飲食も行われるため、コレクション・エリア前の廊下から通じる通路を通り最も離れた一番奥にある。

公共/非公共 - 非コレクション・エリア

◆会議室-兼-図書室

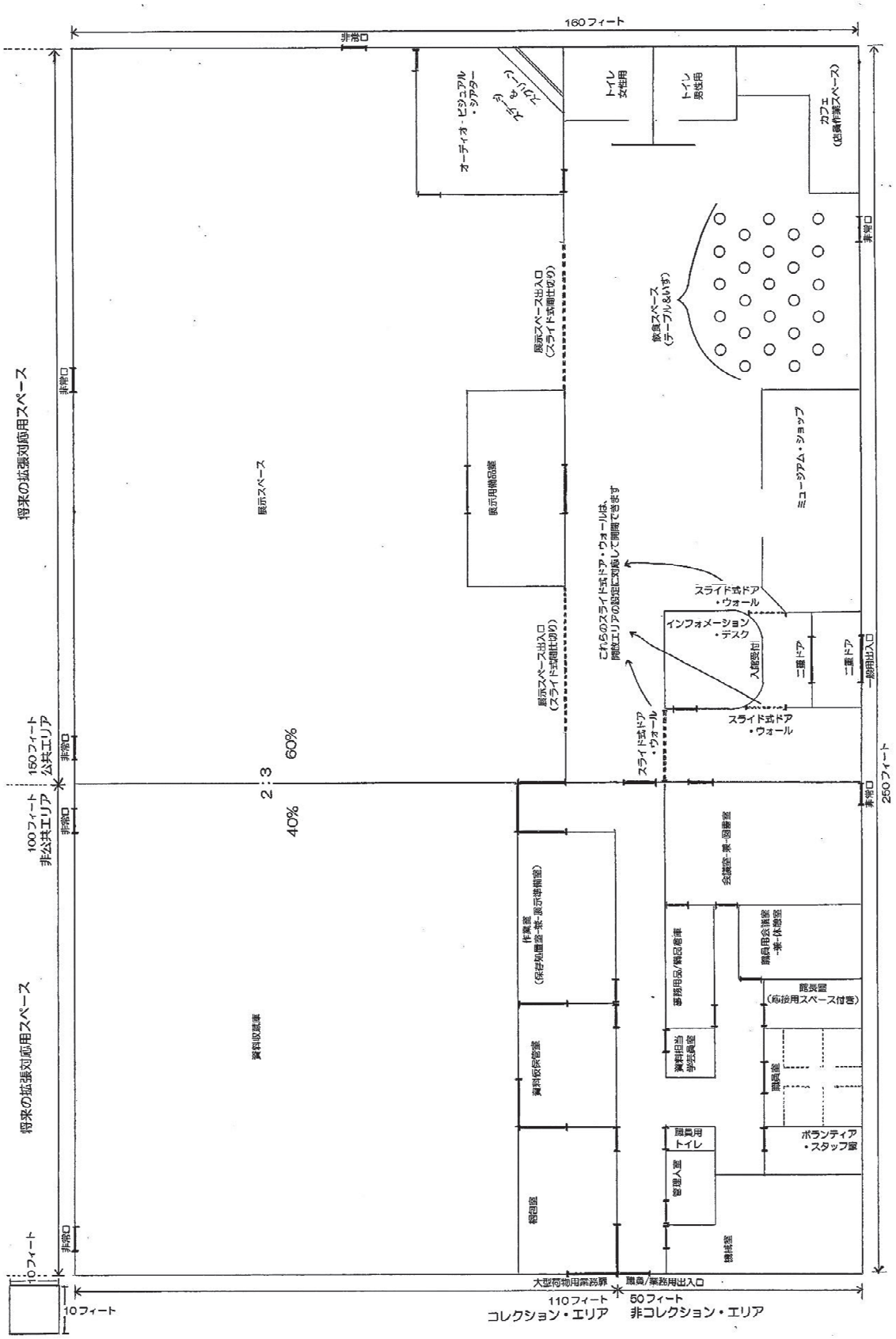
会議室-兼-図書室は常に一般開放はしておらず、研究会、その他のイベント等で必要な時に開放される。ロビーと展示場の閉館日や閉館時間にこの部屋を行事等で開放することもあるので、この部屋には非常口がある。

（英語原文の）参考文献

- Load, Gail Dexter, and Load, Barry, *The Manual of Museum Planning – 1st Edition*, Unipub,1992(11)
- Ambrose, Timothy and Paine, Crispin, *Museum Basics*, Routledge, ©1993 ICOM(12)
- Harrison, Raymond O. and Key, A. F., *The Technical Requirements of Small Museums – 1st Edition*, Canadian Museums Association, 1966(13)

各エリアの面積

エリア	サイズ（フィート）	面積（ft^2）
公共 - コレクション・エリア		
＊展示スペース	100×150－(900＋800)	13,300
《「公共 - コレクション・エリア」－（オーディオ - ビジュアル・シアター＋展示用備品室)》		
小計		13,300
公共 - 非コレクション・エリア		
＊一般用出入口	20×20	400
＊ロビー	―――	6,325
＊入館受付＆インフォメーションデスク	20×20	400
＊ミュージアム・ショップ	20×45	900
＊カフェ（店員作業スペース）	―――	450
＊公共用トイレ	35×15	525
＊オーディオ - ビジュアル・シアター	30×30	900
小計		9,900
非公共 - コレクション・エリア		
＊資料収蔵庫	90×100	9,000
＊作業室（保存処置室-兼-展示準備室）	20×35	700
＊資料仮保管室	20×25	500
＊梱包室	30×20	600
小計		10,800
非公共 - 非コレクション・エリア		
＊職員用会議室-兼-休憩室	25×15	375
＊館長室（応接用スペース付き）	20×10	200
＊職員室	20×20	400
＊資料担当学芸員室	10×10	100
＊ボランティア・スタッフ室	20×10	200
＊管理人室	10×15	150
＊事務用品/備品倉庫	10×25	250
＊機械室	―――	700
＊職員用トイレ	10×5	50
＊廊下	―――	1,775
＊展示用備品室（展示スペース内にあり）	20×40	800
＊会議室-兼-図書室（※公共/非公共）	40×25	1,000
小計		6,000
総計		40,000


160フィート
非常口
オーディオ・ビジュアル・シアター
トイレ 女性用
トイレ 男性用
カフェ (店員作業スペース)
飲食スペース (テーブル&いす)
展示スペース出入口 (スライド式間仕切り)
展示スペース
展示用備品室
ミュージアム・ショップ
これらのスライド式ドア・ウォールは、隣接エリアの設定に対応して開閉できます
スライド式ドア・ウォール
インフォメーション・デスク
入館受付
二重ドア
一般用出入口
2:3
60%
40%
150フィート 公共エリア
100フィート 非公共エリア
将来の拡張対応用スペース
250フィート
資料収蔵庫
作業室 (保存処置室・展示準備室)
資料保存室
梱包室
会議室・兼・図書室
事務用品/備品倉庫
資料担当 学芸員室
職員用会議室 兼・休憩室
館長室 (応接用スペース付き)
職員室
ボランティア・スタッフ室
職員用 トイレ
管理人室
機械室
大型荷物用業務扉
職員/業務用出入口
110フィート コレクション・エリア
50フィート 非コレクション・エリア
10フィート

◇◇◇

注記

(1) 水崎禎「博物館経営論の学事報告～講義の構成と意図について～」『北海学園大学学芸員課程学事報告書第 25 号』手塚薫(編)、北海学園大学学芸員課程、2013 年 pp57-58（⑥博物館のフロア・プラン）

(2) 水崎禎「博物館資料保存論の学事報告～授業の構成～」『北海学園大学学芸員課程学事報告書第 29 号』手塚薫(編)、北海学園大学学芸員課程、2017 年 p17（８．博物館のフロア・プラン）

(3) Mizusaki, Tadashi, “Section Five: Floor Plan Narrative & Layout of Museum”
Museum plan: Museum of Council Bluffs, Fort Calhoun, Nebraska, 1999, pp.47-52
Museum Studies 850: Museum Administration and Management
Museum Studies program at University of Nebraska-Lincoln, Graduate School

(4) 防犯/防火のシステム、およびローカルの警察署/消防署への連絡体制等は、執筆当時のアメリカ合衆国ネブラスカ州という設定の下に考えられた。

(5) 会議室-兼-図書室は館の利用目的に応じて公共エリア/非公共エリアの切り替えが可能

(6) The Americans with Disabilities Act

(7) 当時（1999 年）の名称。2012 年に American Association of Museums（アメリカ博物館協会）から American Alliance of Museums（アメリカ博物館アライアンス）へと改名。略称の AAM は変わっていない。なお、「アライアンス」の和訳については、ここでは決定せずに、「同盟」、「提携」というニュアンスであるとする。

(8) *Everyone's Welcome: The Americans with Disabilities Act and Museums*, Prepared for the American Association of Museums, Washington, DC, By Universal Designers & Consultants, Inc., Takoma Park, Maryland, ©1998 American Association of Museums

(9) Figure 7.2 Allocation of Space in Study Sample
Load and Load, *The Manual of Museum Planning – 1st Edition*, Unipub,1992, p106

(10) Figure 7.3 Ratios of Collection Storage and Display Space
Load and Load, *The Manual of Museum Planning – 1st Edition*, Unipub,1992, p106

(11)第２版が 1999 年にイギリス、2001 年にアメリカで出版され、2012 年に第３版が出版されている。筆者が参照したのは 1992 年出版の初版である。

(12)2006 年に第２版、2012 年に第３版が出版されている。筆者が参照したのは 1993 年に出版された初版である。初版の日本語翻訳は 1995 年に財団法人に日本博物館協会より出版されている。

(13)1977 年に改訂版が出版されている。

被災ミュージアム再興活動と震災復興

人文学部日本文化学科 3 年　土肥　京夏

1. はじめに

平成 29 年 6 月 27 日（火）、28 日（水）の二日間にわたり、宮城県石巻市で被災ミュージアム再興活動を行った。参加を決めた理由は、震災復興につながるボランティアをずっとしたかったからだ。私は東北地方・秋田県出身者であるが、震災被害が少なかった秋田県と被害が膨大であった太平洋側の県の惨状を比較してしまうことや震災を目の当たりにすることを今まで避けてきてしまったため、震災復興ボランティアに参加することがなかなかできなかった。今回被災ミュージアム再興活動という形で震災復興ボランティアができたことで、やっと震災を考えられるようになった気がした。私が思っていたよりも復興は進んでおり、また土地の人は強かった。他にも現地で考え、感じたことはたくさんあるので述べていきたいと思う。

2. 現地の方々との出会い

今回の活動では、1 日目は移動、博物館見学、親睦会、2 日目は石巻市での被災ミュージアム再興活動、また被災地を巡り、震災直後の様子を加藤幸治先生から伺った。ここでは 1 日目の現地の方々との出会いについてまとめる。

1 日目。久々に降り立った仙台駅は、最後に訪れた 10 年前と変わらない東北一の都市のままであった。仙台市内にある東北学院大学の博物館へ向かい、そこで東北学院大学民俗学ゼミのみなさんや本学の学芸員課程の先輩、現在東北大学院生の佐﨑愛さんと初めてお会いした。東北学院大学には中学・高校の同級生がたくさん進学していたので、知り合いに会わないかととてもワクワクしていたが、この時はまだ会えなかった。ゼミ生のみなさんはほとんどが仙台市出身で、実際に震災の被害を受けた方がたくさんいた。

東北学院大学博物館は学芸員資格課程を取っている学生の実習の拠点になっており、展示・保存・梱包・資料台帳や目録作成を学生が主に行っているそうだ。展示内容は仙台市付近で出土した土器であったり、近くの古墳についてであったり、民俗学ゼミの方が調査研究の為に収集した民俗資料であった。その中で一番目を引いたのが古い写真と現在の地図と付箋を用いて、「写真に写っているところは〇〇町の港側である」と分かったら写真を地図の該当するところに貼り、「あなたの思い出を付箋に書いて貼ってください」と来館者に情報提供をしてもらう展示だ。来館者が書き込んだ付箋によってカラフルになった地図を私は「生きている」展示資料だと感じた。民族学ゼミを担当されている加藤幸治先生は「民俗学はフィールドワークから始まる。このような聞き取り調査は当時を過ごしていた人にしか分からないことが知れるからとっても大事な作業」と話されていた。

博物館を見学した後は、加藤ゼミのみなさんが「飲みニュケーション」という名の親睦会に招待してくださった。お店には親睦会から合流したゼミ生何人かが先に待っていたの

だが、その中に同じ県出身で隣の高校、更に同じ部活をしていたという人がいた。お話をしていくうちに共通の知り合いが何人かおり、一緒に練習もしていたことが発覚してお互いにとても驚いた。マネージャーをしていた私はその人のタイムも取っていたそうだが、あまり思い出せない。ちなみに成人式で会おうという約束をしたが、私は成人式に出席できなかったので果たすことはできなかった。加藤ゼミは先生も学生も年齢性別関係なくとっても仲が良かった。みなさん一つの席に留まることはなく席移動をたくさんしていたので、私も様々な人と話すことができた。2 日目の石巻市での活動がとても楽しみになるような会であった。

3. 資料台帳作成

2 日目は石巻市立湊第二小学校を訪れ、被災ミュージアム再興活動を行った。石巻市までは加藤ゼミのみなさんと電車で移動した。その間松島町を通ったのだが、10 年前に修学旅行で訪れたときと変化していてショックを受けた。震災による建物の倒壊などで休業に追い込まれた施設が多く、取り壊しが行われていたからだ。なにも思う暇なく過ぎていく松島の風景を車窓から漠然と見ていた。

小学校の一階は水没し、二階ギリギリまで津波が押し寄せたそうだ。一階のホール、階段、玄関の屋根、外壁、あらゆるところに津波の跡があり、黒くなっていた。小学校の外には海辺にしかないようなさらさらな砂が、最初からそこにあったようにたくさん落ちていた。さらに震災が起きた時間で止まってしまった時計が置いてあって、生々しくリアルに感じた。

被災ミュージアム再興活動の今回の内容としては被災した鮎川町の資料台帳を作成し、データ化するものだった。写真撮影をしてサイズを計測する班、表紙などの細かい情報を資料台帳に書き込んでいく班、資料台帳を元にエクセルで打ち込んでいく班の 3 つに分かれて活動を行い、1 つめと 2 つめの班は加藤ゼミのみなさんと本学の学生と入り混じって和気あいあいと作業した。加藤ゼミの方針は発見したことをどんどん口に出して、みんなでもっと深いことに気付いていくもので、周りと話しながら行うことが大切とされているそうだ。黙々と作業しがちな資料整理の中でのそのような取り組みは、考えたことがなく新しくて本学学芸員課程のみんなで活動するときにぜひ取り入れてみたいと思った。資料整理で扱ったのは主に紙資料であったのだが、いままで博物館などで見てきた虫食いを間近で見ることができた。さらに虫食いのザラザラを直接触ることができたのが今年一番興奮したことであった。

資料整理が終わると加藤先生に小学校の中を案内していただいた。二階から上は教室ごとに暗幕でしっかりと囲ってあり、大きな棚には資料がびっしりと収蔵してあった。資料をまたがないと通れないような道があったり、トイレにも棚を置いていたりしてとにかく収蔵場所に困っているような様子だった。震災当時、避難所として使用された教室の黒板には安否・身元確認のほかに「がんばろう湊二小」など前向きな言葉がたくさん書いてあった。日付を書いて 1 日ずつ斜線で消している落書きは、早く安心できる場所へ行きたいという人々の願いであったのだろう。書いた人と同じ場所にいることを実感して心臓が掴

まれているように苦しくなった。

4. 被災地を巡って

仙台空港へ向かうまでの間、被災地を何か所か巡り加藤先生が震災時の状況を詳しくお話してくださった。湊第二小学校から、沿岸部を少し行くと広い更地に出た。この辺りは当時大きな津波が押し寄せたせいで建物はほとんど流されたり、工場のガスタンクが爆発したり、汚水が流れ出てしまい水質が悪化したりし、大変な被害を被った。更地で周りを見渡すと、すぐそこにある小高い山の上に小学校や住宅街があるのが分かる。津波は山の上の小学校ギリギリまで押し寄せたそうだ。更地は海と小高い山の間にあったのだが、そこで加藤先生のお話を聞いていると海の匂いがした。波が迫ってきている気がしてとても怖くなった。

次に仙台市のお隣の名取市閖上地区に行った。ここは驚くほどなにもなかった。地域の人はみんな知っている五差路。この交差点には歩道橋が架けられているが、この歩道橋よりもはるかに大きな津波が閖上地区を襲ったそうだ。震災当時、「逃げろー！」と言って歩道橋に逃げ、助かった人もいるが、運が悪かった人もたくさんいたという。錆びついた歩道橋が当時を生々しく思い出させてくれる。この五差路の辺りでは加藤先生のご友人が車屋さんを営んでいたそうで、ちょうど近くを通ったので加藤先生がお話してくださった。「震災の数日前に車屋の友人に車検で車を預けていた。震災が起きて安否を確かめる連絡をしたところ、友人は津波に巻き込まれてしまい亡くなっていた。預けていた車は流され、閖上地区から遠い遠いところで見つかった」このお話を聞いて、つい先日まで生きていて一緒に話をしていた友人を一瞬で奪ってしまった津波への恐怖心がさらに募った。

閖上地区の海沿いの方へ行く。この辺りは大きな津波のせいで五差路の交差点のときよりも何もなく、遠くに最近建てられたような工場がぽつぽつとしか見えないような広い更地になってしまっていた。更地の中に唯一、小さな神社と慰霊碑、かまぼこ佐々直の工場が存在していた。小さな神社は小高い山の上にあり、少し高いところから閖上地区を見渡すことができた。建物の瓦礫などはもう処分されたあとだということで、海側は本当に何もない。ニュースなどで津波による被害を何度も目にし、起こったことを理解してはいたが、今まではなんだか他人事のような気持ちでいた。人並みに心を痛めてきたが、この時やっと本当に起きたことなのだと実感し、立っていられなくなる程の衝撃を受けた。一階部分が綺麗に波にさらわれており、錆びた鉄骨で二階部分を支えるかまぼこの佐々直の工場跡は震災津波遺構であった。閖上地区で見た景色は私に大きな衝撃を与え、忘れたくても忘れることは出来ないぐらい鮮明に頭の中に残った。

仙台空港の近く、下増田神社と千年希望の丘にも訪れた。下増田神社は下増田地区で殉職した人の慰霊碑があった。千年希望の丘は人々が被災のことを忘れないように倒壊した建物がそのまま置いてあったり、これからもし震災が起こってしまったら逃げてこられたりするところであった。東屋には防災グッズが兼ね備えてあり、脚立や風よけシートが出せるようになっていた。

5. おわりに

今回被災ミュージアム再興活動に参加して、炊き出しや瓦礫処理などの震災地ボランティアだけでなく被災した文化財の資料整理も震災復興に繋がるのだと初めて知った。また、今までのことを振り返るのは大切なことであるが、自然災害が起きてしまったときに今後どう対処するかを考えていくことはとても大切なことであると強く感じた。町中のあらゆる建物に「津波がこのくらいの高さまできました」という共通の青いシールが貼ってあったことからも言えるが、東日本大震災を忘れないことが私たちにできる一番のことだと思っている。文化財についてや資料の取り扱い方・向き合い方、収蔵方法だけでなく、震災についてもたくさん学ぶことができたのはとても自分の身になったと感じる。わたしの震災に関する知識は情報媒体で得たものだけで、実際に現地で自然の脅威と人の強さを感じることは今までの考えを改めることができた。今後またこのような活動が行われるのであったら、是非参加したい。

加藤先生をはじめ、加藤ゼミのみなさんには大変お世話になりました。加藤ゼミは展示会で地域活性化という復興活動も行っているらしく、みなさん明るく前向きに取り組んでいることを知り、心から尊敬しています。被災ミュージアム再興活動参加の機会を作ってくださった加藤先生、手塚先生、活動をサポートしてくださった佐﨑さん、東北学院大学加藤ゼミのみなさんに感謝しております。ありがとうございました。

虫に食われた資料

しっかりと暗幕がはられた収蔵庫

日和山から見渡す閖上地区

津波の高さを知らせるシールが貼られた下増田神社

石巻における被災ミュージアム再興活動を振り返って

人文学部日本文化学科 3 年　森川　日菜子

１．はじめに

2017 年 6 月 27～28 日、私たちは石巻を訪れた。目的は、東日本大震災において津波などの被害に遭った文化財を、再配架のために整理するといったものである。かねてよりこのような被災ミュージアム再興活動を行っている、東北学院大学の加藤幸治先生とそのゼミ生たちに協力するという形で実現した。

きっかけは、手塚薫先生の博物館経営論でのアナウンスだった。被災した文化財の復旧作業の手伝いを石巻にて行うため、メンバーを募集するという。3 年ほど前に本学の学芸員課程が石巻における文化財レスキューに参加したということは聞き及んでおり、興味を持っていた。また、資料に直に触れることができる貴重な機会ではないだろうかと考え、名乗りを上げることにした。人気が高かったが、幸い手塚先生による書類選考に合格し、私を含む学芸員課程を受講している 3 年生 3 名、2 年生 2 名の計 5 名の学生が石巻行きを手にした。さらには、リーダーまで任されてしまった。あまりそのような役割を担うことがなかった私にとって、たった 4 名を引っ張ることにすら不安を感じた。しかし、苦手なことは避けるという性分を少しでも克服しようと思い了承した。学生部への補助金の申請や航空券の手配などの事務的な事前準備をこなし、2 日間という日程で活動した。

今回の活動では、実際に資料を扱ったり被災地を訪問したりすることにより、多くのことを学ぶことができた。ここからは、今回の被災ミュージアム再興活動に関して学芸員課程受講生としての目線で報告するとともに、私自身が今回の石巻訪問で感じたことや学んだことについてありのままに綴っていく。

２．仙台到着・ゼミ生との邂逅

仙台に到着したのは、27 日の昼過ぎだった。飛行機から電車に乗り換え、まずは宿泊先のホテルへと向かった。そこで、本学の OG である佐﨑愛さんと落ち合った。現在、東北大学の大学院に通っているという。今回は、私たちのサポート役として活動に参加してくださった。仙台という慣れない土地において、同じ大学の先輩がいるというのは非常に心強かった。

佐﨑さんと一緒に東北学院大学の博物館に行き、そこで加藤先生とゼミ生に出会った。大学博物館には、土器や石器など、周辺の遺跡から出土した考古資料が多く展示されていた。東北学院大学の学芸員課程の学生が手掛けたという。土器の展示方法一つを取っても、ワイヤーで固定するなど実践的かつ本格的で、学び取れることが多かった。展示を見て回ったのち、加藤先生ゼミで行われている被災ミュージアム再興事業についての詳しい説明を受けた。震災発生当初から事業が始動し、現在は文化財の脱塩やクリーニングが完了し、仮の収蔵庫に保管されているという。4 トントラック 8 台分の文化財がレスキューされ処

理を施されたと聞き、途方もない作業だと驚いた。また、事業の一環で、レスキューされた文化財についての地域の方々への聞き取り調査も行っているという。地域と密着しながら事業を進めていく姿勢は見習うべきだと感じた。28 日は、これらの収蔵されている文化財を博物館に再配架するためにデータベース化の作業を進めるという。

加藤先生ゼミでの活動について理解したところで、まずは両校の親交を深めるため、飲み会が開催された。そういったものは不慣れであったため緊張していたが、1 時間もするとなじむことができた。驚いたのはゼミ生のみんなのペースの速さで、チビチビと一杯を大事に飲む私を尻目に次々とお酒を注文していたため、東北に酒豪が多いという噂は本当なのではないかと感じた。この俗に言う「飲みニュケーション」でお互いの距離が縮まり、次の日の活動に向けて気持ちを一つにすることができたと感じている。

３． 石巻湊第二小学校での活動

28 日は、仙台駅から電車で石巻へ向かった。作業拠点となったのが、廃校となった石巻湊第二小学校の校舎である。現在では、再配架を待つ資料の仮収蔵庫となっている。校舎はその構造上、資料の保管に適さない部分が多い。例えば、日差しを目一杯取り込むことができる教室の大きな窓は、資料の日焼けといった劣化を招く。こうした窓には暗幕がかけられ、日差しから資料を守っていた。さらに、開口部が多いと虫害の原因となる虫の侵入も避けられない。そのため、必要最小限の出入り口以外はしっかりとテープが貼られ、密閉されていた。また、広い廊下の至る所に虫を捕える道具が設置されていた。これは、虫を駆除するというよりは、捕獲された虫を調べ、施設に侵入する虫が資料を劣化させる害虫か否かを調査するためのものだという。資料にとっては悪条件である小学校はすっかり改良され、収蔵庫として機能していた。

資料に直に触れるということで、入念に手を洗い、作業に取り掛かった。データベース化は流れ作業で進められた。まずは資料一つ一つを箱から出して写真に収め、資料カードを作成する。そして、資料カードを基にパソコンにデータとして入力し、資料を元の箱に戻す、といった流れである。

私は、資料カードの作成を担当した。資料そのものにラベリングしてある番号を確認し、さらにどのような形式の資料であるかを分類し、その資料の具体的な内容について記載した。もともとこうした地道な作業は好きだったため、楽しく作業をすることができた。私が扱ったのは市役所で管理するような、昭和時代の調書などが多かった。しかし、なかには家系図や明治時代のものとされる市長宛てのお礼状などの読んでいて楽しいものもあった。私自身は手に取ることはできなかったが、昭和初期頃の、イラストで解説された薙刀の指南書まであったという。当時どのような人物がこの資料を手に取り使用し、所有したのかを想像するだけで心が躍った。また、資料は手書きの文書が多く、書かれた年代や人物によって筆跡や文字の崩れ方がちがったため大変興味深かった。これらの資料をできるだけじっくり見て、活用方法を模索しながら、ゼミ生のみんなと一緒に和気藹々と作業を進めていった。

この日の 5 時間ほどの作業で、28 箱分の資料のデータベース化が完了した。目標の 30

箱には届かなかったが、いつもよりも多くの資料を整理することができたという。

４． 被災地訪問・帰還

作業終了後、加藤先生のご厚意で被災地を案内していただいた。以前は家屋が建ち並んでいたという場所は、津波によって荒れ野原になっていた。また、根元から折れ曲がった鉄骨や石碑など、震災の悲惨さを物語るものも多かった。しかし、海沿いには頑丈な防波堤が造られ、新しい建物の建設も進んでいた。

さらに、震災の被害が大きかった場所には慰霊碑も建てられていた。津波が到達して多くの尊い命が犠牲になった閖上地区には、「種の慰霊碑」と「芽生えの塔」という慰霊のためのモニュメントが建てられていた。塔の高さはこの地区に到達した津波の高さと同様、8.4 メートルであった。自分の背よりもはるかに高い津波の脅威を思い、胸が締め付けられる思いだった。これらのモニュメントのほど近くに、閖上湊神社があり参拝した。日和山の上にあり、またの名を富主姫神社という。津波の影響で、神社へ続く石段は所々破損し、鳥居は根元から折れてしまっていた。加藤先生によると、もともとこの日和山にあったのは富主姫神社で、江戸時代から地域の人がよく訪れたという。東日本大震災以降で社殿が流されてしまい、同じく流されてしまった閖上湊神社と合同で仮社殿にて祀られていた。現在は、慰霊のために全国多くの人々が訪れるという。小高くなっているため、周囲の状況を見渡すことができた。住宅が建っていたであろう場所には土台しか残っていなかった。土台の間を縫うように歩く野良猫が物悲しかった。

また、岩沼市にある千年希望の丘も訪れた。津波によって人が住めなくなった土地を利用して整備されたという。丘は震災のがれきを利用して作られ、今後津波が到来することを想定し、上って避難できるように小高くなっていた。交流センターもあり、展示も行われているようだったが、すでに閉まっていて観ることができなかったのは残念であった。しかし、震災の記憶を後世に残そうという意志がしっかりと伝わってきた。

随所にある悲惨な記憶を残しつつ、確かに復興へと歩みが進んでいる被災地の現状をこの目で確かめることができた。被災地のまちなみは、これから起こるかもしれない震災に耐えうる力強い姿へと変化し続けていた。

一通り被災地の見学を終え、私たちは仙台空港まで送迎してくださった加藤先生に別れを告げた。ふと思い返してみると、初めて仙台を訪れたというのに仙台らしいものにあまり触れていないことに気が付いた。折角だからと、急遽空港で牛タンを食べた。これで、思い残すことなく、北海道に帰ってくることができた。

５． おわりに

今回の活動では、多くの資料を間近で見て触れることができた。さらに、リーダーという重役まで任され、普段はあまり進んでやってはこなかった小難しい手続きなどもこなすことができた。非常に学ぶことが多く、貴重な体験だったと感じている。

また、これを機に、それぞれの地域にとっての文化財の理想的な在り方とは何であろう

か、と考えるようになった。石巻などの被災地では、少しずつではあるが確実に復興が進んでいる。現在、震災の発生からちょうど7年が経過した。未だ完全な復興にはほど遠いが、文化財の再配架先となりうる博物館然り、新たな施設や、住居などの建設が進んでいる。被災地の風景は常に新しい姿へと移り変わっている。しかし、全てを新しくするのではなく、後世に震災の悲惨さを伝えるために遺されていくものもある。そのような震災の遺物が、地震大国日本に暮らす私たちがこれからどう震災と向き合っていくべきかを教えてくれるだろう。被災された方々が1日でも早く故郷に戻れるようになることを祈るとともに、被災ミュージアム再興事業が進んでいき、すべての文化財がそれぞれに適した博物館へと再配架され、今後活用され続けることを願ってやまない。

最後に、復興活動のお手伝いを受け入れてくださった加藤先生やゼミ生のみなさん、このような機会をくださった手塚先生に感謝、御礼を申し上げます。

仮収蔵庫内部の様子

二日目の作業風景

津波到来の時刻で止まっている時計

閖上にある被災者を弔う慰霊碑と塔

礼文国際フィールドスクールを終えて

人文学部日本文化学科２年　蟬塚　咲衣

１．はじめに

２０１７年８月７日から２１日にかけて行われた、礼文国際フィールドスクールに参加し、礼文島に２週間滞在した。私にとってこの１４泊１５日という期間は、これまで経験したどの研修よりも格段に長く、人生でも初めての体験だった。そのため、滞在に当たって不安なところもあったが、このプロジェクトで引率を勤められている坪田芳典さんや、３年生の頼れる３名の先輩方、２週間を共に過ごした同期１名に助けられながら、ここでしかできない経験をたくさん積むことが出来た。

私がこのプロジェクトへの参加を決めたきっかけは、発掘に関心があったからである。元々興味があった分野ではあったが、発掘現場を実際に見たことも無ければ、作業をしたことも無かった。大学進学の際に一度考えていたが、北海学園大学には遺跡発掘の授業や学科は無いからと半ば諦めかけていた発掘と考古学への扉が、このようにまた開かれることになるとは思っておらず、今回このような機会を与えてくださったことに感謝したい。

この研修に参加するにあたり、事前に北海学園大学や北海道大学で三度のレクチャーを受けた。礼文島や遺跡に関する知識、プロジェクトの目的などを教わり、出発前日には北大生や留学生も交えて英語でのレクチャーが行われた。レクチャーを受けたことによって、遺跡からどのような遺物が出土し、そこから人々の生活をどう読み取るのか、そして発掘の注意点などを頭に入れてから礼文島に向かうことが出来た。

本文では、このプロジェクトや礼文島での生活を通じて学び、感じたことについて述べる。

２．遺跡の発掘調査

今回、私と同期１名は、Excavation Team という毎日遺跡で作業を行う発掘特化のチームに配属された。一緒に参加した先輩方や授業として訪れていた北海道大学の学生、そして多くの留学生はＡ、Ｂ、Ｃの３チームに分かれ、発掘、ラボ、コミュニティの３つの項目を１日ずつローテーションしており、それに比べると私は毎日同じような作業をしていたことになる。しかし、毎日遺跡に通い詰める中で、やらせていただける仕事が日ごとに増えていくことに喜びを感じた。このチームに所属していなければ出来なかった作業が多く、そこから発掘調査でどのようなことを行うのかを学ぶことが出来た。ここでは、発掘チームに所属していたからこそできた、遺物の点取り作業と図面の作成について述べる。

まず、点取り作業は、遺物が遺跡のどの場所から出土したのかをトータルステーションという機械で記録しながら、遺物１つ１つにナンバーを付け、それらの情報が書かれたカードと一緒に袋に入れ取り上げていくというものである。機械のみで記録するのではなく、

手帳にも手書きでデータを書き込むため、機械、手帳、カードという３つの情報が同じでなくてはならず、単純作業でも常に神経を尖らせて集中していなければならなかった。点取りは午前と午後に一度ずつ行うことが多かったが、遺物が多いと随時行った。点取りが出来ていなければ、その遺物の下にある土を掘ることが出来ずに後の発掘に遅れが出ることになる。そのため、正確且つ迅速に行わなくてはならなかった。

滞在１週目は手帳への記録や遺物の取り上げ、レーザーで狙うプリズムが付いたポールを持つ役割をしていたことで､自分が担当していない発掘場所の遺物を見ることが出来た。

滞在２週目になると、トータルステーションを動かしてレーザーがプリズムに当たるようにする照準合わせをやらせていただけるようになり、その後はずっとその担当をしていた。たまに道路で三脚を立てて測量機械を覗き込んでいる人を見ることがあり、その機械を自分が触ることになるとは思っておらず面白かったが、トータルステーションは発掘区の外側にあるため、取り上げる遺物の様子を見ることができないのは少し寂しかった。

点取り作業。遺物のある場所にポールを立てる

トータルステーション

そして、図面の作成については、出土した遺物の状況を上から見て描くものと、地層の断面図を描くセクション図という２つの図面の書き方を教わった。

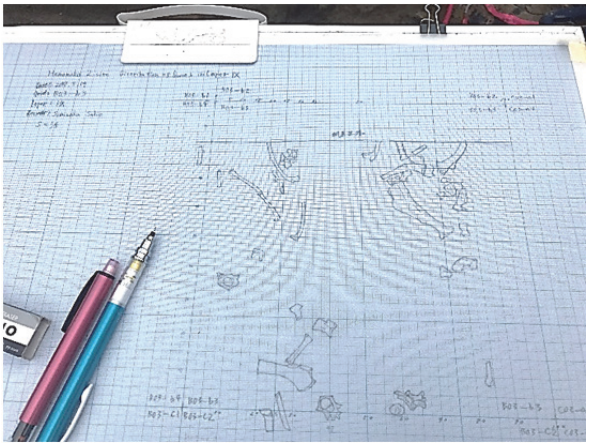
前者は、土器や骨、石器などがまとまって出土した時に描かれる。今回は私が最初に担当した発掘場所から既に絶滅したとされるニホンアシカの骨が多く出土したため、その図面を描かせていただいた。１ｍ×１ｍの区間に水糸とメジャーを張り、遺物の位置を計りながら、５分の１の縮尺で形を描いていく。学芸員課程の博物館資料論の授業で資料のイラストを描いたことはあったが、出土した骨を見たまま描くというのは想像以上に難しかった。北海道大学の坂口隆さんに骨の描き方やペンの使い分けを教わり、図面の作製方法を一通り体験することが出来た。私は仕上げるのに約１日かかったが、慣れると午前中で出来ると聞いて驚いた。

後者のセクション図は、遺跡の壁面に見られる地層の断面がどのようになっているのかを図にするもので、５ｍの位置に横に張った水糸から地層がどのくらいの範囲にわたって

広がっているのか計測する。始めに重なった地層の境目を土の色や質感で判断し区切る作業があり、炉の跡で黒くなっている地層はわかりやすいが、色がほぼ同じ場合は難しかった。書き終えると波打ったサンドイッチの断面のようになって、今回調査をした浜中２遺跡は縄文時代からアイヌ文化期までの地層を一度に見ることができるため、その歴史の重なりを改めて感じることが出来た。

今回の発掘調査で、これまで学芸員課程で学んだ資料に関する情報の数々が、このように遺跡から出土して取り上げられる瞬間から蓄積されていくのだと感じた。発掘初心者でありながら、２週間という期間で様々な作業を体験させていただき、発掘現場の作業の流れや遺物の管理について身をもって知ることが出来た。何もかもが新鮮で、毎日新たな発見に溢れた現場であった。

図面作成中の筆者



完成した図面

３．礼文島での国際交流

この礼文国際フィールドスクールには、世界各国から学生や研究者の方々が参加するため、連絡事項や指示などほぼ全てが英語である。全員が集まる場では英語、中国語、スペイン語、ロシア語、日本語が飛び交うなど、何を言っているのかわからないことが普通の空間だった。

私は大学２年で英語の授業を履修しておらず、受験で必死に勉強したこともないため、今回の滞在の中で英語でのコミュニケーションが一番不安だった。しかし、単語や身振り手振りでなんとか伝わり、日本語が話せる留学生、英語が話せる日本人学生のサポートを受けながら、なんとか生き抜くことが出来た。だが、驚いたのはフランス人やオランダ人、台湾人という英語が第一言語ではないと思われる学生があたりまえのように英語がペラペラだったことである。このプロジェクトのように、考古学に関心があるという共通点を持った国籍が違う者同士が集まる場で、英語でコミュニケーションが出来たら、どれだけ楽しいだろうと考えてしまった。Excuse me、Sorry、Thank you などで発掘現場ではなんとかなるが、宿泊している宿での会話やみんなでご飯を食べるときなどはある程度の文章を作るしかない。このような日常会話以外に、日本人の研究者の方々も留学生に対して英語

で解説をするため、それを聞きたい場合も英語を聞き取る力は必要である。

滞在して１週間が過ぎた頃、同じ宿に宿泊していた台湾の留学生の方々から食事に誘っていただき、夕食をご馳走になった。日本のチャーハンよりも油が多く使われているという台湾風のチャーハンやスープ、コロッケなどの手作り料理をいただきながら、英語と日本語で会話をした。名前を教えてもらうときは漢字とローマ字でメモ帳に書いてもらうとわかりやすく、名前の発音の仕方も積極的に声に出して聞いてみることで場が和んだ。

さらに別の日には、同じ宿に宿泊しているメンバーで料理一品を持ち寄って食事会をした。日本人が私たち２名と北大生を合わせて６名、台湾人５名、別のフロアに宿泊していたヨーロッパなどの出身の留学生たち５名で行われた。私たちは食材不足でその日に料理が作れなかったため、お菓子を持って行ったが、翌日、揚げ出し豆腐を作って各部屋に届けた。礼文島に売っている食材はもちろん日本のものばかりだが、それを使って作られたパスタや焼きそば、フレンチトーストなど、留学生の方々の手料理を食べながらお喋りをした。英語が出来ない私は聞いてばかりだったが、ファミリーネームの違いについてなど、異なる国出身の留学生同士で交流する様子を目の当たりにした。会話に加わって色々なことを話してみたかったが、言語の壁はあまりにも厚かった。

もし、このレポートを読んでからこのプロジェクトに初参加する人がいれば、単語だけでも少しは勉強しておくことをオススメするが、まずこのような多国籍な環境を味わうことに意味があると思うため、とりあえず自分の名前、通っている学校、関心があり現在学んでいる学問を英語で言えるようにして一度飛び込んでみるのが良いと思う。

しかし、留学生が多いからといって、１日中英語を使っているわけではない。やはり日本人の学生や研究者も半分近くいるため、このプロジェクトに参加しなければ交流する機会が全くなかったのではないかと思うような学校の学生や、先生方とコミュニケーションをすることができる。他大学の大学院生や、各分野の専門家の方々に囲まれながら作業が出来る空間は、教えていただいたこと全てが面白く、わくわくした。発掘したばかりの遺物を見せて「これは何の骨ですか？」、「これは土器ですか？」と聞いてみると、「それはアシカの犬歯で若い雄のものです」、「縄文末期のこのような形の土器の、カーブを描いているこの部分です」とすぐに教えてくださるので、わからないことは聞くとすぐに解決してしまった。そんな研究者の方々が楽しそうに作業する様子を見て、自分の専門分野に対する愛が溢れていたように感じられた。どこか遠い存在だと思っていた専門家の方々とお話出来たことが刺激になり、自分が追求したい分野ができたら大学院に進学して突き詰めていくのも良いなと考えるようになった。

４．発掘現場とコミュニティ

私が２週間、発掘現場で作業を行った中で最も印象的だったのは、発掘の現場と地域の人々との関わりである。私はこれまで発掘現場は、研究者や専門家が研究のための遺物を発掘するという閉ざされた空間だと思っていたが、この浜中２遺跡では、現場を見学に来る幅広い年齢の方々に対して丁寧な解説が行われていた。

遺跡の中に招いて発掘作業を体験させたり、実際に遺物に触れる機会を作っていたりと、遺跡を訪れた方と遺跡を結びつける取り組みがされていた。このような経験を通じて、考古学に関心を持つ未来の研究者が生まれ､研究する際に素晴らしい遺跡が身近にあること、そして礼文島の島民の方々が、自分たちが暮らす場所には世界中の人々を引きつける魅力があるということを知ることが出来るのではないだろうか。それによって礼文島により誇りを持ち、さらに礼文島という場所が遥か昔から人々の生活の拠点とされてきたという歴史と向き合う機会にもなる。学校での授業や講演会で勉強しようというものとは違い、実際の遺物や遺跡という空間を目の前にして得た知識や関心は、写真や動画で見た情報よりも鮮明に記憶に残るだろう。博物館では写真やジオラマなどでしか遺跡を表すことが出来ないため、この遺跡のように誰でも実物を見ることが出来る環境があるのなら、活用して学びに活かすべきなのだと思った。

滞在中、１日だけ雨天のため遺跡での作業が出来なくなり、その日に礼文町郷土資料館を訪れた。北海道大学の加藤博文先生、坂口隆さん、平澤悠さんの解説を聞きながら見学することができ、一人で見て回るだけでは知ることができない情報を、専門家の方々から直接教えていただけるという贅沢な空間で、思わず口元が緩みそうになるくらい嬉しく、とても楽しかった。博物館などに訪れた人の知りたい気持ちに応えることが出来る環境の重要性を感じた。

資料館にはこれまで礼文島で発掘された遺物が展示されており、重要文化財に指定されていることで国から補助金が出るらしく、無料のパンフレットが分厚いことに驚いた。館内にはこれまでの発掘調査の様子もパネルで展示されており、現在も調査が進められているということがわかるようになっているところも、資料館を訪れた方々と遺跡の距離を近づけるきっかけになるように思えた。考古資料については充実しているという印象を受けたが、展示されている遺物がどのように使われたものなのかという情報はほぼ無く、解説を聞かないとわからない所がもったいないように感じた。学芸員課程で学んだ展示のあり方について、実際の資料館を見ながら考えることが出来た。

そして、８月９日と１０日には人形劇師の沢則行さんによるワークショップが開かれ、後日、発掘現場を訪れていた沢さんとお話しすることが出来た。私の友人が沢さんと一緒に人形劇で活躍しているため、その友人の誘いで沢さんが手がけたアイヌの神謡をモチーフにした作品を見たことがあり、その時に演出や美術に感動した気持ちが、今回のワークショップを受けたことで蘇ってきた。考古学とアートの融合が面白く、講演会や博物館となると堅苦しく感じてしまう人もいるかもしれないが、人形劇のように物語を加えて表現することで、専門的な知識が無い人でも、そして小さな子供でも親しみやすいと考えられる。実際の遺跡や遺物の現物を見るという方法以外にも、考古学とふれあうきっかけを作ることが出来るのだということを学んだ｡現在､新作の構想を練っているとのことなので、上演を楽しみにしている。

今回発掘され、ニュースになった人骨

発掘調査の様子

５．おわりに

今回の研修は、２週間という滞在期間や発掘調査、多国籍交流など初めての体験ばかりで、私にとって大きな挑戦だった。行く前は不安だったが、帰ってきた今は挑戦して正解だったと胸を張って言える。発掘調査や考古学という専門的な学びを深めることが出来たということ以外にも、多くの方々との交流を通じて、学問が、自分の大学の中だけでなく、日本中に、そして世界中に繋がっているということを実感することが出来た。広い視野を持って学ぶことの必要性に気付き、自分自身を成長させることが出来たと思う。

滞在期間中は、朝起きて支度をして遺跡に移動し発掘、さらに昼休憩を挟んで夕方まで発掘し、宿に戻って寝る支度をするという流れを毎日繰り返していたため、日が経つにつれていつ何があったのかわからなくなった。そのため、その日にした経験や発掘した遺物、発掘中に専門家の方から解説していただいたことを手帳に書き留めるようにしていた。面白いと感じた情報は頭の中に入れておくだけでなく、目に見える形で残したことで、自分の中にしっかりと蓄積されたように感じる。

私はこれまで学芸員課程の研修に参加した経験が、大学の授業で学ぶ内容の感じ取り方や課題への考え方に活かされてきていることを実感している。そして今回の経験も、これからの学びに向けられる視野を広げることになるだろう。これらの経験を、自分の研究の方向性や関心に繋げていくことができるように、目の前の課題に色々な視点から向き合えるようになりたい。

最後に、このような人生の財産となるような経験をする機会を与えて下さり、さらにたくさんのご指導をして下さった加藤博文先生、平澤悠さん、研究者の皆様、そしてそのきっかけを与えてくださった坪田芳典さん、手塚薫先生に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

礼文国際フィールドスクールに参加して

法学部法律学科２年　佐々木　理子

１．初めに

発掘の話を最初に聞いた時から、絶対に参加しようと決めていた。学芸員課程で一年間学んだことで、学芸員の仕事によりいっそう興味を持ち、法学と学芸員にどこか接点がないか探しており、この研修が自分の思考を深めてくれることを期待していた。そして元から考古学に興味があったので実際にどんな学問なのか確かめたいと思い、参加を即決したのである。また、クジラ化石のクリーニングのボランティアをしていた経験があるので、古生物と考古では作業にどんな違いがあるのかも知りたいと考えていた。フィールドスクールは考古学研究の他に、考古学に興味のある日本人学生と留学生の国際交流も目的の一つである。学生は発掘、ラボ、地域を学ぶコミュニティ活動の三つをローテーションした班活動を行っていたが、遺跡発掘のスキルを身につけたいという私たちの希望を聞いてくださり、発掘チームに入ることができた。発掘に関してまったくの初心者だったが、早い段階から測量のお手伝いなどをさせていただき素晴らしい経験になった。また、他大学の学生さんや留学生の方たちと交流しながら礼文島での生活を満喫できたのもとても良い思い出になった。これらの経験や学んだことについて述べる。

２．礼文島の風景

縄文時代からアイヌ文化時代までの遺跡は道内の各地にあるが、今回発掘した場所は礼文島の浜中２遺跡である。なぜ北海道の北端でなければならないのか、これについて事前レクチャーで説明を受けた。浜中２遺跡は縄文、オホーツク文化、アイヌ文化といった一連の時代の遺跡が地層累重に重なっており、一か所を真下に掘り進めることで時代をさかのぼることができる遺跡である。場所を支点に時間と遺物の変化を探ることができる点で、海外の研究者も注目するほどに貴重だ。また、遺跡のある場所が砂丘であるため、砂地は発掘の初心者でも掘りやすいのだ。このような特徴から考古学研究と国際交流の融合ができたのだと思う。また、夏でも冷涼な礼文島の気候が遺物の保存状態の良い原因の一つだ。確かに、発掘を行ったのは八月中旬の真夏だったが、風が冷たく雨が降ればとても寒かった。

夏であるのに礼文島の気候は札幌とは全く異なり、離島ならではの風景が数多くあった。湾のようになっている礼文島北部は遠浅の海が広がっており、遺跡もその海のそばにある。そのため、宿から遺跡に向かう道中では晴れていればきれいな景色を見ることができた。礼文島の周辺には一年中アザラシがいるそうで、島を走るバスの窓からアザラシを見ることができ、地元の学生は毎日この自然を眺めながら通学しているのかとちょっとした感動を覚えた。海の自然がそばにある礼文島では漁業が盛んで、昆布やウニ漁を生業としている人が多い。昆布を干すための空き地や漁に使う小舟が海岸に並んでおり、小さな漁港がいくつもあった。夜には暗い水平線に明るく光るイカ釣り漁船が見える。島についた初日に船泊地区のお祭りで、私たちに話しかけて下さった漁師さんは夏にはウニやアワビの漁をし、冬になるとトド撃ちをするとお話してくれた。北海道ならば鹿撃ちはよく聞くがトドも狩猟の対象になると初めて知った。これを聞き、ぜひともトド肉を食べてみたいと思いスコトン岬でトド串をいただいた。鹿

肉よりもくせが強く、常食肉にはなれないだろうと思ったのが正直な感想だ。日曜日は作業が休みだったため、坪田先生が車を出して礼文島を案内してくださった。礼文アイヌの話を交えつつ観光名所の岬や岩を巡ったのが楽しく、勉強になった。遺跡からはアイヌ文化の遺物も出土するため、礼文島にまつわるアイヌの歴史や伝承の話を聞いた後だとフィールドに戻ってから、その場で生活していたであろうアイヌ民族の様子がより身近に感じられた。

岬めぐりをする先生と生徒たち

３．現場での学び

礼文島で経験したことの中で最も面白かったのはやはり発掘作業だった。私は縄文後期の層を発掘した。１メートル四方の区画から様々な生物の骨や土器、石器、骨角器がたくさん出土し、土を少しずつ削り取りながら次は何が出てくるのかわくわくする感覚があった。

素人目には何の動物の骨か、どこの部位か、どんな形の土器なのかわからなかったが、そばにいる専門家に尋ね、その遺物に関する説明を聞けば遺物に対する興味がより深まる。特に面白いと思った話を紹介したい。一つは遺跡からよく出てくるニホンアシカの骨についてだ。縄文後期の層は動物の骨が密集して出ており、私は初め、この遺跡で暮らしていた縄文人が食糧から出たごみをこの一帯にまとめて捨てていたのかもしれないと思っていた。しかし、話を聞くと、縄文人はこの遺跡に住居を構えていたわけではなく、夏にアシカを捕りここで解体していたとのこと。遺跡から出てくる骨はほとんどが若いアシカの骨であり、夏の繁殖期に岸に寄ってきたところを狩っていたことがわかるそうだ。この話は発掘を始めてから一週間ほど経ってから聞いたので、勘違いしていた本当の事実に驚いた。二つ目は、メノウと黒曜石の石器についてで、遺跡からはどちらの素材も完成した石器が出てくるが、石器を作る過程で出てくる剥片はメノウのものだけ見つからないのだ。黒曜石は礼文島では産出しないので島の外から入手していることが分かるが、遺跡内からその剥片が見つかるということは、礼文島にいた縄文人は持ってきた黒曜石を自分で加工できたと考えられる。一方メノウは礼文島でも産出するが、遺跡内には

剥片は見つからない。完成した石器を交易で得ていたのか、礼文島内に加工技術を持つ人物が少なかったのか、浜中２遺跡ではない別の場所で加工をしていたのか。この遺跡に関してまだわからないことは多くあるが、発掘により少しずつ明らかになっていく様子を目の当たりにできてとても興味深く感じた。

私たちが発掘していたグリッド周辺

私が疑問に思ったことがすぐ解決できるプロの知識量に純粋に凄いと感じ尊敬する。わからないことを遺物が残した証拠から解いてゆく、これが現場での考古学の学びなのだろう。考古学に魅力を感じつつ発掘作業ができたのはとても貴重な経験だった。

４．クリーニング作業

遺跡から取り上げた遺物は廃校になった小学校の体育館を借りてクリーニング作業をする。私と同期は発掘班だったが、雨降りのため発掘ができなかった日が一日だけあった。その時にラボの作業を手伝うことができた。運んできた遺物をコンテナに広げて乾かしてから、竹串やブラシを使って砂を取り除く。土器と石器のみ水洗いをして乾燥棚に置くという流れでクリーニングを行う。この作業で最も気を付けなければならないのが、遺物とそれに対応する情報の書かれたカードを取り違えないようにすることだ。同じグリッドから多くの遺物が出るため、混同しやすいのだ。また、カードの情報が書き間違えていることがあり、それもクリーニング作業をする人が清書しなくてはならない。常に現場にいる自分は、遺物取り上げの際は気を付けようと思った。砂を取り除く作業はとても繊細で壊れやすい骨や骨角器は特に細心の注意を払った。遺跡から出てくる骨は化石のように骨が岩石に置き換わるほどの長い年月が経ったわけではないので脆いため、発掘中もスコップで削らないように気を付けなければならなかった。化石の場合はある程度力を入れてハンマーで叩かないと余計な岩石を取り除けないが、遺物のクリーニングには力は全く必要ない。ただ、手元に集中するので時間があっという間に過ぎてしまう点はどちらのクリーニングも同じだと思った。頁岩でできた石器は水洗いしてみるととてもなめらかで薄くなっている縁が透き通っているように見えて美しい。遺跡では土器の模様などは砂まみれで分かりづらかったが、ラボで遺物の一つ一つを間近で見られてよかった。

コンテナに広げられた遺物

５．最後に

これまで学芸員課程の研修には、新ひだか町から始まり、奥尻島、石巻文化財レスキュー全てに参加してきたが、今回礼文島で学芸員の仕事よりは研究者の仕事に密着できたことがこれまでとの最大の違いだった。学芸員は自らの専門分野を持ち、それに関する博物館の資料の保護ややってくるお客さんに知識を伝える仕事をしており、これらを達成するためには資料の扱い方、展示の工夫、人とのコミュニケーションなどがマルチに求められる。これらの事を今までの実習で知ることができたが、学芸員の仕事が成り立つのも自らの専門分野があってこそ。学芸員であり一人の研究者でもあるのだ。礼文島で研究者の方から発掘に関する技術的なことや遺物からどのように情報を得て研究するのかを学び、大学院生の方とは大学院でどんなことをするのか、お話を伺ったことで様々な進路のうち新たな道を見つけることができた。博物館に勤める経緯は人それぞれだがその過程でどんなことをすればいいのかわかってきたように思う。

礼文島に着くまでは二週間もあると感じていたフィールドスクールだが、振り返るとたったの二週間であったように感じる。いつもと異なる人と環境の中で二週間過ごしたことは大きな自信になった。これから先、新たな環境に放り込まれることがあるかも知れない。その時にフィールドスクールでの経験が活かされるだろう。

巡り巡って私たちに話がきたフィールドスクールであり、紹介してくださった手塚薫先生に感謝しています。そしてお互い助け合いながら過ごすことのできた先輩方と同期も二週間ありがとうございました。今回フィールドスクールに参加させて下さった加藤博文先生、二週間私たちの生活をサポートしてくださった坪田芳典さん、遺跡発掘のノウハウを教えて下さった研究者の方々に感謝申し上げます。

礼文の自然と国際交流

工学部生命工学科 3 年　野間　梨衣奈

１．はじめに

私は、2017 年 8 月 7 日～8 月 12 日の期間、礼文国際フィールドスクールに参加し、北海道大学や海外からの留学生と共に礼文島に滞在した。私は生物学や化学系が専攻の学科で、学芸員課程を履修していて、生物学の知識を考古学に生かせないのかと考えていた。考古学は人間の歴史を研究する分野であるが、その研究には生物学の知識が欠かせない。しかし、工学部の研究室には考古学を研究している人はおらず、生命工学科では学芸員になるのは難しいのかなと考えていた。そんな時、坪田芳典さんからこの礼文国際フィールドスクールの話を聞き、現場で考古学を学ぶことで自分の専攻と学芸員が結びつくのではと考え、この研修に参加するに至った。

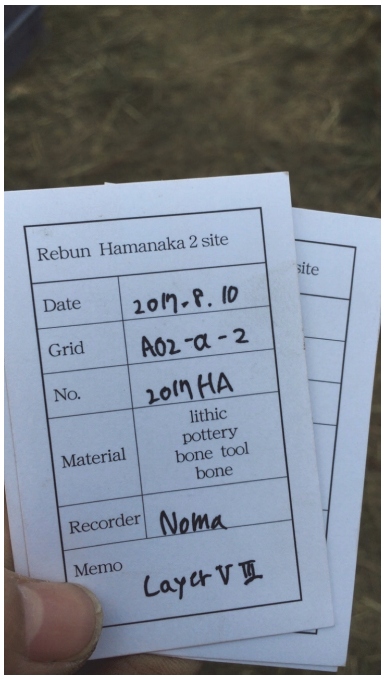
２．研修と他学生との交流

私は他大学の学生と共に、3 つあるうちの一班のメンバーとして研修を行った。1 日目、私の班は廃校になった船泊地区の小学校に設置されたラボで出土品洗浄作業を行ったのだが、指導してくださる方に日本人が居らず英語の説明を何とか理解するしかなかった。日常生活のルールを聞くなら何となく理解できるが、土品の洗浄なんて今までやったことあるはずもなくすべてが初めてのことであったので、身振りで教わっても 7 割くらいしか理解できなかった。見よう見まねで歯ブラシを用いて土を落とし、大きめの石器や骨には番号を振り、カードと一緒に袋に入れる作業をした。地道な作業は得意なので、いざ覚えてしまうと作業中は熱中しており、わからないことがあるときは戸惑いながらも身振りで質問した。

2 日目はコミュニティという、礼文島の各地を見て回るというものであった。1 日目のラボはそれぞれが個人で作業していたので班員で交流はほとんどなかったが、この日は班員と交流する機会であった。班のメンバーに北海学園生はおらず、最初は戸惑ったが、次第に北大生と交流を深めることが出来たと思う。しかし、留学生とはなかなか打ち解けられなかった。北大生に英語が得意な方がおり、その学生を介して会話していたりしたが、自分自身、出会ったばかりの北大生とどこまで距離を詰めたらいいかわからず、その留学生と北大生の輪に入っていくことが出来なかった。宿泊場所が違ったこともあり北大生は北大生で、留学生は留学生で固まって、北大生は英語ができるので留学生とも話していて、一人だけ学園生で人見知りのわたしは孤立してしまった。英語が出来ないのと、北大のほうが知識が多いという偏見のせいで自分に自信をなくしてしまったのだと思う。

3 日目の発掘調査作業は北海道大学アイヌ・先住民研究センターの平澤悠さんが指揮をとっていたので日本語で話す人も多く、安心した。発掘方法や発掘物に関する知識は全然なかったが、縦に一気に掘らず周りと高さを変えずに徐々に掘っていく方法や、掘りながら

でてきたものが何の破片かを聞いて、魚の骨であったり、土器であることから私の掘っていた区画周辺が今でいうキッチンにあたるものだということなど、貴重な体験と知識を得ることができた。



どこで発掘されたものなのかを記載するカード

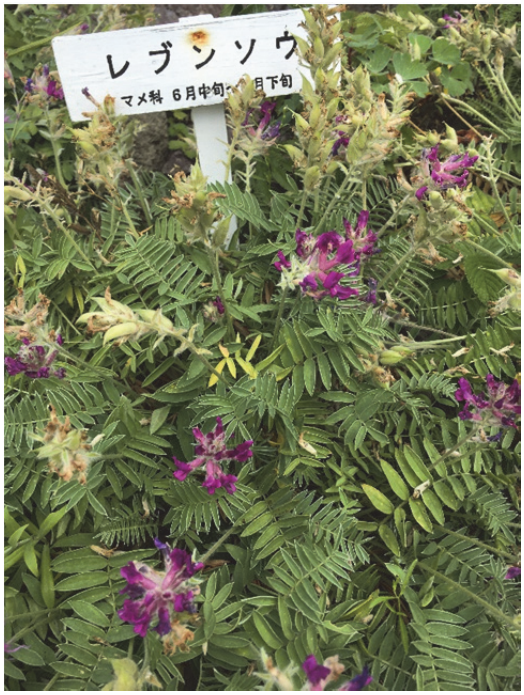
洗浄前の発掘物を発掘地点ごとに分けたもの

洗浄前の石器

洗浄後の遺物（骨）

3.　島の自然

本学にわざわざ足を運んでくださった北海道大学アイヌ・先住民研究センターの加藤博文先生と岡田真弓先生の事前レクチャーによって、島の自然が独特なものであるということをうかがっていたが、実際に滞在してみてそれを実感した。高い建物や、大きな山がないことなどにより空が広く見えることもその一つである。クマが生息していないので、森林のそばに住宅街があったりもした。また、礼文島固有種の植物もある。滞在最終日前日の 8 月 11 日、私は午後、ラボには参加せず礼文の自然を観光した。レブンアツモリソウなど、島固有の植物を見たいということも今回のフィールドスクールに参加する目的であったので、ガイドブックに開花ピーク後でもレブンアツモリソウが咲いていると掲載されていた高山植物園を訪れた。浜中 2 遺跡から久種湖の周りを歩いて高山植物園にむかったのだが、その際、すれ違った島民はおらず、車も 2 台しか通らなかった。その日は山の日で祝日であり、晴れていたのにもかかわらず、人が全然いなかったので礼文島の人々の休日の過ごし方と札幌に住んでいる私では違うんだなと感じた。もしくは、今回滞在した近辺とは違う場所に島民が集まる場所があるのかもしれないとも考えた。高山植物園は料金を払う場所が屋内のみであり、植物園自体は屋外であった。私以外に来園者がいなかったこともあり、植物園のスタッフの方がつきっきりで話をしてくれた。レブンアツモリソウの開花ピークが 5 月下旬～6 月下旬だったため、咲いていなかった。スタッフに伺ったところ、ガイドブックにあるように開花ピーク後も咲いていて、私が訪れる一週間前まで一輪残っていたようだ。非常に残念である。レブンソウやレブンウスユキソウなど、ほかの礼文固有種は見ることができた。



礼文島固有種のレブンソウ

礼文島は山がないので空が広く見える

４． まとめ

今回、礼文国際フィールドスクールに参加し、学んだことは多かった。研究者は似た分野の人々で交流していることが面白いなと感じた。当たり前のことと感じるかもしれないが、年齢や趣味、言語が違う人々が集まって発掘調査をしているのである。服装一つとっても全然違う人々が発掘した遺物についての説明を聞いて感心しているのである。わたし自身も研修メンバーの一員であることが不思議であった。知らないことばかりで感動してばかりであった。その感動や知識の共有を参加者全員でしているのはとても感慨深かった。研修を終えての反省点は、もっと研究者や学生たちと交流すればよかったということである。言語の壁や、学校の違いから少し遠慮してしまいあまり交流が出来なかった。私が滞在したのは 6 日間で、そのうち作業などをしたのが 4 日間のみであり、このフィールドスクールの期間いっぱいである 8 月 21 日まで滞在していたならもっと踏み込んだ交流ができたのかなと思う。興味を持ったものについていろいろ島内を訪ねて回ればよかったとも思った。何もかも知っている考古学者なんていないし、発掘も知識の共有によって成り立っているので、知識がないことを恥じなくてもよかったのではないかと感じた。英語に関しても同様である。英単語は全くわからないわけではないので、なんとなく何を話しているかは分かったはずである。それなのに　英文はわからないから話せない、文法を間違えていたらどうしよう、などと完璧に返さなくてはと思ってしまっていた。今回の研修で適応力のなさを痛感させられた。

考古学を学びたいという理由で研修に参加したが、それ以上に様々な人との関わり方について学ぶことが多かった。この経験は将来、様々な場面で考えさせられると思う。

最後に、礼文国際フィールドスクールでの研修を提案してくださった坪田さん、フィールドスクールの総責任者であり、私たちを快く受け入れてくださった加藤先生や平澤さんに感謝、御礼申し上げます。

新ひだか町博物館での実習を終えて

人文学部日本文化学科２年　赤坂　潮音

1.　はじめに

平成２９年９月３１日の朝８時、大学へ集合し、バスで今回の実習先である新ひだか町博物館へ向かった。２～３時間ほどかかると事前に説明を受けていたが予定よりも早めに到着し、ごく一部ではあるが新ひだか町内を見ることもできた。このたびの実習では図書館が併設されている地域の博物館から学ぶことが非常に多く、多様な博物館の在り方というものを考える良い経験となった。

2.　館内見学とクリーニング作業

まずはじめに新ひだか町博物館の館内を見学し、基本展示資料や運営形態、地域との交流などの説明を受け、私たちの質問に職員の方々から回答をしていただいた。お話の中で、図書館と併設することで得られるメリットが挙げられており、利用者層の異なる施設を併設することで、集客が見込みやすいことや、企画・活動に幅が持てるという解説を聞き、地域や時代に合った博物館が求められていると実感した。

館内を見学した際、エントランスではちょうど古本市が行われており、来館者や職員等が持ち寄った古本を展示し、気に入ったものがあればどれでも持ち帰ってよいという催しであった。提供された本は、小説から雑誌、漫画に至るまで様々であった。

続いて施設内の見学では、冬の期間雪が少ない新ひだか町ならではの施設構造や、少々手狭な敷地面積を補うため、館外に収蔵庫を設ける工夫などがなされていた。もう使われなくなってしまった幼稚園や倉庫などの施設が簡易的な収蔵庫として利用されており、温湿度や光量などの管理が比較的容易な資料が保管されていた。館外収蔵庫では資料リストに使用する写真を撮影する設備も設けられており、様々な作業を行うことが可能であった。

展示室は常設展示室と企画展示室の２種類があり、別々の入り口から入場する。常設展示室には廃校となった小学校の教室の一部を再現した展示があり、学校にまつわる資料を実際に手に取って閲覧することができる。これは親世代が自分たちの過ごした環境を思い出し懐かしむとともに、子世代へ文化の継承が行われる仕組みになっている。また、常設展示室で一際目を引くのが、桜並木をイメージした垂れ幕と大きなディスプレイである。桜並木で有名な二十間道路に見立てたもので、地域と密着している館ならではの展示だと感じた。また、展示室内に学芸員から直接話を聞けるデスクが設置されていたが、利用されることがほとんどないため、来館者がもっと気軽に利用できるような工夫が必要であると思った。

続いて、館内バックヤードを案内していただいた。常設展示室から中に入り、重い扉を開けると、常設展示や企画展示の関連資料などが大量に並んでいた。こちらでも資料の写

真撮影や、記録作業などが行われるようで、道具類で少々狭く感じた。床に置かれていたり、壁に立てかけられているものや、大型の脚立などもあり、移動の際には細心の注意を払った。

館内収蔵庫は温湿度をある程度自動で調整してくれる珪藻土の壁と、木製の棚で作成されていたが、資料に与える影響が少ないものを使用しているとのお話があった。また、入室の際には、靴を専用のスリッパに履き替える必要があり、前室で衣類の汚れ等を落とさなければならない。当然のことではあるが徹底した衛生管理が行われていた。

館内見学ののち、藪中館長や蜂屋さんの指導の下、資料のクリーニング作業を行った。閉校となった学校や個人から寄贈された農機具や生活用具がほとんどであった。私は中に熱した炭を入れて使用するアイロンのクリーニングを行った。非常に古いものであるため、資料全体が錆で覆われていた。金属のブラシを使用して錆を落としていくのだが、どこまできれいにするか、という判断が非常に重要になってくる。今のままでは何の資料なのかわからない。しかし、その資料が使われていた痕跡というのも非常に重要な要素である。また、行き過ぎたクリーニングは資料を傷つけかねないので、力加減や、磨き加減など職員の方に何度も確認しながら慎重に行った。クリーニングを終えると資料カードを作成するのだが、このほかにも様々な資料があり、ほとんどが初めて見るものであった私たちは、資料の用途やなぜこのような形状を取っているのか調べる過程で、当時の生活や環境についても学ぶことができた。

古本市の様子

バックヤードの様子

資料クリーニングの様子

アイヌ民俗資料館

3.　他施設の見学

新ひだか町博物館での実習が一通り終了し、私たちは館外収蔵庫や、地域交流センターピュアプラザ、新ひだか町アイヌ民俗資料館を見学した。館外収蔵庫に関しては前述の通りである。地域交流センターの２階には町民ギャラリーという展示スペースがあり、そこでは新ひだか町の馬に関する展示が常設されていた。開拓時代の貴重な資料から、競馬などの現代の資料がそろっていた。競馬の優勝旗や木馬、そのほか様々な馬具が実物資料として展示されているほか、他博物館や市民交流施設、展示に関連する施設のパンフレットがおかれており、複数施設を回って、より深い学習を行うことができる体制が整っていると感じた。

続いてアイヌ民俗資料館を見学した。館内に入ってまず目を引いたものが大きな船である。その奥には住居を模したスペースがあり、中に入ることができた。このように間近で資料を見ることができるので、細部まで観察できた。私が特に興味を持ったものが、衣類の展示方法である。壁やパネルなどに掛けたりつるしたりといった展示方法が一般的であるが、アイヌ民俗資料館では前面と背面両方がガラスの展示ケースに展示されており、正面や背面を見ることができるのはもちろん、側面を同時に見ることができるため、衣類の構造や、特徴的な模様のつながりがわかりやすくなっている。このような展示形態がもっと取り入れられると資料の見せ方にも幅が持てるのではないかと感じた。

4.　終わりに

今回の実習で訪れた新ひだか町は３つの都市が合併して成立したという特殊な経歴がある。新ひだか町の博物館として、それぞれの地域の歴史や特色を尊重した展示を行わなければならない、とのお話を聞き、地域に根差した博物館ならではの取り組みを学ぶことが

できた。資料のクリーニング作業を通して、ボランティアの方や職員の方から資料を入手してから収蔵・展示に至るまでの実体験や、市民の方から直接寄贈された際のお話など普段なかなか聞くことのできない貴重なお話を聞くことができ、博物館資料を新たな視点で見るきっかけを得ることができた。博物館というと、展示にしか目がいかないことが多いが、館が行っている取り組みや、特徴的な設備などにも目を向け、その博物館の本質を見失わないように今後の学芸員課程の講義に活かしていきたいと思う。

このたび、お忙しい中、私たちの指導に親身になって当たっていただいた藪中剛司館長、蜂屋忠信さん、新ひだか町博物館の皆様に心より感謝、御礼申し上げます。

新ひだか町博物館での研修を振り返って

人文学部日本文化学科２年　山本　ももか

１．はじめに

学芸員課程で博物館資料保存論を履修していた私は、平成 29 年 9 月 30 日(土)から同年 10 月 1 日(日)にかけて新ひだか町博物館での研修に参加させていただいた。新ひだか町を初めて訪れた私は緊張していたが、新ひだか町博物館の皆様の親身で温かな対応に緊張が解れた。今回の研修では、主に資料のクリーニングや資料情報カードの記入を体験させていただいたほか、館内の見学をしながらお話を伺うことができ、多くの貴重な体験をすることができた。

２．資料のクリーニング作業

2 日間にわたって私は資料のクリーニング作業を体験させていただいた。今回クリーニングした資料は廃校になった小学校から新ひだか町博物館が譲り受けたものだ。1 日目、私はまず初めに、一緒に研修に参加した学生と分担をし、金属製アイロンに付属する部品のクリーニング作業をした。錆をブラシで落とす作業をする際、キレイにしすぎないことが大事であるということを教えていただいた。その理由は、生活感を残しておいたほうがよいということだ。その作業は私が思っていたよりも遥かに力と時間を要する作業であると感じた。

次に、農機具の資料の泥を落とす作業をした。先ほどの資料とは違い、木製の資料もあったため、その際には水に濡らした雑巾を用いた。見かけよりも付着している泥の量が多く、拭いても拭いても雑巾が泥で真っ黒になるといった状況だった。最初は驚いたが、とてもやりがいを感じる作業だ。根気よく作業することが必要であったように思う。重い資料や刃物を扱う際には怪我の無いよう特に注意をしたり、用意した水もすぐに汚れてしまうので汲みなおしたりと大変な面も多かった。しかし、資料のクリーニングが終わった時には達成感を味わうことができた。資料の性質に合わせてブラシは異なる種類のものを使用すること、木製の資料にはブラシではなく雑巾を使うことなどのご指導の下、作業を行った。また、資料に付いているタグは、その資料をどこから受け取ったのかが記載されているため、外さずに作業を行い、時には資料を記録する際に自分で名称を考えなければならないこともある、というお話を聞くことができた。

2 日目のクリーニング作業で私が担当した資料には、細いワイヤー上の部分があった。このような部分は機械では錆を落とすことができないため手作業で行う。初め、金属製のブラシでこすっていたが細い部分はうまく錆を落とすことができなかった。そのため、よりきめの細かいブラシに変更したところ効率が上がったのを覚えている。更に作業していくうちに、くるくると回しながら粗めのブラシでこすった後にそのきめの細かいブラシでこすると、より錆が落ちやすいと感じたので 2 種類のブラシを使って作業を進めることに

した。小さな発見ではあったが自分なりに工夫することができたと思う。

アイロンの錆を落とす様子

農機具の泥を落とす様子

３．資料情報カードの記入

2 日目のクリーニング作業を終えた後、資料情報カードの記入の体験をさせていただいた。資料情報カードに選んだ資料を計測した結果とその資料のスケッチを描き、分からないところは本で調べたり、職員の方にお聞きして記入を進めた。私が担当したのは「穀物さし」という資料である。この資料は、俵詰めにされた穀物の品質検査を行い、等級を決めるための穀粒を抜き取る時に使う道具だ。資料の寸法を計測する際に測る人によって誤差がでてしまう。そのため、なるべく誤差が小さくなるよう、資料に適した計測具を見つけるためいくつか試すことにした。初めは手探り状態だったが、私はこの資料には曲線があるため、直角の定規を用いると正確さが増すと考えた。スケッチの際には、この資料が鉄製で硬いものであるということが伝わるよう光沢を意識して描くように心がけた。

資料情報カードの記入をする様子

４．館内の見学

展示室や企画展示室のほか、写真室や特別収蔵庫、搬入口、学芸員室などの普段あまり目にすることのできないバックヤード、屋上まで見学させていただいた。写真室の壁は反射しないよう灰色の壁になっていた。特別収蔵庫は 20℃、湿度 70%に保たれており、珪藻土の壁であり、壁が呼吸することで湿度調節をするということを学んだ。また 24 時間空調がきいていて、棚は結露防止のため木製であった。屋上には 700 人ほど入るスペースがあり、万が一津波が発生した時に利用される。海から近い新ひだか町に住む人々にとって災害時のことを考えると重要であると思う。資料が大切なのは勿論だが何よりも人命優先であるというお話も伺った。いざという時に避難できる施設があるということは人々に安心感を与え、人命を守ることにも大いに役立つ。

館内を見学させていただいた中で、私が特に印象深く感じたのが、展示室にある周りとは変わった雰囲気を漂わせる昭和の学校の教室を再現した展示である。校歌を聴くことができるほか、この展示の右側にはアルバムなどの資料が沢山ある。この土地に縁のある人ならば特に、そうでなくとも、まるで当時にタイムスリップしたかのように、訪れた人が思い出し懐かしむことができる展示だ。私も思わず席に着きたくなった。また、展示室には学芸員がいるカウンターが設置されているが、客が逃げてしまい中々質問してこないという悩みを抱えているというお話も伺うことができた。

展示室の天井が高いことも印象的であった。開放感のある一方で電球の取り換えが大変であるという問題点もある。天井から通されたバナーは桜色で統一され壁などにも桜色が多く見られた。とても美しいと感じたのと同時に、あらゆるところに新ひだか町のシンボルである桜を組み込むことで私のように初めて新ひだか町を訪れた人でも、新ひだか町といえば桜というイメージを結び付けやすくなると思った。デザインにもこだわることの大切さを改めて感じた。

５．おわりに

今回の研修を通して、私は譲り受けた資料が展示されるまでの流れや、保存・展示において具体的にどのようなことが行われているのかを学ぶことができ、実際に自分の目で見ることによって学芸員や博物館の役割に対する理解を深め､改めて意識することができた。新ひだか町博物館で研修させていただいた２日間は貴重な体験ばかりで、充実していたと感じている。最後に、お忙しい中このような研修の場を提供、ご指導してくださった藪中剛司館長はもちろんのこと、蜂屋忠信さんを始め新ひだか町博物館の皆様、引率してくださった手塚薫先生に心より感謝、御礼申し上げます。

展示室を見学する様子

バックヤードを見学する様子

ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授　手塚　薫

ミニミュージアムは、博物館経営論の一部の時間を使い、展示会を企画し、実際にミニチュア模型を制作する試みである。制作は講義外でも自宅や学芸員課程実習室で継続される。現実と遊離したユートピアを出現させて終わりという簡単な課題ではない。現実のミュージアムは公益性を有し、活動の成果を入場者数や収益のみで判断してはならない一方、その経営を担うには経営資源を最大限に活かし、透明性を保つことも求められる。制作にあたり、こうした現実の葛藤を十分視野に入れてもらった。

> 博物館に携わる者は、博物館が蓄積した資料や情報を人類共有の財産として、展示や教育普及活動など様々な機会を捉えて、広く人々と分かち合い、新たな価値の創造に務める。

これは平成 22 年度の文部科学省の委託を受けて、財団法人日本博物館協会がまとめた『博物館倫理規定に関する調査研究報告書』の行動規範７.「展示・教育普及」にある一文である。経営資源の５大要素は、ヒト、モノ、カネ、情報、時間とされる。優れた企業ではさらに、数値化できない価値観のような要素をも重視する。マッキンゼー＆カンパニー社が提唱するソフトの４Ｓ（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの３Ｓ（戦略、組織、システム）は相互に補い合って組織の価値を高める。ソフト要素は人の価値観や感情がかかわり、変更が容易ではなく、一方のハード要素は経営者の意思や企業努力で再構築がしやすい。マ社では「共有された価値観」を、最重要な「S」に据えている。「共有された価値観」は、組織に所属する全メンバーの行動の規範になる考えかたであり、「ビジョン」と「基本理念」から構成される。

ミニミュージアムでは、なによりも新たな価値の創造を重視する。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標とし、「基本理念」はそれよりやや抽象的で長期的な展望とした。この２つが組み合わさり「展示趣旨」（共有された価値観）になる。さらに「現状分析」することで、出発点と立ち位置の明確化を促し、現時点での課題とその解決を意識してもらう。国内外の社会問題にとらわれ過ぎることを覚悟したが、自在に夢を膨らませ、楽しみながら制作物（展示、ポスター、図録）の完成に到達した学生が少なくなかったと感じている。

ここでは、紙数の関係から、佳作１点の紹介にとどめる。とても丁寧な作りが印象に残った手鹿玲那さんの作品である。後輩向けに制作時の苦労も記述してもらったので次頁以降に掲載する。ミュージアム展示では、新たな価値を創造し提示することで社会に寄与することができる。社会の大きな潮流を捉えることも重要である。一方、些末なことをおろそかにすれば、どんなに深遠なメッセージも人々の心にまでは届かない。細部にこそ普遍的な真理が潜んでいる。まさしく「神は細部に宿る」である。この作品はそうした物作りの基本と楽しさを思い起こさせてくれる。

博物館経営論課題、ミニミュージアム制作を終えて

人文学部日本文化学科３年　手鹿玲那

はじめに

博物館経営論の最終課題は、一から博物館を構想し、最終的に展示室のミニチュア模型とポスター、図録を作成するというものだった。先輩方からのアドバイスを見ると、授業時間外の作業は必須、先を見越して早め早めにというコメントが目立った。実際に取り組んでみると、テストなどの兼ね合いもあってやはり時間はぎりぎりで、厳しい課題であったと感じている。

大変ではあったが､完成した時の達成感や学びは大きかった｡今回のこのレポートでは、制作過程や工夫した点や注意した点、感想などをもとにしながら記録していこうと思う。

1.　ミニミュージアムの構想

ミニミュージアムの課題の話を聞いた段階で既に考えていたのは、本のことだった。自分の好きなものだと、調べるのもやはり楽しいだろう、制作もさほど苦ではないだろうと考えた｡したがって自分の好きなもの､かつ博物館展示にできそうなものと考えたときに、読書が好きな私は安直に〝本〟と考えたのである。この段階で、あまりにも範囲が広いので、どこの焦点を絞ろうかということ、制作時間が足りるのか、ポスターをどのような形で作ったらよいのかということが不安要素としてあった。

ミニミュージアムの制作条件として、ミュージアム模型は与えられた発泡スチロールの箱のふたが閉められる範囲で制作すること、理念に基づいて図録を制作すること、併せてポスターを制作することであった。

まずミニミュージアムの狙いや検討点、図録体裁などを聞き、企画提案書を作成することになった。本というぼんやりとしたテーマしかなかった私は、とにかく範囲を絞ることから始めなくてはいけなかった。本の何について展示するのか、一つの分野をどの程度の細かさに分けるのか、どこを見てもらいたいのか。最初に自分の興味のある部分や、知識の深い範囲を一通り書き出してみた。それを見ると本の成立する以前から現代までの幅広い分野にわたっていたので、最終的に大テーマは本の歴史という無難なところに落ち着いた。それからコンセプトやビジョンを考えていくのが順当なのだが、この時点では上手くまとまらなかったため、先に章立てと内容を考えてから、引き出せるコンセプトやビジョンを考えることにした。相互的かつ臨機応変に内容を調整していく必要があったが、その時点ではそれがもっともよいと判断したためそのような思考方法を取った。この時、章内容と展示場所はおおまかに決まっていた。振り返るとおおむねその時の形のまま、完成まで持っていくことができた。

次に考えたことは、展示パネルの文章だった。図録に展示趣旨という項目があり、必須

だと考えたからだ。下書きと修正を経て清書し、それからワードに落とし込んだ。文章を書くこと自体は苦手でなかったので、第一段階としては抵抗なく進められると考えたのだ。実際、さほど時間もかからなかった。同時に必要と考えられる展示物の検索や触れることのできる展示をぼんやりと考えながら進めた。これを同時進行できたことにより、パネルの内容を調整しながら作業できたので、振り返ってみるとよい判断だったと思う。その間に材料の買い出しがあったため、壁や棚をどのようにどれくらい作るかなども考えなくてはならず、なかなか忙しかった。

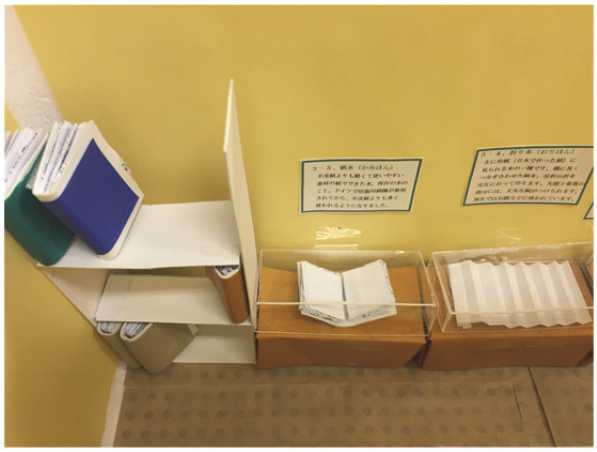
2. 制作

パネルの文章を完成させて、ようやく制作に取り掛かった。周囲よりは授業時間内では一時間ほど遅れていたと思う。周囲が入り口や壁、床の模様張りに取り掛かっているのを見て焦っていた覚えがある。

展示内容は「前書き」「１、本って？」「２、なにで作るの？」「３、本の歴史ととくちょう」「４、洋書の名前」「５、特別な本」「６、電子書籍（でんししょせき）」「後書き」で構成した。中でも２は五つに細分、５は三つ、６は二つに細分した。一部がひらがな、または平易な言葉なのは、来館者のターゲット層が親子連れであるためだ。子供にも読みやすいよう、パネルもなるべくわかりやすいかつ大人にもストレスを与えないようなラインを探った。

向かって右下に入口を開け、構想段階で決めた順路通りにパーティションを作成した。パーティションは底面にカッターで切り込みを入れ、厚紙を差し込むことで作成した。ひとまずそこで一段落すると、展示物の制作が次の主な時間のつぎ込み先になった。プラ版（上部）と折り紙（底部）でガラスケースを再現したり（画像資料１）、厚紙で本棚を作ったり（画像資料２・左側）と細かく比較的単純な作業が続いた。色鉛筆や折り紙を使っての着色も行った。考えていた通り授業内のみでは時間が足りなかったのだが、空いている時間に学校へ来て、というよりは小さく細かなものばかりだったので、自宅で作り授業時間には発泡スチロールの中に組み立てという方法を取ることが多かった。そのときに少し困ったのが全体のバランスであ

【画像資料１】



【画像資料２】

る。発泡スチロールのサイズを図らずに制作したため、幅に対して制作物が大きすぎることがあったこと、また基本のサイズを想定しなかったため展示物と展示物の大きさにムラが出てしまったことがある。前者は箱の中に組み立てる際に切り貼りをして調節し、後者はおおむねこれくらいでよいだろうとそのまま作業を続けた。振り返ってみると、どちらもそのような対処で問題なかったと思う。

加えてパネルも制作した。小さなサイズのカラーで作成し、該当展示物の壁面上部に張り付けた（画像資料１、画像資料２参照）。これを行っている人は多くなかったと思うが、見た目が実際の展示室にぐっと近づいたので、時間を作り労力をかけてよかったと思う。

以下の画像資料３が完成したミニミュージアムを俯瞰できるように撮影したものである。右下に入口があり、そこから反時計回りでの観覧を順路とした。展示室の中心には本展示の目玉となる特別な本を設置し、左壁際の空いた空間にはささやかながら椅子を設置した。人の流れを考え、一つの方向だけに進む形を目指した。左下に一部、次の展示資料への移動で反対方向への流れが生じてしまう箇所があり、それが少し心残りでもある。一巡すると最後には入口に戻ってくる、比較的スタンダードな造りになっている。パーティションは直線のみの構成で、パーティション、展示共に設置しやすく撤去しやすいような造りを心掛けた。壁とパーティションの色は、落ち着いて展示を見てもらうために揃いにすることとした。重苦しくならないように、比較的明るめな色としてクリーム色を配色。床は全体的に模様の入った明るめのものを選び、目玉となる中心の箇所はトーンの落ち着いた色合いにした。ガラスケースの台部分も茶色やベージュといった色合いでまとめ、うるさくなりすぎないよう心掛けた。また、資料とガラス台の色が近くなりすぎないようにも気を付けた。その反面、展示パネルは章ごとに色を変えて分かりやすさを優先し、展示室内の差し色とした。こうして全体的に見てみると、それぞれの意図はさほど失敗していないのではないかと思われる。

【画像資料３】

3. 現状分析、コンセプト、ビジョンの設定

制作にそれぞれわずかに先んじる形で、ほぼ同時に現状分析、コンセプト、ビジョンの設定を行った。以下に実際の目録の現状分析、コンセプト、ビジョンをそれぞれ掲載し、思考手順などを記していこうと思う。

現状分析

携帯電話やゲーム機の登場によって、以前から若者の読書離れが図書館を筆頭に様々なメディアで叫ばれてきました。そして電子書籍が普及している昨今では、読書離れではなく本離れになっています。図書館や企業も利用者や顧客のニーズによって、本と並行して電子書籍の取り扱いをしなければいけないほどになりました。ペーパーレスなどにスポットが当てられ、学術論文ではほとんど電子上での公開が大多数を占めつつあります。もちろん現在でも本の出版数はある程度はありますが、それと同時に電子書籍化して出版する作家や出版社も増えています。

電子書籍以前にもあった著作権の侵害などの諸問題は、媒体が紙から電子に変わることでひどく簡単に行うことができるようになりました。そして電子書籍に関しての制度の整備が追い付かないままに、電子書籍がスタートしたため問題は山積していることが現状です。

主に本の歴史を扱うということになったので、現状分析は現在と本の接点という形に留まったと感じている。まずは若者の読書離れや図書館の問題など新聞でもよくみる社会問題に触れてみることにした。あまりに広げすぎても展示で収集がつけられなくなると考えたので、話題が大きくなりすぎないように気を付けた。さらに、本はどちらかといえばすでに下り坂にある文化というのが研究者の分析なので、主にペーパーレス化や電子書籍などの問題が取り上げられると考え上のような形になった。展示ですべての問題が来館者の中で氷解するとは限らなくても､そのような問題を知ってもらうこと自体が大切だと考え、展示の域を少し超えるような内容も現状分析に含んだ。

コンセプト

本展示のコンセプトは、

・本の歴史について知ってもらうこと
・本について新しい発見をしてもらうこと
・本と電子書籍の比較をしてもらうこと

です。

コンセプトは短く三点にまとめた｡まず大テーマである歴史について知ってもらうこと。これは大テーマを定めた時点で決定していたことだった。〝学んでもらう〟ではなく〝知ってもらう〟にしたのは、知識の押し付けになるのを避けたいと考えたからである。コン

セプトは展示の根底に存在するものなので、意識していなくても作品に反映されてしまうと考え、言葉の使い方には配慮した。

二つ目の新しい発見をしてもらうこと。これは歴史について知るという受動的な行為の先に存在する、半能動的なものとして構成した。最新の情報でなくても、歴史という過去の分野の中にも新しさはあるということを来館者に意識してもらいたいと考えて設定した。

最後の本と電子辞書の比較は、必ずしも展示の閲覧中での思考を要求しない能動的なものとして設定した。自宅に戻って本が話題に上がった際や、退館後、共に来た友人や家族と話したときに、ふと考えてもらえたらよいと考えた。比較というのは現在と過去を知ることによってはじめて可能になる。本について、現在のことは新聞やニュースで見聞きすることが多いかもしれないが、過去の事、今回の展示では主に歴史について知るタイミングは、日常生活において多いとはいえないのではないかと考え、本展示のコンセプトに組み込むこととした。

ビジョン
・本について知ってもらう
　知らないことがたくさんあるという気付きをしてもらいたい。
・触れる展示
　何カ所か実際に触れる展示を設置し、文字情報や視覚情報だけではなく、触覚で楽しんでもらう。
・実物とレプリカを織り交ぜた展示
　ガラスの向こうではなく、実際に手に取ることができる展示の設置。

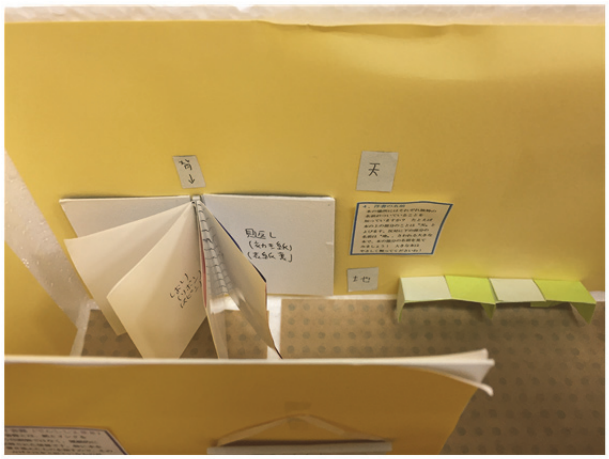
ビジョンでは、〝本の歴史〟ではなく〝本〟について知ってもらうとした。歴史だけではなく本そのものについて知ってもらいたいという制作者側の心情に主眼を置いたものとした。そしてただ知ってもらうのではなく、知っていると思っていた本について、これほど知らないことがあるのだという、いわゆる無知の知に対する気付きをしてもらいたいとした。知らなかったことについて知り、知らないことが多くあるという気付きに基づいて、自ら調べるというきっかけになればと考えた。

触ることのできる展示については、全体として歴史を扱う上、本という展示物の特性上、文字資料が多くなってしまうことが真っ先に懸念されたので、ハンズ・オン展示を組み込むことを前提にしていた。触ることができる展示は特に、「２、なにで作るの？」などに設置した。

実物とレプリカを織り交ぜた展示。これは発泡スチロールの箱が想定していたよりも小さかったため再現しきれていないが、図録には触ることのできる展示があることを明記している。ガラス越しに見るだけでは心に残らず、なにより楽しくないだろうと考え、木簡や巻子本、羊皮紙などの箇所にはレプリカを設置し、触ることができるようにした。特に模型内にある巻子本（画像資料４）と紙本の本棚（前ページ画像資料２参照）は、自由に触れることができるものとして設置してある。また「４、洋書の名前」では大きな本を設

置し、触れられるようにした（画像資料５）。

【画像資料４】

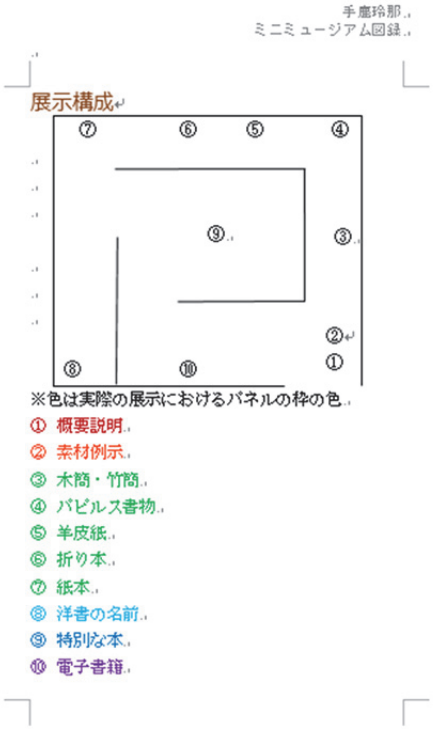


【画像資料５】

4. 図録とポスター

図録は始めから終わりまで、一息で行った。長時間座りっぱなしだったので、精神的にも肉体的にも厳しかった。ただ私は文章を書くのが苦ではなかったので、一番最初に記する「ごあいさつ」や、「現状分析」、「コンセプト」、「ビジョン」などの文章を考えるのは比較的楽だった。だが先々に用意しておいても困るものではないので、普段の生活の中でなんとなく考えをまとめておくと実際に文章に起こす時にスムーズかもしれない。

展示構成のページでは、ページ上部に展示室内の略地図を掲載した。次のページから掲載されている、説明パネルのおおむねの位置を数字で示したものだ。カラー印刷ができることを活かして、展示パネルと小題の色をリンクさせた（画像資料６）。見やすく目にも楽しいものになったと思う。

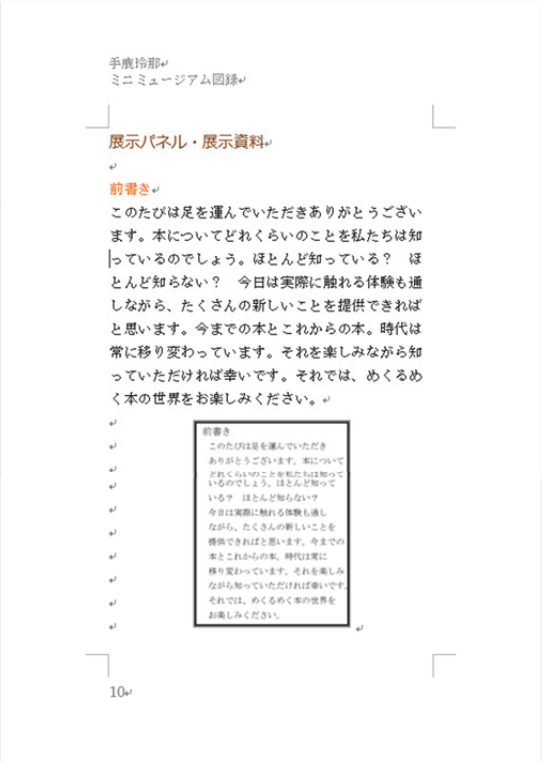


【画像資料６】

展示パネル・資料の部分にはパネルの本文を掲載した。また、実際のパネルの縮小も貼り付け、イメージしやすいようにした（画像資料７）。

今回、図録を作成する前に模型自体は完成していたので、奥付の上部部分に上から撮影した写真を合わせて掲載した。

資料目録は今回はあくまでも仮想だからと、とても豪華になっている。実際に借りてくることが難しそうなものばかりになった。内訳としては、解説パネルが十六枚、借りてきた資料が十点、その他（レプリカ資料、再現本棚、電子書籍閲覧可能端末など）十六点の計四十六点になった。ここのセクションは、使用したものを明確に決めていればさほど苦労することはないだろう。しかし、どの資料をどこの博物館からレンタルするのかということがきっちり把握できていない場合は大変な作業かもしれない。


手鹿玲那
ミニミュージアム図録

展示パネル・展示資料

前書き

このたびは足を運んでいただきありがとうございます。本についてどれくらいのことを私たちは知っているのでしょう。ほとんど知っている？　ほとんど知らない？　今日は実際に触れる体験も通しながら、たくさんの新しいことを提供できればと思います。今までの本とこれからの本。時代は常に移り変わっています。それを楽しみながら知っていただければ幸いです。それでは、めくるめく本の世界をお楽しみください。

前書き
このたびは足を運んでいただきありがとうございます。本についてどれくらいのことを私たちは知っているのでしょう。ほとんど知っている？　ほとんど知らない？
今日は実際に触れる体験も通しながら、たくさんの新しいことを提供できればと思います。今までの本とこれからの本。時代は常に移り変わっています。それを楽しみながら知っていただければ幸いです。それでは、めくるめく本の世界をお楽しみください。

10

【画像資料７】

目録は基本的に脳内にある考えを、文字という視覚的な情報に落とし込む作業だ。作業が難いか易いかは、事前にどれだけ思考が練られているかに直結している。そしてそれがそのまま、目録の分かりやすさや説得力などに繋がっていくと考えられる。手や道具を使って模型を作ることと、頭で考え言葉を操って目録を作成していくことを、違う時間で同時進行していくのが効率的かと思う。ポスターは、パソコンに四時間ほど張り付いてようやく完成させた（画像資料８）。デザインはもともと苦手なので難儀した。とりあえず、〝本展示〟という展示名と、場所と日時と時間を記した。場所は実習室に設定し、日時は当日でないほうがよいかと思ったので、年を二年戻した。時間に関しては博物館が開いているであろう時間を設定した。必要情報だけではあまりにもスペースが余ったので、まずは画像を入

【画像資料８】

れた。本に関するものをフリー素材で探しバランスを見て配置。上部の全面が画像だと重たく感じたので､内容を思わせる文を入れることにした｡中央に配置した展示名の下には、キャッチコピーとなるような文も入れた。また、〝本〟の文字は一色に統一し、全体的には茶色、オレンジ、黄色などの色合いでまとめた。なお、作成ツールはワードである。

おわりに

このミニミュージアムを通して学んだことは、企画の作り方だと思う。何を軸に、何を伝えたいのか。それを明確にして自分で言葉にするというのは普段からやっていることなのだが、現状分析やコンセプトなど普段は考えないような規則性にそって記述するという部分が難しかった。だがその分良い経験になったと感じた。どの層に、どんな展示で来館者には何をどうしてほしいのか。最も効果的な展示方法は何か。考えれば考えるほど、いろいろな案が浮かんでは欠点が見つかる。組み合わせてみたり一部を削ってみたり、実際に作業をしている以外の時間でも課題について考えている時間が多かったように感じる。

この課題では常に同時進行をしていたので、短期間で模型、図録、ポスターの三つを発表できるほどに仕上げることは、テスト期間も相まってなかなか苦しかった。先輩方も言っており最初から何度も述べているように、こればかりはなにごとも早め早めの行動を常に心がけるしかないと思う。そのために、模型や目録の完成日を具体的に決める、この一時間にはここまで完成させるなど、自分なりに目標を持つことが有効ではないかと考えられる。

また、このように振り返りの機会をいただけたことは、とてもありがたい経験だった。制作している最中ではただただ多い課題をこなすのに苦心して辛かったが、振り返りによって内容を整理しそれぞれの繋がりを今一度意識することができた。それぞれのセクションはそれぞれ干渉しあっている必要があり個々だけでは不十分である。全体を貫く筋となる考えを持つことがやはり必要だと感じた。いわばいかに説得力を持たせるかということであり、自分の考えをいかにつまびらかに他者に伝えられるかという能力である。またこのような考え方や力は、これから先も重要になってくる考え方ではないかと思われる。卒業論文を自分で見直してブラッシュアップしていく際や、就職をしてからより利用していくこととなるであろうＰＤＣＡサイクルの中など、これから先の道で必ず役に立つ日が来るのではないかと感じている。何事もやり終えたらただ評価だけを見るのではなく、自分なりに振り返りや改善点を探してみるのもよいと学ぶことができた。

2017年度　博物館概論 / 博物館資料論　講評

北海学園大学講師　　水崎　禎

本学（北海学園大学）にて学芸員課程の科目を担当させていただくようになったのは2012（平成24）年度からである。「博物館法」（1951）の改正により学芸員課程省令科目の手直しが施され、それに伴う現行の学芸員課程省令科目は 2012 年度より施行されている（博物館法施行規則 1955、附則 2009）。このような背景のため、私の個人的な想いではあるが、奇しくも学芸員課程の新たなスタートと共に、北海学園大学での学芸員課程省令科目を担当させていただくことになり、本学の学芸員課程には特別な想いがある。

早いもので、既に6年もの時が経過したが、その間に『博物館概論』、『博物館資料論』、『博物館経営論』、『博物館資料保存論』を担当させていただいた。これらの科目の中でも『博物館概論』と『博物館資料論』は2012年度から継続して担当させていただいている。

『博物館概論』は学芸員課程の第一歩となる科目であるため、学生には「博物館とは何か」ということについて、しっかりと意識できるようになってもらい、他の学芸員課程省令科目に取り組んでもらわなければならないので、常にその役目を念頭に置いて授業の構成を考えている。

『博物館資料論』は科目タイトルの通り博物館のコアとも言える博物館資料についての科目であるため、博物館資料を適切に管理したうえで、効果的に活用するために博物館資料を多角的観点から捉える力を養えるような授業構成を心がけてきた。

学生にとっては「博物館と学芸員」について真っ白なカンバスの状態で好奇心と不安と共に前期の『博物館概論』から始まり、続く後期には『博物館資料論』でより専門的な内容へチャレンジすることとなる。私にとっては、このように第一歩から前期・後期と通年で担当させていただくことにより、各学生の理解度の経過を感じ取ることができるので、非常に有り難い。中には後期の『博物館資料論』を受講するに至り急速に博物館についての理解が深まる学生もいる。

さて、2017年度の『博物館概論』であるが、特に終盤で盛り込んだトピックに変化があった。終盤（第11～14回）の講義タイトルは「博物館の種類、および形状」、「日本の博物館の形態」、「海外の博物館の活動事例」、「日本の博物館の活動事例」となっているため博物館関連の旬な話題に言及する機会が多い。

私の感覚によるものであるが、日本では1990年代半ば頃から博物館の役割において教育機関であるという点が強調され始めた印象がある。博物館が生涯学習というキーワードに絡めた活動を意識してアピールしていた時代といえる。

このような時期を経て、ここ数年間（2010年代）は博物館の存在意義を主張する際のポイントに変化を感じる。「地域の博物館」というキーワードが強調され、地域住民のための活動や、地域住民・団体と連携した活動が多くみられるようになった。また、地域外に対

しては地域の情報発信という役割も加わった。この背景には日本の景気が影響していると考える。地域の活性化のために全国各地で様々な取り組みが試行錯誤される中、ツアーリズムに力を入れる傾向が感じられる。ユネスコによる世界遺産の認定についての話題が世間を賑せ、地域の遺産が地域住民レベルから意識されるようになった。この地域の遺産を扱う機関の一つとして博物館の活動が注目されるようになったと考える。これに伴い、フランスのアンリ・リヴィエールによって提唱されたエコミュージアムを参考とした構想や活動事例が日本各地で多くみられるようになった。加えて、SNS を活用した広報活動も博物館の新たな活動として定着してきている。

このような博物館を取り巻く状況の変化に対応し、講義ではエコミュージアムにならった活動についてのトピックが増えている。さらに第 4 回目の講義「学芸員とは？」にて言及するトピックも変化してきた。学芸員の役割において地域を意識した活動を考えることができる資質と、これらの活動に対応できるスタッフィングの重要性は以前から講義で述べてきたが、より現実的に学芸員の在り方をイメージしやすい話題の選択肢が充実してきている。

続いては 2017 年度の『博物館資料論』であるが、やはりこちらも博物館活動の現状に対応した話題が盛り込まれた。地域遺産としての資料、体験学習としての資料、モノ資料とアーカイヴなどにおいては、資料の扱い、解釈、保存、活用などにおいて、これまでよりも強調し、多くの実例に言及するようになった。

これらの変化に加え、2017 年度の「博物館資料論」ではこれまでとは異なる想いで取り組んだ講義がある。「一次資料と二次資料」についてと、「美術資料の解釈と活用」についての講義である。ゴッホによる浮世絵の模写などを題材とするのが私のこれまでの定番のスタイルである。

そんな私をそわそわさせたのが北海道立近代美術館で開催された『ゴッホ展～巡りゆく日本の夢～』である。ゴッホ展の広告で掲載されているゴッホが模写した浮世絵（渓斎英泉による「雲龍打掛の花魁」）は、まさに私の講義の導入部で言及している実例である。さらにゴッホの模写による歌川広重の浮世絵二点（名所江戸百景「亀戸梅屋舗」「大はし あたけの夕立」）も展示のメインとなっているようで、これら二点の浮世絵も上記の英泉の作品と共に私の講義の導入部で言及している。これらのゴッホによる模写については、これまで多くの美術研究家の方々によって述べられてきており、私もそれらの研究を参照させていただいた。しかし、私に余計な心配を抱かせたのはゴッホ展の開催時期であった。北海道立近代美術館で開催された札幌展の会期は 2017 年 8 月 26 日から 10 月 15 日であった。この期間はちょうど大学の夏休み中に始まり、私がゴッホによる模写を題材として言及する第 4 回目の講義の頃までである。「ゴッホ展の内容をそのまま授業で使った」などとあらぬ誤解を招きはしないかと不安になったのだ。という訳で、これまでの美術館訪問とは異なる想いと共に視察も兼ねてゴッホ展へ通った。

結果としては、各機関による教育手段の違いを自身が直結した出来事で実感できたという大変有意義な体験となった。「ゴッホが影響を受けた日本の浮世絵」、或いは「ゴッホに

影響を与えた日本の浮世絵」というテーマについて、インフォーマル・ラーニングの場である美術館と、フォーマル・エデュケーションの場である大学とでのアプローチの違いを当事者として体感できたのである。ここで得た感覚は、今後の学芸員課程での授業で活かしていきたい。

このような出来事があった中、今年度の『博物館資料論』の授業を無事に終えた。4 名の学生のレポートを次頁より掲載させてただいたが、それぞれの興味の対象をダイレクトに感じ取ることができて興味深い。15 回の講義の回数は博物館資料について伝えるには十分な回数であるとはいいがたい。よって、講義では応用できる知識と考え方を養えるよう心掛けた。掲載レポートの選択に於いても、授業で得た知識と考え方を自分なりに最大限に活かして応用する姿勢が伝わったレポートを選択させていただいた。もちろん他にも熱意が伝わったレポートがあるが、掲載する際の体裁の変更、ページ数などの事情により 4 名の掲載にとどまったことをご了承いただきたい。

学生には授業で学んだことをここで終わらせず、これから受講する科目でも応用する姿勢を持ち続けてもらいたい。

博物館資料ドキュメント　『丸メガネ』

人文学部日本文化学科１年　　夛田　あみ

※本レポートでは､眼鏡についての報告を行うため､初めに眼鏡の各部位の名称を示す。

・丁番 ＝ フロントとテンプルを繋ぎ、開閉するパーツ
・テンプル ＝ 着用時に耳に掛かるパーツ
・鼻パッド ＝ 着用時に鼻にあたるパーツ
・ブリッジ ＝ 左右のレンズを繋ぐパーツ
・モダン ＝ テンプル先に装着するカバー
・ヨロイ ＝ リムとテンプルを繋ぐパーツ
・リム ＝ レンズを固定している枠

〈参考〉
メガネスーパー「メガネ各部位の名称」
https://www.meganesuper.co.jp/glasses/knowledge/parts/
（2018 年 1 月 21 日(日) 23:59　アクセス）

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

資料名：丸メガネ　　質　量：19g
材　質：リム／鼻パッド…樹脂　　製造国：不明
レンズ……ガラス　　製造元：不明
他パーツ……金属　　製造日：不明

本資料は、人が掛けた際に、テンプル先が耳の付け根を囲い込む「ケーブルテンプル」や「縄手」と呼ばれるテンプルを持つことから､「縄手メガネ」と呼ばれることが多い。また、この「ケーブルテンプル」は、明治期以降の日本や西欧における古来貴金属製のメガネには、よく見られたそうだ。しかし、このテンプルは、極めて耐久性に乏しいため、現在では数社のメガネ会社でしか製造されていない。また、現在では、テンプル先にモダンといわれるカバーを装着させ、掛け心地を良くする工夫が広く普及しているが、かつての眼鏡は、本資料のように、モダンがなく、金属のままであったそうだ。

素材は､リムと鼻パッドが樹脂､レンズがガラス､他のパーツは金属であると思われる。金属パーツの中、ブリッジとテンプルの付け根側に半円を整列させたような模様、テンプル先に縄を巻きつけたような模様が入っている。また、本資料のレンズを覗いてみた所、レンズを通す前と見え方に変化がなかったため、本資料のレンズは、度が入っていない、もしくは非常に弱い度数のレンズであると考えられる。

次に、本資料の質量は 19g であり、所有者が他に所有している現代の眼鏡の質量を測量した所、その平均が 23g 前後であった。よって、本資料は、比較的軽量な眼鏡であるといえるだろう。

また、製造年代・会社はともに不明だが、本資料が収納されていたメガネケースの上蓋に、「札幌 水野のメガネ」と印字されていることから、水野メガネ創業年の 1897 年(明治 30 年)以降に製造された可能性が極めて高い。さらに、現在水野メガネでは「縄手メガネ」の販売を行っていないことや、リムの変色から、明治～昭和期間に製造・使用されていたと考えられる。

前段で触れた付属のメガネケースについては、黒色の別珍で包まれた折り畳み式のケースである。内部も同じく別珍だが、こちらは紺色であり、上蓋中央に金色で「札幌 水野のメガネ」という印字がされている。

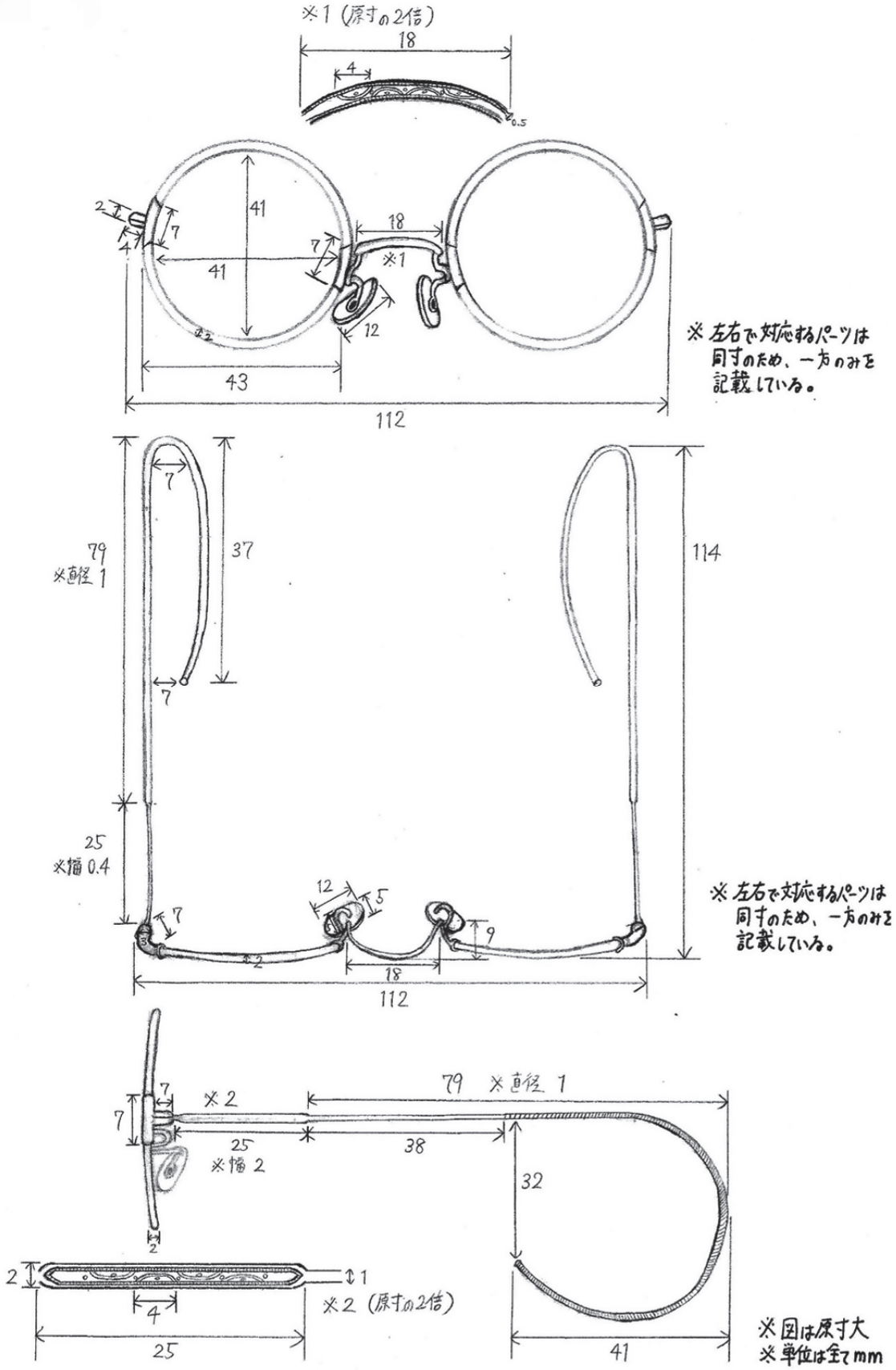
オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

本資料は、2016 年 6 月 28 日(火)～6 月 29 日(水)にサッポロファクトリーホール(札幌市中央区北 2 東 3)で開催された、北海道骨董ジャンボリー実行委員会主催「第 13 回北海道アンティーク・骨董ジャンボリー」にて所有者が 2,500 円で購入した。

当催物は、約 30 の業者が出店をする道内最大のアンティーク・骨董品展示即売イベントである。このように数多くの業者が出店する中、所有者が本資料を購入した業者は、札幌市豊平区と江別市に実店舗を構える「アイラン図」であった。その業者スペースでは、古道具や家具等が販売されており、陳列風景は、包装がされずそのまま机上にある商品から、包装がされた上でガラスケース内に陳列している商品もあった。そして、本資料はそのガラスケース内で陳列している商品の一つであった。また、本資料と並んで陳列していたのは、ブリキの小物入れ等のアンティーク雑貨であったと記憶している。

本資料の購入動機は、本資料最大の特徴である「ケーブルテンプル」の物珍しさに惹かれたためである。しかし、本資料は、メガネというもはや体の一部の役割を担うような品であることから、元所有者の霊的要素が移っているのではないかという感情を所有者が抱き、購入に関して数時間悩んだ末、入手した資料である。また、入手後、所有者は、やはり本資料の元所有者のことが気に掛かり、本日まで、所有者宅の押し入れで他のアンティーク雑貨と共に収納していた。

イラストレーション（Illustration）



付属品（眼鏡ケース）

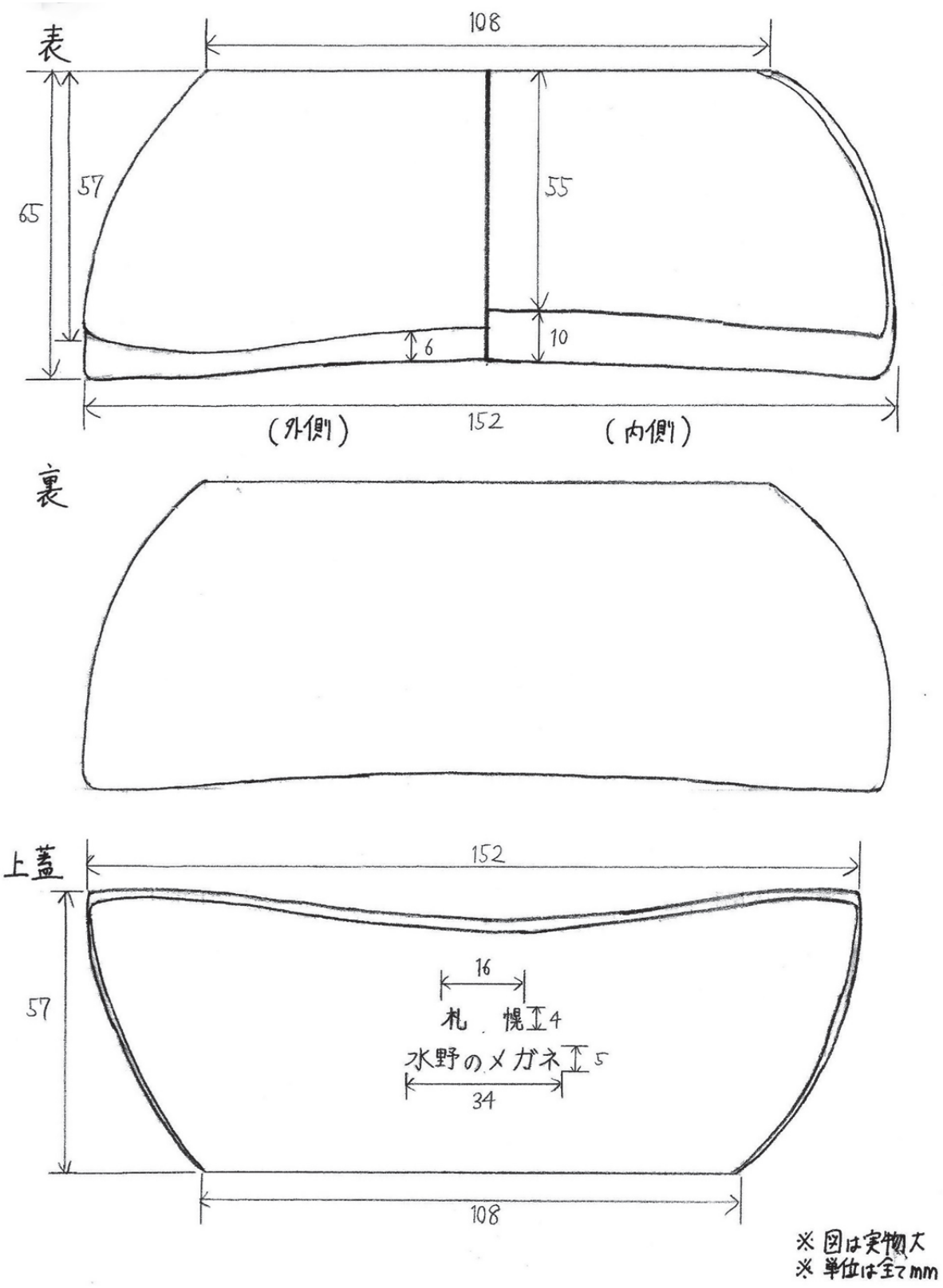


表
108
65
57
55
6
10
(外側)
152
(内側)
裏
上蓋
152
57
16
札幌
4
水野のメガネ
5
34
108
※図は実物大
※単位は全てmm

コンディション・レポート (Condition Report)

全体的に資料の状態は良くない。

1 点目に、右目側の丁番が緩んでいる。さらに、丁番付近にねじ穴がないため、ねじを締め直すことで、丁番の緩みを修正することは不可能である。

2 点目に、リムが変色し、レンズとリムの隙間には埃や汚れが目立つ。リムの変色については、ブリッジに近づくに連れて黄ばみが強くなっている。 また、右目側のヨロイ直下部分と、左目側のヨロイ上方部分に、1mm 程度の黒色の汚れが付着している(図 1)。なお、汚れの程度は、特に右側が甚だしく、レンズ下方には、レンズとリムの隙間からレンズの方へ汚れが膜のように広がっている。(図 2)。

3 点目に、両レンズに 0.5mm 程度の傷が入っている。右目側は、レンズ中央とヨロイ付近の計 2 箇所、左目側は、レンズ上方に 2 箇所、中央に 1 箇所、下方に 2 箇所の計 5 箇所に入っている。

4 点目に、左目側のブリッジが緩み、左目側のリム及びレンズが、不自然に前後に動く。また、その原因について、時の経過と共に、リムの樹脂が縮小し、ブリッジとリムの間に隙間が生じてしまったのではないかと考える。

5 点目に、鼻パッドが変色及び劣化している。両目側共に、縁がやや黒ずんでいるのだが、加えて、左目側には鼻パッド上方に亀裂が生じている。

なお、付属のメガネケースについては、素材が別珍であることから、全体的に埃が付着しているが、丁寧に取り除けば問題ないと思われる。

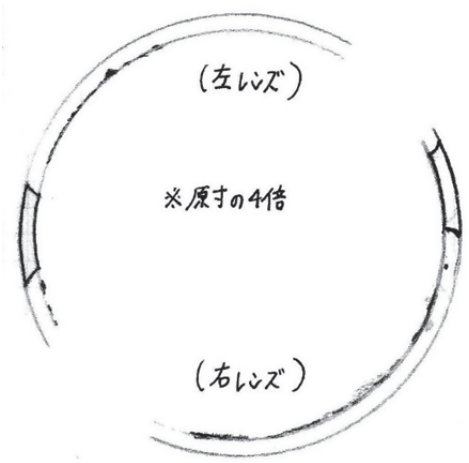


図 1

図 2

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

本資料は、金属・樹脂・ガラスの 3 種類の素材から構成されていることから、金属が錆びてしまうのを避けるため、温度は 18～20℃、湿度は 40～50%に保つ必要がある。また、樹脂は直射日光に極めて弱く、長時間当たると変色してしまうため、光が当たらない暗所で保管するべきである。

次に、本資料は、本来付属のメガネケース内に収納されていたが、ケースの上蓋を閉め

る際にテンプルが押され、やや変形してしまう。ゆえに、テンプルの変形及び劣化を防ぐために、本資料と付属のメガネケースは別に保存するのが望ましい。

加えて、レンズの破損や傷が生じることを防ぐために、レンズ部分を緩衝剤等で包装した上で保存するのが良いと思われる。

なお、付属のメガネケースについては、十分に埃及び汚れを落とした上で、上蓋を開けたまま保存するのが良いと思われる。というのも、万が一、上蓋と本体を繋ぐ金属が劣化し、ケースの開閉が困難になった際、上蓋内側に印字されている「札幌 水野のメガネ」が見えなくなると、本資料の製造元や製造年代を示す要素が無くなってしまうからである。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

本資料は、「ケーブルテンプル」が最大の特徴であると共に、細い金属で形成されていることから、極めて耐久性に乏しい。さらに、丁番との結合部にも緩みが生じているため、テンプルがリム及びレンズに対して、90°ではなく、105°程度の位置まで開いてしまう。よって、テンプルの破損を防ぐように、折り畳みは最小限にする必要がある。

次に、レンズ部分については、傷や指紋が付着しないように注意する必要がある。ゆえに、本資料を移動させる際は、極力レンズ部分触れないようにすることや、レンズに触れる際は、柔らかな布等を介すことが求められる。

また、左目側鼻パッドには、上部に亀裂が入っているため、現状を維持させるためにも、レンズ部分同様、極力触れないように注意を払うことが求められる。

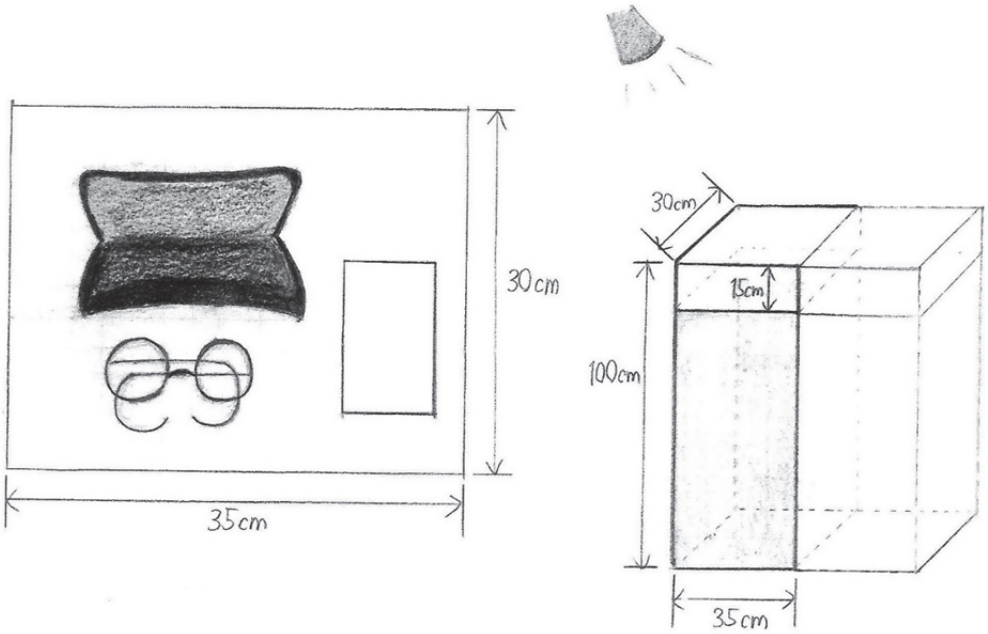
なお、付属のメガネケースについては、上蓋と本体を繋ぐ金属パーツの破損を防ぐために、開閉させる際には、静かに行う必要がある。所有者は現在まで本メガネケースと同形式のケースを使用しているのだが、強い力での開閉を行った結果、100 日も持たずに金属パーツが破損した経験が 10 回以上あるため、開閉には細心の注意を払うべきである。

エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

本資料の特徴である「ケーブルテンプル」を強調するために、本資料と一般的な丸メガネを並べて展示することを想定して、展示ケースは同じ物を用意しやすいように、極力シンプルなものが良いと考えた。そして、来館者が身を屈めて細部まで見ることが出来るよう、展示ケースは高さが 100cm で、実際に本資料を設置するガラスケースは高さが 15cm のものを想定した。

また、本資料のリム及び鼻パッドは樹脂でできており、光に弱いため、ガラスケースのガラスは、高い遮光性を持つものを採用し、本資料に当てる光源も最低限にする必要があると考えられる。さらに、少ない光でも資料がよく見えるように、本資料の下に白色や透明度の高い黄・緑色の布を引くと良いのではないだろうか。

加えて、地震による資料の破壊を防ぐために、本資料とその付属品を、それぞれ固定するべきであろう。



レーベル（Label）

丸メガネ

(Round glasses)

近代の日本で主流であったメガネ。
縄のようなテンプル(注1)を持つことから、「縄手メガネ」とも呼ばれる。しかし、すぐにテンプルが破損してしまうことから、現代ではあまり製造されなくなってしまった貴重なメガネである。
ブリッジ(注2)や、テンプルの付け根には、細かな模様が施されており、デザイナーのこだわりが感じられる。

(注1)テンプル…着用時に耳に掛かるパーツ。
(注2)ブリッジ…左右のレンズを繋ぐパーツ。

The form of this glasses was the mainstream of the glasses in modern Japan.
It's called "NAWATE glasses." Because, it has the bows like to rope. However, it isn't not produced so much because its bows is very delicate. So, it's rare glasses.

We can feel ingenuity of the designer from the bows and temple that have small design.

博物館資料ドキュメント　『木彫りの熊（熊ボッコ)』

人文学部日本文化学科 4 年　　細川　夏歩

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

資料名は『木彫りの熊（熊ボッコ)』である。資料名のとおり、木を彫ってつくられた熊の人形である。ひとかたまりの木材から彫り出された、一木造の作品である。高さは約 6 センチメートル、重さは約 14 グラムある。頭と体のバランスは、2 頭身である。顔には目と鼻と口が、足の裏には爪のようなものが描かれている。どれも黒いインクのようなもので描かれている。両腕を脚の上、お腹のあたりで組み、脚を伸ばして座っているポーズをとっている。顔は伸ばした脚と同じ向きではなく（資料を真上から見て、伸ばした脚が上を向く状態を基準として)、右側を向いている。資料を展示するにあたり、顔がはっきりと見えていることが望ましいと考えられるため、おそらく、資料の正面は、体が向いている方向に対しての正面ではなく、顔が向いている方向に対しての正面に設定すべきだと考えられる。資料の底の部分（座らせるように置いたときに置いた場所と接する、おしりの部分）には黒い楕円形のシールが貼られており、金色の文字で上から「北海道」「特選」「熊ボッコ」「意匠登録第 150788 号」と記されている。全体の形状は、角は丸く削られており、角ばっているところはなく、手に持っても馴染みやすいものとなっている。木目を生かしたデザイン・つくりになっており、はっきりと木目がわかるようになっている。着色されているようには感じられず、ところどころ焦げたような跡があることから、表面を焼くことで変色させ､風合いを出すことを狙ったのではないかと考える｡人の手で彫られたのか、機械を用いて彫られたのかは不明。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

この資料は、1997 年 8 月ごろ、当時 3 歳であった所有者に、所有者の伯母が購入し、プレゼントしたものである。当時の北海道阿寒郡阿寒町（現在は北海道釧路市阿寒町）の阿寒湖温泉の温泉街にある、とある土産物店で購入したようである。1996 年に所有者の妹が生まれたため、所有者の家族に会いに所有者の母の姉である伯母の一家が来道した。阿寒町に観光に訪れた際に、土産物店にて資料を見つけ、まもなく 4 歳になる所有者と雰囲気がそっくりだということで気に入り、購入し所有者にプレゼントしたということである。

資料名『木彫りの熊（熊ボッコ)』ということで、木彫りの熊と熊ボッコについて調査したことを記述したいと考える。

■木彫りの熊

北海道の観光土産品として知られる木彫り熊は、八雲町の旧徳川農場主徳川義親公が大

正 10（1921）年に欧州旅行の際、スイスで購入したペザントアート（民芸品）をもとに八雲の農民に制作を奨励したことからはじまります。大正 13 年、第一回農村美術工芸品評会が八雲町において開催され、スイスの木彫り熊をモデルとした伊藤政雄作の北海道第 1 号の木彫り熊が出品されました。

また、大正 15 年から旭川においても松井梅太郎によって木彫り熊が制作されはじめます。八雲の影響を受けつつ、アイヌが彫った木彫り熊として有名になります。昭和 30・40 年代の北海道の観光ブームで木彫り熊が爆発的に売れると、全道的に生産されるようになり、このころ「鮭をくわえた木彫り熊」のイメージが定着していきます。観光ブームが終わると木彫り熊もあまり売れなくなり、現在は全道的にみても彫っている人は少なくなりました。(「八雲町木彫り熊資料館リーフレット」より引用)

■熊ボッコ

熊ボッコは、北海道旭川市にある有限会社トミヤ澤田商店が運営しているトミヤ郷土民芸というショップから販売されている、木彫りの熊である。熊ボッコは、「有限会社トミヤ澤田商店を代表する木彫り民芸品」とトミヤ郷土民芸のネット販売のウェブサイトに記されている。第 1 号熊ボッコは昭和 31 年に制作され、今年（平成 30 年）で生誕 62 年となる。エゾマツ・トドマツの道産材を木取り（木取る（きどる）：建築業界のことばで、製材した木材を、使う寸法・形状に鉋(かんな)削りすること（「大工道具屋のひとりごと」[1] より参考・引用))、「製材から商品まで全て 1」から作っている。木の年輪を最大限引き立たせるため、焼き加工を入れている。製造地は北海道旭川市である。意匠登録番号第 150788 号として登録されており、また、類似意匠登録番号第 1 号としても登録されている。他には、優良道産推奨品、東北北海道工芸協会賞、郷土振興協会推奨品、仙台札幌通産局長賞、北海道優良輸出品技術賞、神戸輸出デザイン展金賞、全国推奨観光土産品を受賞しており、その他にも受賞を 8 回している。熊ボッコは様々な種類があり、ストラップやキーホルダー、大きさの違うもの、漂白して白くしているもの、親子をデザインしているものがある。資料の熊ボッコは、小サイズで、ネット販売のウェブサイト上での価格は税込 864 円である。(「トミヤ郷土民芸」[2] より参考・引用)

上記の入手経路とそれにまつわるエピソード、調査事項を合わせて考えると、熊ボッコは、昭和 31 年に第 1 号熊ボッコが制作されたことから、木彫り熊の歴史の中では比較的早くに登場しており、今日まで長い歴史を持つ。また、旭川市の会社が制作しているが、所有者の伯母は阿寒町で入手したことから、熊ボッコは北海道の各地にある土産物店で販売されている可能性があると言える。熊ボッコは、しばしば見聞きする有名な鮭をくわえた木彫り熊とは全く異なる形状・ポーズをとっており、木目を強調したデザインから、雰囲気も異なっており、差別化を図られて制作されたのではないかと考えられる。推測であるが、熊ボッコの「ボッコ」は何かと考えると、様々な意味を持つ方言があるが、なかでも、四日市市四郷地区の方言で「子供」という意味がある（「weblio 辞書」[3] より参考・引用）ので、熊の子供をイメージしているのであろう熊ボッコの由来と考えるのに相応しいので

はないだろうか。また、熊ボッコは現在においても人気があるようで、Instagram に熊ボッコについての多数の投稿がなされているのが見受けられた。

(1) http://d.hatena.ne.jp/toshikane/20110220/1298150345
(2) http://www.tomiya-s.com/eshopdo/refer/vid3-035-1.html
http://www.tomiyas.com/eshopdo/refer/refer.php?sid=ns81329&cid=ftmn&vmode=&ft_kcont=base1&vnt=n
http://www.tomiyas.com/eshopdo/refer/refer.php?sid=ns81329&cid=17&scid=0&mcid=0&key=&ct_key=&st_key=&st_keyword=UPDATE_DAY%20DESC&p=1&vmode=2&vmset=2
(3) https://www.weblio.jp/content/ぼっこ

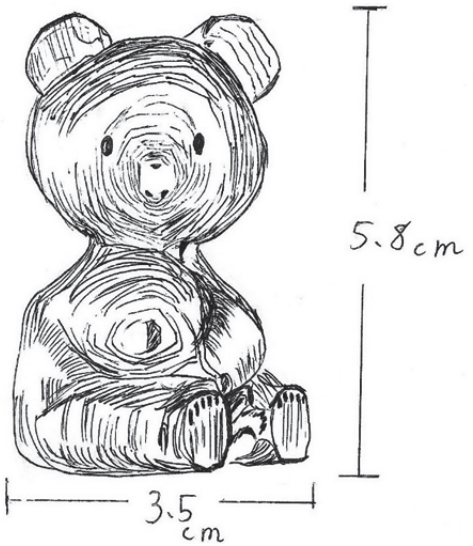
コンディション・レポート (Condition Report)

まず、全体を見てみると、彫ることで作られた溝や耳と耳の間（頭のてっぺん)、耳の周りにほこりのようなものがついている。棚の上に直に置いて、蓋などがついた外気と遮断できるようなケースなどに入れて保管していなかったためだと考えられる。ほこりのようなものがついていないところが存在するのは、その部分は資料を手で握ったり触ったりするときに直に触れる場所であるため、ほこりのようなものが付着しても取れてしまうためだと考えられる。全体的に、ところどころに大きくても約 5 ミリメートル未満の傷やへこみがある（イラストレーション参照)。これらは入手前にできたものなのか、入手後にできたものなのかは不明である。全体的には木材の年輪が感じられながらも、滑らかな手触りだが、資料底面（座らせるように置いたときに置いた場所と触れるお尻の部分）は、木材を加工した際に出た木材の特徴だとみられるが、細かな穴が多数開いている。オブジェクト・ディスクリプション・レポート-1 でこの資料の正面について先述したが、資料を正面から見て左側の耳の上部と、右側の耳の後ろ（付け根）に黒い焦げ跡が見られる。さらに、耳と耳の間（頭のてっぺん）に直径約 1 ミリメートル、深さ約 1～2 ミリメートルの穴が開いている。所有者が入手してから人為的に開けられたものではない。購入時または入手時から開いているか、入手後に虫害など何らかの故意ではない状況で開いたのかは不明。描かれている口は、経年劣化のためか、所有者がよく握っていたことによる摩擦のためか、中心部が部分的に取れている。また、描かれている爪も部分的に取れている。資料底面に貼られているシールは、経年劣化のためか、所有者がよく握っていたことによる摩擦のためか、部分的に剥がれたり擦れたりしている。

早急に補修が必要な箇所は見られない。入手時の資料の様子と現在の様子を比べると状態変化したことは想像できるが、約 20 年間所有者の手元にあったこと、その際の扱われ方（初期は握る、置いて鑑賞、その後～現在は置いて鑑賞）を考慮すると、妥当ともいえる状態変化だと思われる。今後は資料の現状維持を目指すべきだと考えられる。

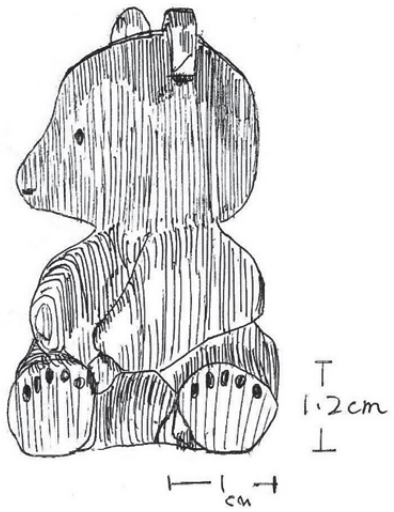
イラストレーション（Illustration）

［倍率：約 1.5 倍］



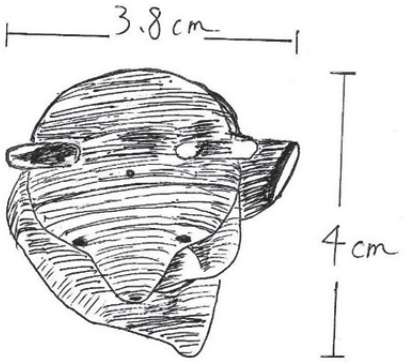
目、鼻、口はインクのようなもので描かれている
口は中心部が消えている

［倍率：約 1.5 倍］



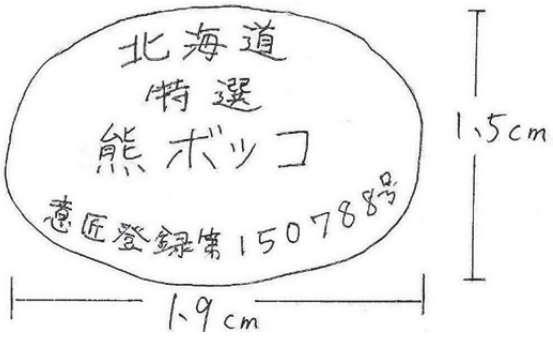
［倍率：約 1.5 倍］

［倍率：約 1.5 倍］



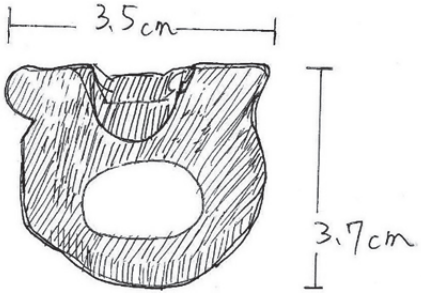
耳と耳の間に小さな穴があいている

［倍率：約 3.0 倍］



シールは実際には黒地に金色の文字で書かれている

［倍率：約 1.5 倍］



底面は小さな穴とざらつきがある

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

資料は木製のため、極端な温度や湿度、それらの急激な変化に晒される環境に置くことは望ましくない。資料の含水率や密度によるが、温度が低すぎるとひび割れの原因になると考えられるため、適切な室温の環境に置く必要がある。また、湿度が高すぎるとカビが生えたり、腐食したりすることも懸念される。そのため、適切な湿度の環境に置く必要がある。以上のことから、保存の際には RH70 パーセント以下に保ち、室温も 15 度から 25 度くらいに保った部屋に置くことで、高過ぎず低すぎない温度と湿度、急激な変化が起きない環境を実現させることが望ましいと考えられる。また、燃えやすいため、火気厳禁であると考えられる。膨張などの状態変化のおそれがあるため、水分に触れることも避けたい。

収蔵庫などで保管する際には、有害なガスを出さない材質で作られた蓋付きの箱に、中（上下四方）にクッション材を敷いて、資料は薄葉紙などの毛羽立ちのない柔らかいものでくるんで収納するのが好ましいと考えられる。空気がこもらないようにするために、箱に空気穴を開けておくことが必要だと考えられる。また、箱の中に、乾燥剤を入れておくことも必要だと考えられる。また、虫害を防ぐために、資料に影響を与えない防虫剤を入れておくことも必要だと考えられる。

ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

取り扱いの際は、手の汚れや汗・脂などの分泌物が資料に付着して汚れたり、それによる劣化を防ぐために、手袋を着用して資料に触れることを薦める。手袋の材質は、資料のささくれや欠けて溝になっている部分に繊維が引っ掛かることのないように、なるべくなら布製の手袋ではなく、天然ゴムなどの毛羽立ちのない材質でできた手袋を着用すべきである。何らかの理由があり、布製の手袋を使わざるを得ない際でも毛羽立ちの少ないものを選ぶ必要がある。資料が手から滑り落ちてしまうことを防ぐために、ビニール製などつるつるしたものは避けたほうが良いと考えられる。資料を手に持つ時、特に作業をする際には､資料を持っている感覚が手に過敏に伝わった方が取り扱いやすいと考えられるため、厚手のものではなく薄手の手袋を選ぶべきである。また、資料への影響を考慮して、粉が付着していない手袋を使用すべきである。もちろん、資料に危害を与えないような環境作り（作業台は片づける、アクセサリーは外す、ファスナーやボタンがついていない服を着用するなど）も取り扱いの際には必要である。

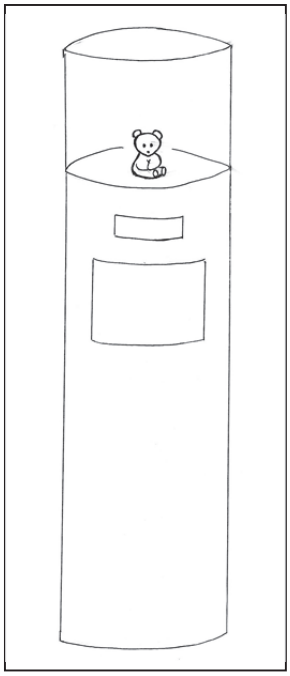
資料は木製であるため、燃えやすいので火気厳禁であると考えられる。膨張などの状態変化のおそれがあるため、水分に触れることも避けたい。油分など液体が付着するとしみになって除去しづらく、固体のものでも、細かい粒子が木目の間に入り込んで除去しづらくなるため、汚れはできる限り避けるべきだと考えられる。

持ち運びの際には、資料を保存している箱に入れたまま移動させるか、最低でも深さ約 10 センチメートルの蓋のできる箱状の入れ物にクッション材を（底だけではなく蓋や壁に

も触れるように、資料を保護する形で）入れて簡易的な持ち運び用の入れ物を作り、そこに資料を入れて運ぶ。落下や衝突を防ぐために資料を直接手で持って移動させることは避ける。

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）

●子供の目線を意識して高さ 1m 前後の円柱形の台座に透明アクリルカバーをかぶせる。
●照明は、天井の左右から資料が浮かび上がるようにスポットをあてる。
●台座の色は白にして、資料の色である茶色が目立つようにする。
●台座は、白色の毛羽立たない革のような布を敷き、安定性を図る。



レーベル（Label）

木彫（きぼ）りの熊（くま）（熊（くま）ボッコ）

●たて×よこ：　2.5cm×11.5cm
●フォント：　UD デジタル教科書体 NP（**フリガナは AR ADGothicJP Medium**）
●フォントサイズ：　28pt（フリガナは 10pt）＊印刷の都合上、書体は異なっています。
●枠・レーベル・文字の色：　黒色・白色・黒色
●理由：　ひとめで情報が入ってきやすいように、また、資料名が見やすいように、大きすぎず小さすぎないサイズを目指した。フォントは、UD デジタル教科書体 NP を選ぶことで、硬すぎない柔らかな印象を与えられることを期待した。フリガナを振ることで、漢字が読めない子供も読むことができるように配慮した。フォントサイズは小さすぎないように、また、レーベルの大きさとのバランスがとれるように設定した。色は黒色と白色に統一することで、シンプルでわかりやすく見やすくなることを期待した。

旭川のトミヤ郷土民芸が昭和31(1956)年から制作している木彫りの熊である。道産のエゾマツ・トドマツ材を使用している。焼き目をつけることで、年輪の風合いを引き出している。所有者との出会いは1997年、伯母からプレゼントされたことがきっかけである。所有者が手にした幼き頃より、木製の手触りと大きさ、可愛らしさがお気に入りの逸品である。

2019.1.22　所有者:細川夏歩

●たて×よこ：　10.5cm×14.0cm

●フォント：　AR P丸ゴシック体M（フリガナも同じ）

●フォントサイズ：　18pt（フリガナは9pt）

●枠・レーベル・文字の色：　黒色・白色・黒色

●理由：　サイズは資料名のレーベルとのバランスがとれるように、また本文が読みやすいように大きめにした。フォントは資料名のレーベルと同じように、硬すぎない柔らかな印象を与えられるよう、また本文であるため、資料名のレーベルで使用したフォントより線が細いものにした。資料名のレーベルと同じように、小さな子供でも読めるように漢字にはフリガナを振った。フォントサイズはレーベルの大きさと、情報量とのバランスがとれるようにこの大きさにした。色は、資料名のレーベルと統一して、黒色と白色で見やすくシンプルになるようにした。内容は、資料の基本的な情報と所有者のエピソードを記すことにした。基本的な情報は必要不可欠だが、所有者のエピソードを加えたのは、どんなものにもひとつひとつ物語があるということを示したかったためである。このレーベルは、木工芸品を展示の対象とした博物館での展示を想定して作成した。

博物館資料ドキュメント　『ピアノ楽譜 ― 上手になれるブルグミュラー』

人文学部日本文化学科１年　　宮崎　栞

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

資料名称：ピアノ楽譜
楽譜名称：上手になれるブルグミュラー
編集者：豊増　昇、たなかすみこ（共編）
発行者：草野貞二
出版社名：新興楽譜出版社
発行年：昭和 47 年 11 月 10 日（第 12 版）
印刷所：関根印刷株式会社
製本所：有限会社　五十嵐製本所
販売価格：350 円
所有者名（2010～2018 年現在）：宮崎　栞
旧所有者名（1974～2010 年）：宮崎美加（旧姓：松永美加）
素材：厚紙のようだがどのような素材かは不明（表紙部分）
　　画用紙のようだがどのような素材かは不明（楽譜の用紙部分）
使用年数：1974～2018 年現在
原産国：日本
サイズ：縦 30.2 ㎝／横 22 ㎝／幅（厚さ）0.4 ㎝

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

この資料は所有者が 6 年生の頃（2010 年）に所有者の母から譲り受けたものである。（以下から所有者の母＝旧所有者として記す。）この楽譜は、旧所有者が小学 3 年生の頃、ピアノ教室に通っていた際に使用していたものであるため、おそらく 1974 年～1977 年のものと思われる。

値段は 350 円であり、所有者が使用していたピアノの楽譜の値段は 1080 円であったことから比較するととても安価に感じるかもしれないが、旧所有者の話によると購入する際に母親（所有者からみて祖母）に「高い！！」と言われたエピソードから現代とその当時（1970 年頃）の金銭価値が違っていたことがわかる。

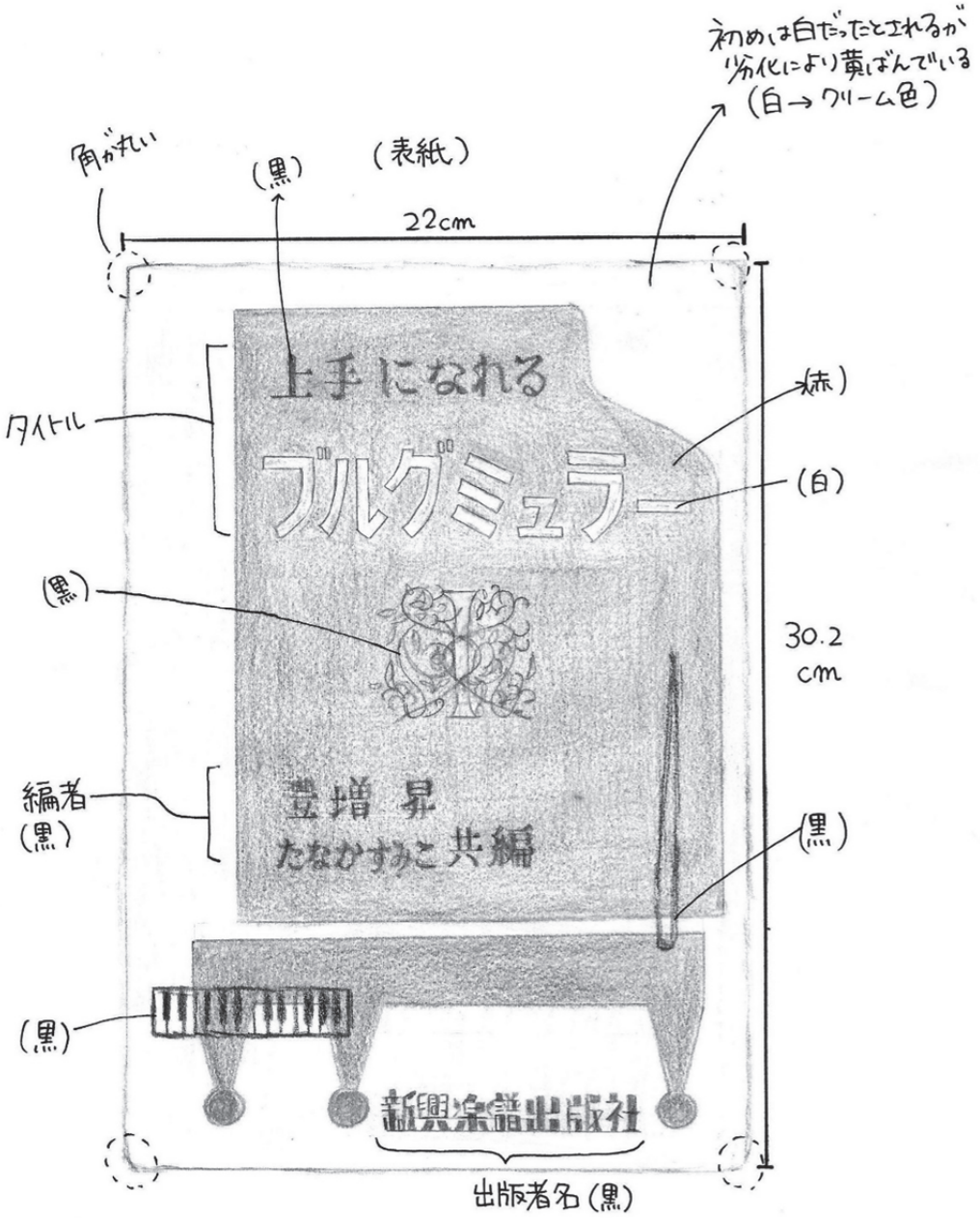
所有者が「シシリアのワルツ」という曲が好きで、弾けるように何度も練習したことや、旧所有者も実際に使用していたということから、所有者が使用していた教科書よりも愛着と思い入れがある。

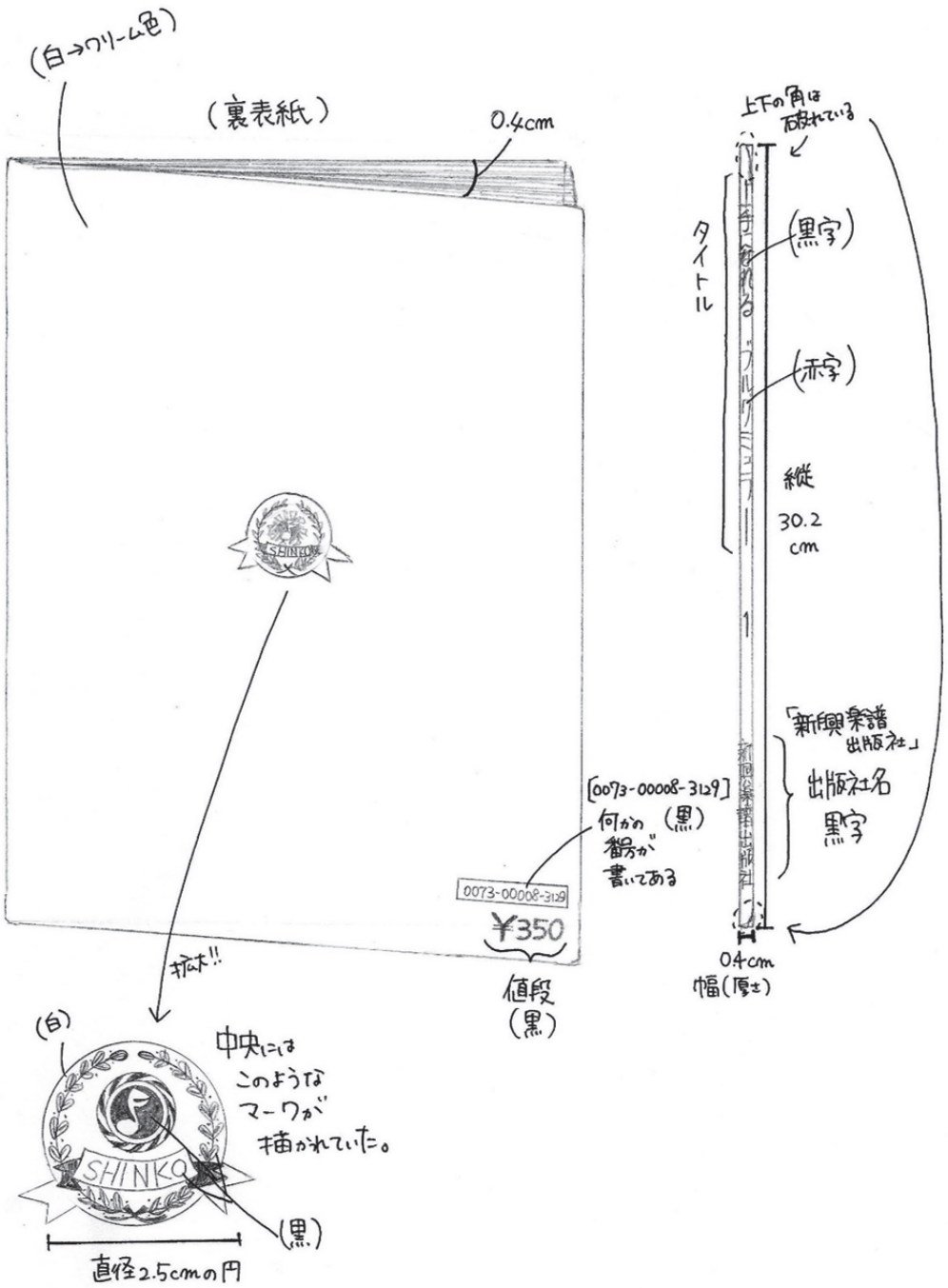
所有者がピアノを弾く際に間違える箇所が旧所有者と同じ（楽譜に先生の印が間違えたところにマークされている）であったことは実に興味深い。

時代によって変わっていくものがある中で、楽譜は何十年、古いものならば何百年たっても内容が変わらないことに関して、価値があり、博物館で展示するにふさわしいと考える。また様々な言語がある現代でも、世界中の人に共通するものとして楽譜は今後も残しておきたい資料であると感じた。

イラストレーション（Illustration）

※縮倍率は実物の 1/4





コンディション・レポート (Condition Report)

44 年前のものであるため、紙の劣化がみられる。主に表紙や紙が日焼けによって茶色や黄色みを帯びている。これらは自然光や人工光によるものと考える。旧所有者が使用していない時（1980 年頃～2010 年）は押し入れのような場所に保管されていたため、自然光や人工光の問題は少ないが、多湿による害虫の被害があるかもしれない。しかし、今のところ大きな被害は確認されていない。表紙部分のラミネート加工？されたものが剥がれていることや、何度も開いたことによるページのほつれや破れ、目印として折れた跡が残っていることが見てわかる。その他、表紙や楽譜の角がすり減って丸くなっていることから劣

化しているのは一目瞭然だ。また、譜面にはボールペンや鉛筆による書き込みがあるため、書き込みされていない楽譜と比べ、より劣化が進むのが速いと考える。

最後のページに旧所有者のものとみられる名前が書かれている。また、途中からピアノ教師による指示が書かれなくなっていることから、書かれなくなったページから旧所有者はピアノを辞めたこと、もしくは別の教本へと進んだことがわかる。

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

この資料は紙資料であるため主に以下のことに注意する。

○水→濡れると印刷してあるインクやボールペンなどによる書き込みの部分がにじむ恐れ

○火→燃えると焼失する

○光→日光による紫外線の被害や人工光による熱の被害。日焼けなど

○カビ→シミや変色

○虫→虫食いによる穴。資料の破損

○空気→ガスや湿気による変色やカビの発生

万が一燃焼した際には消火のために、水や消火剤などの粉末を使うことが予想される。燃焼した後に、水や消火剤による二次被害となり、資料に対して大きな負担をかけてしまうため、火気は最も避けたいと考える。虫食いによる穴やカビによるシミや変色は被害が大きければ何を書いているか、わからなくなってしまうため、虫やカビが生存しづらい温度や湿度を徹底的に管理する。防虫剤・防腐剤をむやみに使うのではなく、それらがガスを発生することもあるため、専門家による管理などをもとに資料を保存する。

ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

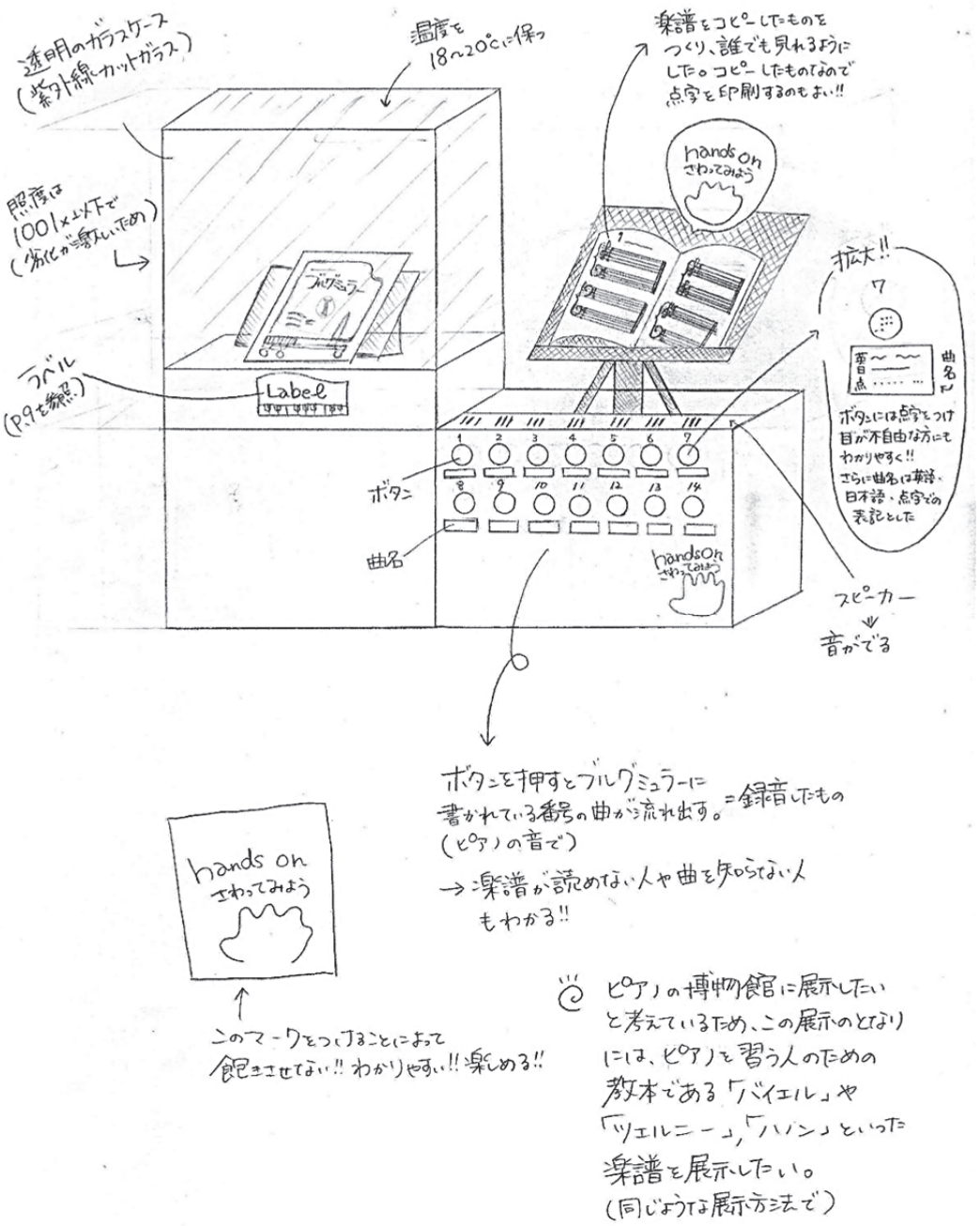
この資料は劣化によって、ページに破れがあり、そこからページがばらばらになるおそれがある。したがって、ページの角や破れている箇所を修繕する必要がある。このような冊子のようなものを修繕する際には、まずセロハンテープでの修繕を考えるであろうが、セロハンテープは長い年月が経過すると、色が黄ばんだり、剥がそうとしてもうまくはがれなかったり、剥がした跡はべたべたしたりするためふさわしくない。展示の際に影響を受けず、修繕の際には剥がしやすい専用のテープを使う。

表紙のラミネート加工？されていた部分が剥がれてきていることから、薬剤などで負担をかけないように剥がしてから、もう一度ラミネート加工をするのも劣化を防ぐ一つの方法である。

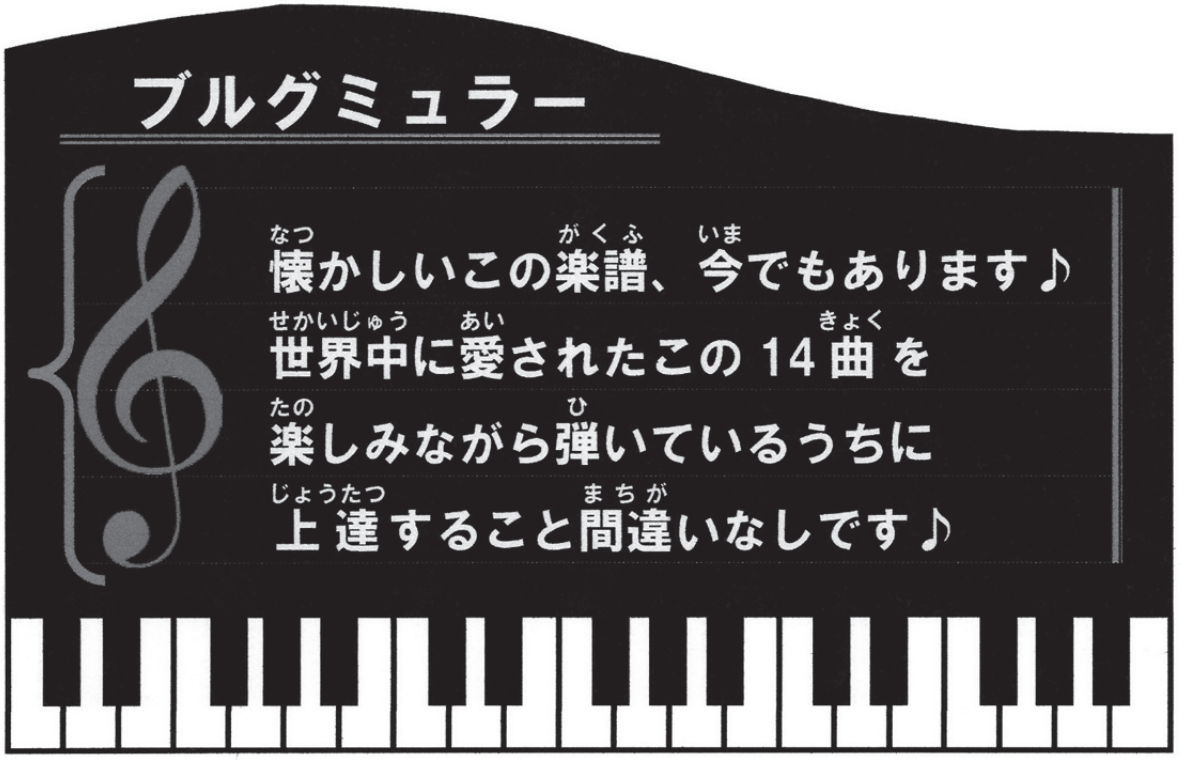
コンディション・レポート（Condition Report）でも述べたように旧所有者が使用していない間の約 30 年間は押し入れのような場所に保管されていたため、多湿による害虫の被害があるかもしれない。今のところ大きな被害は確認されていないが、害虫の卵やフ

ンを餌にしてカビの繁殖が起こる可能性や、他の資料と一緒にした際に他の資料にうつる可能性があるため、資料の取り扱いに注意する。

エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)



レーベル（Label）



ピアノの博物館にブルグミュラーを展示したいと考えているため、シンプルであるが堅苦しくならないようにピアノの形にし、譜面に文字が書かれているような遊び心があふれるラベルにした。このようにすることで、大人も子どもも目を惹くラベルとなる。

また、ブルグミュラーは、ピアノ初心者はもちろん、子どもがピアノを楽しく学ぶための練習曲が詰まった楽譜であるため、第一に子どもに読めるものでなくてはならない。よって、ふりがなをふった。

色はカラフルにすると見づらくなるため、白・黒・青の三色にとどめた。はじめは、白・黒・赤の三色と考えていたが、赤にすると文字よりも譜面のデザインの方が目立ったり、字を赤くすると黒の背景に赤ということで恐怖な印象を与えたりする。また、色覚障がいの方は赤が茶色に見えてしまう傾向があるため、譜面のデザインがはっきりとしないなどの理由から青にした。黒の背景に白字は反対色であるため誰にでも見やすいと考える。

このように、誰にでも見やすく、楽しんでもらえるようなバリアフリーなデザインのラベルにした。

博物館資料ドキュメント　『アンダルシアン・ブックカバー』

人文学部日本文化学科１年　　山田　穂乃花

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 1

■資料情報 - 1

資料名：アンダルシアン・ブックカバー（文庫本）
主な素材：牛革（外側）、ビニール（カバー内側部分）
配色：レッド（全体）、薄いチャコールブラウン（カバー内側）、
　　ベージュ（ステッチ部分、ブックマーカー）
サイズ：16.0 ㎝（縦）×24.5 ㎝（横幅全長）（通常文庫本サイズ）
品番：ＡＮ－30　ＲＥ　6342082030908（外箱シールより）
生産国：日本
製造・販売：ソメスサドル株式会社
購入店：砂川ファクトリーショップ（北海道砂川市北光２３７－６）
購入日：2011 年 7 月 17 日
価格：7000 円前後
製品問い合わせ先：東京営業所、砂川ファクトリーショップ
資料付属品：本体、外箱、製品タグ、保護シート
購入者：所有者の祖母
現在の所有者：山田穂乃花

■資料情報 - 2

◆資料名の「アンダルシアン」とは、ソメスサドル内のレザーグッズにおける種類名であり、ブックカバー以外にもフォトフレームやレザートレー、キーホルダーなどがある。
◆カバー内側の中央にブックマーカー、右側に本のページを止めておくことができる切れ込み、左側に栞を収納できるポケットがついている。
◆全体の配色は赤、ステッチ部分とブックマーカーはベージュを基調としている。
◆左側ポケット下に「SOMÉS®」の文字とロゴマークが入っている。
◆基本的に文庫本をカバーしやすいように折りたたまれた状態だが、革自体に折り目はついていない。

■資料情報 - 3（資料付属品）

◆外箱、製品タグともに材質は紙
◆外箱（資料付属品）は上蓋が緑色、下台が黒となっていて、カバーのポケット下同様の文字とロゴマークが上蓋中心に金色で印字されている。

◆製品タグ（資料付属品）の表紙には「SOMÈS SADDLE HORSE RIDING EQUIPMENT MUNUFACTURER」の文字があり、三つ折りのタグの中には、使用する際の注意点や革製品の手入れ方法が記載されている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート（Object Description Report）- 2

■入手経路、エピソード

◆この資料は、2011 年 7 月 17 日に所有者が祖父、祖母とともに滝川市の親族宅を訪れ、札幌の自宅へ帰宅する途中で、ソメスサドル砂川ファクトリー店（以下、購入店と記す）に立ち寄り購入したものである。革製品を愛好していた祖母の強い要望で購入店に向かうこととなり、当初はハンドバッグを購入する予定であった。しかし、所有者が店内を回っている間に、祖母が所有者へのプレゼントとして購入し、その後、所有者の手に渡った。

◆当時、小学校 6 年生であった所有者には非常に高価なもので、「年齢的に革製品を持っていてもおかしくない年になってから使おう」という思いから、2018 年現在まで付属の外箱にしまい、自宅の机の中で保管していた。

◆購入者である祖母からは、購入する際に「中学生になったら、もっと本を読む機会が増えるだろうから、長く使っていけるものをプレゼントしたい」という意思があったとのこと。

◆この資料のカラーはレッドだが、そのほかにもブラック、ライトブラウン、ダークグリーン、ワインの 4 色がある。購入者がこのカラーを選んだ理由として、購入店の店員に「何色がいいか」尋ねられたところ、所有者が「赤」と答えたため、このカラーでの購入を希望したという情報がある。

■ソメスサドルについて - 1（公式サイトより）

◆名前の由来 → SOMÉS SADDLE ＝ SOMMET（頂点）＋ SADDLE（鞍）

◆ソメスサドルの原点は「馬具づくり」。

◆かつて炭鉱で栄えた北海道歌志内市での人口減少に伴い、1964 年に企業誘致の一環としてソメスサドルが誕生。

◆明治以来、北海道の開拓を支えてきた馬と馬具づくりの技術を守るため、「世界のマーケットに通用する馬具をつくろう。」というモットーで、馬具職人が集結したことが企業立ち上げのきっかけとなる。

◆創業以来、製品づくりをハンドメイドで行っている。

◆現在の店舗数は、北海道内に４店舗（砂川ファクトリーショップ、札幌店、千歳空港店、大丸札幌店）東京に３店舗（青山店、銀座店、松屋銀座店）進出している。

◆本店は砂川ファクトリーショップである。

《参考》　ソメスサドル公式サイト http://www.somes.co.jp/about/

■ソメスサドルについて－２（資料付属品　製品タグより）

ソメスサドルは1964年に創業された日本で唯一の総合馬具メーカーです。

革製品の極致と言われる「鞍づくり」を中心に、手綱から大型馬車に至るまで各種の乗馬アイテムを、大自然が息づく北海道本社工場で製作しております。

また、馬具づくりで培われた、緻密で且つ大胆な技術をふんだんに生かした鞄やハンドバッグ、革小物等の製造にも力を入れ、馬具の基本である安全性と耐久性を取り入れた、ハンドメイドの逸品をお届けしています。

どうぞ「鞍づくりのこだわり」を末永くご堪能ください。

コンディション・レポート（Condition Report）

■資料本体

◆数か月に一度、箱から取り出し半分ほど蓋を開けて風通しを良くするということ以外は、本体に触れることはないため、色あせや汚れもほとんどなく新品同様の状態である。

◆基本的に箱にしまっている時間が長く、保護シートで包んでいるため、摩擦や細かな傷なども見受けられない。

◆実際に文庫本にカバーとして使用したことは一度もないため、内側のロゴマークや、ブックマーカー等にも目立つような汚れや使用した後はついていない。

◆箱から取り出す際には、手袋をつけた状態、または手を洗ってから本体に触れていたため、手の油脂や指紋なども比較的少ないと思われる。

■資料付属品（製品タグ）

◆購入当初から三つ折り状態であるため、折皺がついている。

◆タグ自体の配色はブラックに近いダークグリーンだが、折皺がついている箇所は白く変色している。

◆普段は本体同様、手袋をつけて触ることが多く指紋も少なかったが、このレポートを書く際にかなり使用したため、指紋がついてしまった。

◆材質は紙であるが、三つ折りの内側となっている部分は特に変色もなく、白いままである。

■資料付属品（外箱）

◆一番触れる回数が多いが、所有者の自宅の机の中にしまっていることが多いため、日焼け等による色あせはしていない。

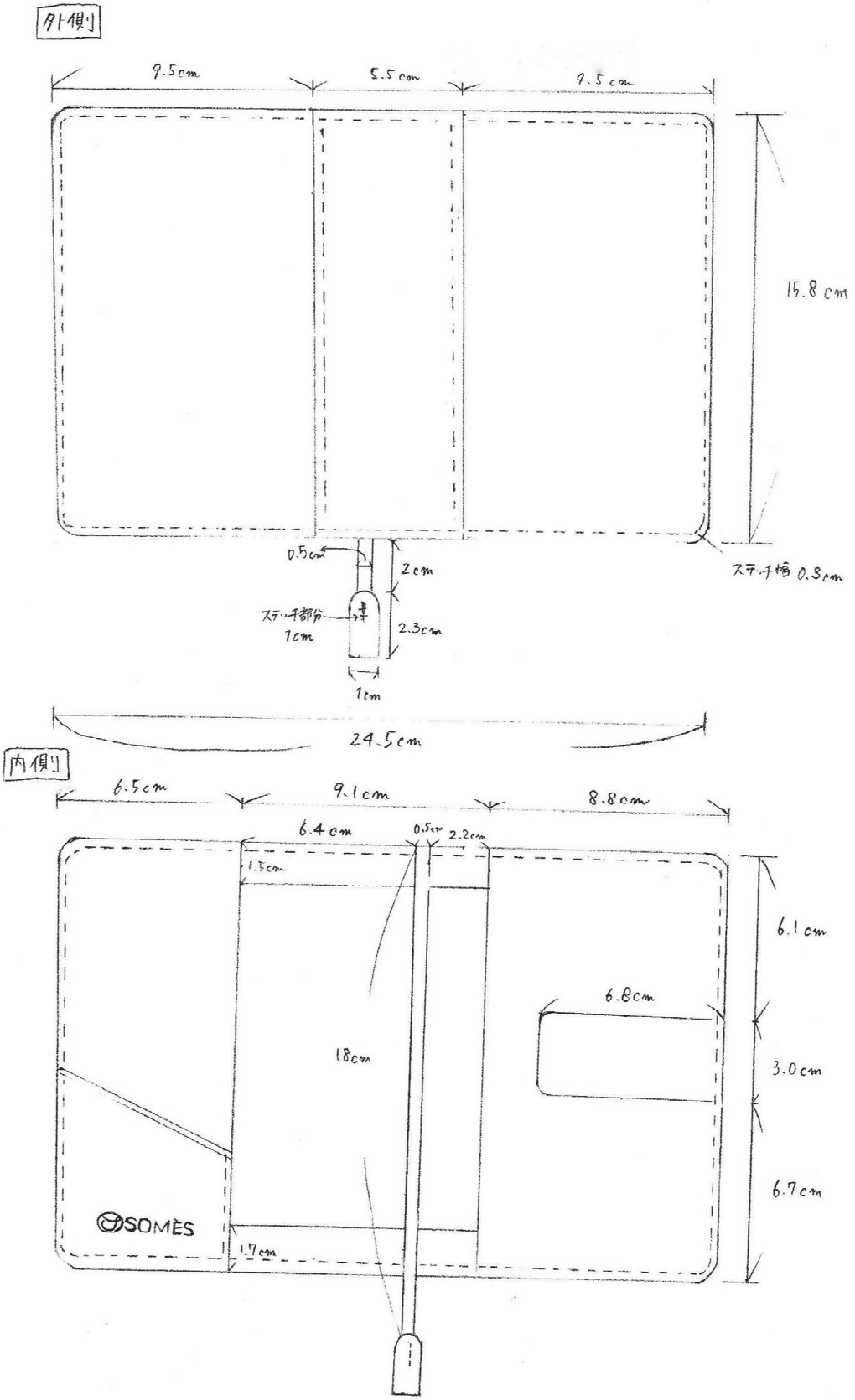
◆箱の下部は黒地のため、出し入れした際の細かい擦り傷や鉛筆の摩擦が白く残っている。

◆蓋部分には、以前取り出した際の指紋がついており、薄い黒へと変色している。

◆金色の印字部分と上蓋横の製品シールは新品同様、状態よく残っている。

◆箱内部は、汚れ、ほこり等はなく目立った傷は見受けられない。

イラストレーション（Illustration）



単位：cm　　縮倍率：1/2

リクワイアド・エンバイロメント（Required Environment）

◆極端な湿度のある所や乾燥した場所を避け、風通しの良い適度な温度の所を用意する。
◆革は天然素材で汚れを特に嫌うため､基本的に汚れや埃･塵がついていない状態を保つ。
◆本来はブックカバーとして折りたたまれた状態であるので、無理やり引き延ばしたりせず、本来の状態が維持できないような形での保存は避ける必要がある。
◆直射日光があたる場所での管理は、色落ちなどの劣化につながるため、必ず避ける。
◆革本来の風合いや耐久性を引き出すため、完全な色止め加工をしていない（製品タグの記載より）ということから、使用する際以外の摩擦等を防ぐ必要がある。
◆摩擦等により、色が衣服などに移行する場合があるため、他の衣服や布製の資料と一緒に保存することを避ける。
◆ビニール製品などの化学製品と密着すると変質・変色の原因となるため避ける。
◆資料付属品については、資料本体に近い場所での保管が必要である。

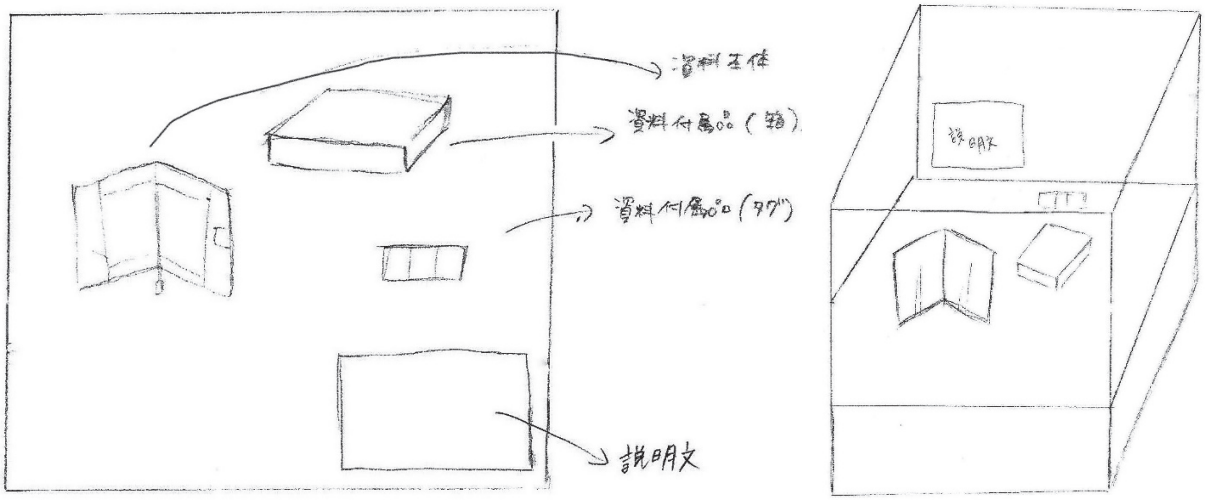
ハンドリング・インストラクションズ（Handling Instructions）

◆革製ということを考慮し、水気を避ける必要がある。万一濡れた場合には速やかに布等で拭き取り、陰干しする。濡れたままにしておくと変質・変色の原因となるため。（資料付属品　製品タグの記載より）
◆シンナー・ベンジン等を使用すると変質・変色の原因となるため、使用しないように注意すること。
◆火気に近づける、お湯で洗う等の行為も変質・変色の原因となるため、避ける。
◆万一、汚れてしまった場合には、柔らかい布等で乾拭き、またはブラッシングで汚れを落とす。
◆汚れが激しい場合には革用のクリーナーで拭き取る。
◆汚れを落とした後には、保革クリームまたは保革オイルを少量含ませて拭き取る。
◆箱や所定のケースから取り出す際には、手袋の着用をすることで、新たに指紋をつけないようにする。

エクジビット・マウント・デザイン（Exhibit Mount Design）

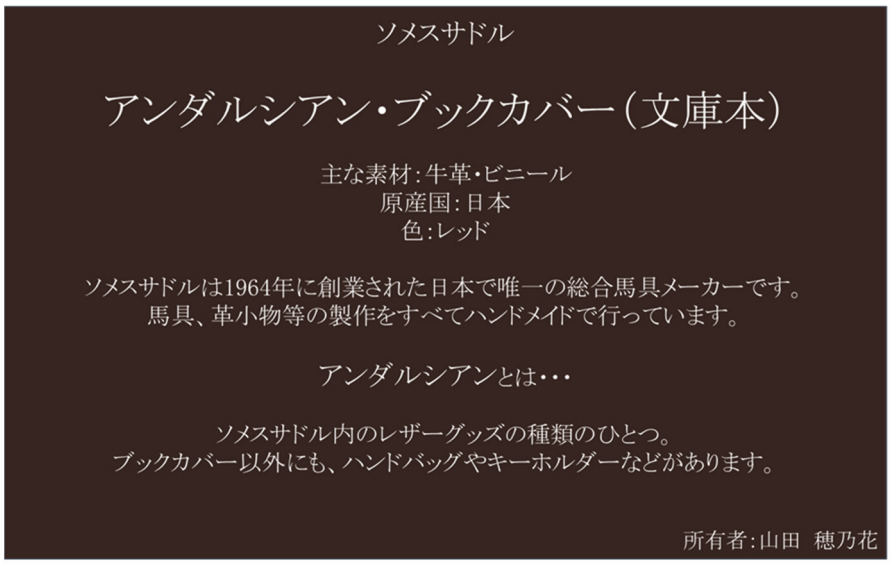
◆室内にガラス製のケースを用意する。
◆来場者が触れて指紋や汚れが付かないように、ガラスケースは密封された状態を保つ。その場合、ケース内は適切な温度や湿度になるように注意をする。
◆布などの上に直接資料を置くと色移りなどの問題があるため、ケース内では大理石やガラスなどの上に置くようにする
◆来場者に両面見えるように木製のイーゼルなどに開いた状態で設置するのもよいだろう。

◆資料付属品は隣、または近くのガラスケース内に設置する。
◆室内自体の照明は明るくてもいいが、資料に当たる光量などを調節する必要がある。
◆外からの直射日光は必ず防ぐ。



レーベル（Label）

◆資料のメインの色である赤を目立たせるため、こげ茶色をベースとした配色にした。
◆字の色は、こげ茶色に合うようにシンプルな白を使用した。
◆字体は、どんな年齢の来場者が訪れても読めるように明朝体を用いた。



◆細い線ながらも、ところどころ文字を大きくするなどして工夫した。
◆一番見てもらいたいものはラベルではないため、あえて説明文は短くした。
◆資料名にある「アンダルシアン」とは何かわからないということを想定し、少ない文字数でどういったものかを説明した。
◆ソメスサドルの説明を少し入れることで、資料だけではなく、歴史にも興味を持ってもらえるように工夫した。
◆資料付属品は、資料本体の近くに設置することを想定しているため、付属品についての説明文は書かなかった。

編集後記

２月 26 日から３月３日まで学生を引率して京都旅行に出かけた。「日本文化特別演習」という２年生以上に開講されている人文学部講義科目の一環としてである。学生たちの自由研修の合間を縫って、八坂神社から至近の、以前から訪ねてみたいと思っていた京都現代美術館を訪れた。バスで東大路通りを南下し、祇園で下車し、外国人観光客でごったがえす四条通を西に数分歩いたところが目的地である。

1981 年 11 月に開館した京都現代美術館は何必館（かひつかん）とも呼ばれる。芸術でも学問でも、人は定説に縛られると身動きが出来なくなる。そんな定説を「何ぞ必ずしも」と疑い、自由な精神を保ちつづけたいとの願いから名づけられたという。私が訪れたときには「吉仲正直展　表象への祈り」が開催中であった。館内には私以外来場者がおらず、美術館内部を心ゆくまで自由に参観することができた。まさしく都会の喧噪のさなかに出現した心のオアシスである。エントランスの中央奥で静かに私を出迎え、また帰途に見送ってくれたのはイタリアの彫刻家ジャコモ・マンズーが手がけたブロンズ「枢機卿」である。来館者を思いがけない暖かさで包んでくれる癒やしの空間がそこには確かに存在した。

3 月 1 日に会社説明会が解禁され、2019 年卒業予定の大学生の就職活動が本格的に始まっている。私の周囲にも、慣れない単独活動ですでに就活ストレスにさいなまれ、心が折れそうになっている学生も決して少なくない。しかし、話を聞く以外にこちらから支援できることは少ない。巷には就活を乗り切るためのあやしげなハウツー情報が溢れている。就活に決まりきった公式があると信じているなら、「何ぞ必ずしも」と疑ってみることを勧めたい。速成の背伸びをしても仕方がない。学芸員課程の種々の課外活動をはじめ、大学時代にどのように得がたい経験をしたかを、相手の目をみてしっかり話すことができれば自信につながるのではと思う。

手塚　薫